【完結】銃と私、あるいは放課後の時間

クリス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品は「銃と私、あるいは触手と暗殺」の番外編です。主にｉｆネタや没ネタ、本編に直接関係のない日常話などを掲載しています。

本編（完結済み）

【ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／１４２７４５／】

目次

放課後　昔話の時間　1
放課後　もしもの時間　29
放課後　お金の時間　43
放課後　メイドの時間　58
放課後　性別の時間　69
放課後　もしもの時間（2）　86
放課後　殺し屋の時間　94
放課後　鉄砲の時間　103
放課後　もしもの時間（3）　117
放課後　チョコの時間　128
放課後　カルマの時間（1）　148
放課後　カルマの時間（2）　169
放課後　親子の時間　198
放課後　蛇足の時間　223

放課後　昔話の時間

過去は変えられない。どんなに後悔しようとも犯してしまった過ちは正せない。どんなに上塗りしようとも罪は消せない。いつだって、そして今だって。

午前の授業が終わりいつものように昼休みが訪れる。私たちはいつものように校庭でランチタイムと洒落こんでいた。木陰に座り空を見上げれば枝葉の隙間から温かい日光と澄んだ青空が顔を覗かせている。

「はぁ、やっとお昼だよー」

「確かに今日は体育もあって疲れたな。というかカエデは今日もお菓子だけか。よく飽きないな」

カエデはクリームの詰まったエクレアの袋を開けながら目を輝かせている。美味そうだな……

「はい、どうぞ！」

「え？」

そんなことを考えているとカエデが徐にエクレアを半分に千切り私に差し出してきた。いきなりどうしたんだ？

「さっちゃんさん、途中から声に出てたよ」

「なっ!?」

顔に血が上る。きっと赤くなっていることだろう。あぁ、恥ずかしい……。なんで私はこう抜けているのか。昔は化物と呼ばれ誰からも恐れられていたのにな。

「おーい三人！いっしょに飯食おうぜ！」

不意に杉野の声が聞こえてきた。顔を向ければ杉野と千葉と速水がこっちに向かってきている。珍しい組み合わせだな。特に断る理由もないので私たちは彼等を交えて昼食を取り始めた。

そうやって楽しい時間を過ごしていると杉野が突然思い出したかのように私に話しかけてきた。この顔は恐らくあれだな。

「また臼井の武勇伝聞かせてくれよ」
「俺も少し聞きたい」
　予想通りだ。これだから男子は。そう思うがこれがここでのデフォルトなので今更気にしても仕方がない。私の経歴がばれてからたまにこうして昔話をせがまれるのだ。聞いても楽しいものではないと思うのだが男子はこういうのが好きだと聞く。きっと血が騒ぐのだろう。
「ちょっと、あんた達不謹慎じゃないの？」
　速水が珍しく表情を曇らせて杉野達に言い返した。普段は無表情なのでこう言った顔を見るのは珍しい。
「そうだよ。祥子話したくなかったら話さなくていいからね！」
　カエデも私の腕を掴んで同じようなことを言ってくれた。別に気にしないんだけどな。カエデはどうにも過保護の傾向があるのでいつものことだが速水がああいうのは意外だった。
「大丈夫だから。カエデ」
　カエデの真っすぐな目が私を射抜く。本当に心配性なんだからこの姉は。私は水筒から水を一口飲み何を話すか考え、そして口を開いた。
「あーこれは私の脇腹に残ってる傷跡にまつわる話でな。あれは今から三年前のことだ。中東で仕事をしてい――――」
　景色が巻き戻されていく。私は記憶を頼りに話を進めた。

「あとはこの道を真っすぐか」
　ハンドルを握りながら独り呟く。空は憎たらしいほど澄み渡り寒々しいほど真っ青な青空と切り立ったパンのような岩山が二色のコントラストを描いていた。
「本当に何もないところだ」
　運転に集中しつつも周囲の景色に目を配る。景色を見ると言う目的もあるが、それ以上に敵がいないかを探るためであった。事前の情報では向こう１０キロは敵がいないと聞いていたが、いったいどれほ

ど信用できるのだろうか。
　ボロボロの速度計はピクリとも動かないが、流れ去る景色の速度から大よそ４０キロで走っている。これならあと１５分ほどで目的地の手前に到着するだろう。横の景色を見た流れで助手席に目をやる。そこには誰もおらず代わりに大きなバックパックとＡＲ―１５が寂しく揺れていた。
「相変わらず一人か……」
　今回の仕事はこの先にあるテロ組織の作った対空ミサイル陣地の偵察、可能ならそれの破壊。依頼主は例によって政府軍に雇われたＰＭＣだ。
　要は下請けという形でここにやってきたわけだ。何でも輸送ヘリが何機かやられているらしい。ミサイルや砲撃で潰そうにも山岳地帯に陣取られたせいで砲は展開できずミサイルも届かないそうだ。
　そこで身軽で、尚且つある程度の戦闘能力のある私に白羽の矢が立った。拒否権なんてあるわけがなく、また拒否する気もなかったので私はこうして一人車を走らせている。
「それでも私一人にやらせるか」
　普通ならこんな危険な任務は少なくとも万全のバックアップの下でやるものだが、私の雇い主はコストと社員の命を秤にかけてコストを取ったらしい。高給取りとは言え所詮少年兵、中東の危険地帯で身寄りのない子供が一人死んだところでどうとも思わないのだろう。
「まあ、世の中そんなものだ」
　ちゃんと給料を払うだけ随分とましなほうだと思う。アフリカにいた頃は本当に奴隷と何ら変わりない扱いだった。いや、奴隷のほうがまだましな扱いだと思う。少なくとも奴隷は地雷原を無理やり歩かされたりしない。
　だから働いた分だけ給料が支払われて食事もでるあそこは素晴らしいところだと私は思う。もっとも給料を貰ったところで何に使えばいいのか分からないがな。平和な国の女の子は服やアクセサリーを買うと聞いたがそんなもの何の役に立つのだろうか？
　服なんて物持ちが良くて体の動きを妨げなければなんでもいいで

はないか。平和ボケした連中の考えることはよくわからない。やはり服はデジタル迷彩の戦闘服に限る。私は自分の着ている服を一瞥して確信した。

思考のずれを直すためにおもむろに車に備え付けられたラジオのスイッチを入れる。聞き続けると洗脳されそうなナシードをバックにＤＪがアラビア語で自分達の活躍を声高に謳いあげる。どうやら政府軍のヘリを落として装備を奪ったことを自慢しているらしい。きっと例のミサイル陣地のことだろう。精々今のうちに自慢しておけばいい。

「あれ？どうした？」

そんなことを考えていると車が急に止まった。エンジン音もしない。どうやらエンストしたようだ。鍵を回しエンジンを掛け直す。だがいくら鍵を回してもかすれたセルの音が鳴るだけでタコメーターの針は虚しくゼロを指しつづけるだけであった。

「くそ、あのレンタカー屋恨むぞ」

どうやら故障車を掴まされたようだ。どうりで妙に安いと思ったんだ。トヨタだからって安心するんじゃなかった。シフトレバーをパーキングに入れハンドブレーキをかける。そしてハンドルに刻まれたロゴを殴りつけ車から降りた。クラクションすら鳴らなかった。仕方がない。ここから先は歩きだ。

「思っていたより寒いな」

標高が高いせいか微妙に肌寒い。思わず身震いする。服のサイズがあっていないせいか隙間から風が吹きこんでくるのだ。苦し紛れに首に巻いた灰色のシュマグをきつく巻き直すが焼け石に水だった。

「これが終わったら温かいところにでもいくか」

そうぼやきながら助手席のドアに周りこみ座席に積んだバックパックを背負いＡＲ―１５を手に取る。特徴的なフローティングハンドガードがＳＰＲ　Ｍｋ１２　ＭＯＤ０を連想させるが中身は市販のＡＲ―１５と何も変わらない。一応パーツは厳選したので精度は他のＰＭＣ連中が使っているものよりも数段上だがな。

歩きながらマガジンを抜き残弾を確認、再び装着しチャージングハ

ンドルを引く。金属音と共に弾が装填された確かな手ごたえを感じる。そして安全装置を掛けスコープ、オフセットレッドドットの確認を行う。

「問題なしと」

どちらも問題ないことを確認しサプレッサーとバイポッドを触り緩みがないことを確認。スリングを使い肩に掛けホルスターに差し込んだＰ２２６を抜き同じように装填を確認。あとは各種グレネード、ナイフ、無線など、大よそ戦うために必要な物を全て確認し準備完了。これでいつでも戦える。

私は死に向けて歩き出した。いつものことだった。

いつの時代も兵士ほど長い距離を歩くものはいないだろう。ＰＭＣだろうが正規軍だろうがテロリストだろうが皆等しく歩く。直接的な戦闘なんて任務の中のほんの少しの時間だけだ。もっともそのほんの少しの時間で多く者が死ぬわけだが。運が良いのか悪いのか私は今の今まで生き残ってきた。

稜線に作られた道を歩きながらどうでもいいことを考える。私より生きたい人がいた。私より生きるべき人がいた。そのだれもがほんの少しの時間で死んでいった。何故、彼等が死んで私が生きているのだろうか。

「どうでもいい。私は戦うだけだ」

ずれた思考を引きずり戻す。何度も同じことを考え何度も同じ答えを出す。どんなに考えたって答えは同じ。戦って殺して死ぬ。それだけだ。無駄なことに割くリソースは存在しない。目の前のことに集中しろ。

「あれか」

そうこうしているうちに作戦地域に到達したようだ。視界の先の盆地には煉瓦で出来た建造物が村を構成している。私は腹這いになりながら双眼鏡を取り出し村の偵察を始めた。

敵にとって重要な場所なだけあってか警備は厳重だった。一個小

隊近くの民兵に狙撃手、重機関銃を積んだテクニカルまでである始末。何とか目当ての地対空ミサイルを見つけたがあれを破壊するのは一人じゃ厳しそうだ。
「司令部へこちらハードラック、敵対空ミサイル陣地を発見。繰り返す敵対空ミサイル陣地を発見。オーバー」
トランシーバーを手に取り司令部へと連絡を行う。程なくしてノイズ音と共にってきた。
「こちら司令部からハードラックへ、了解。目標の座標と敵の規模は？オーバー」
バックパックから地図を取り出し実際の地形と照らし合わせる。
「ハードラックから司令部へ、目標の座標は東経〇〇、北緯〇〇、ポイントD―16です。少なくとも二十名以上の武装した民兵に狙撃手が一名、テクニカルも一台見える」
ありのままの情報を司令部へと伝える。さて、どうでるか。まあ、大方予想はつくがな。そしてその予想は本物となった。
「司令部からハードラックへ、了解した。そのまま目標対空ミサイルの破壊に移行せよ。繰り返す目標を破壊せよ。オーバー」
期待なんてしていなかったがやはりこうなったか。常識で考えれば援軍を寄こすかそのまま帰還させて後日部隊を送るだろうに。まあ、わかってはいたけど。
「こちらハードラック、一応聞きますがが援軍は？オーバー」
「こちら司令部、悪いが援軍は送れない。単独で目標を破壊せよ。まあ、化物のお前なら余裕だろう。これ以上は傍受の危険がある。交信終わり」
その交信を最後に司令部はうんともすんとも言わなくなった。どうやら見捨てられたらしい。非常識極まりないが零細ＰＭＣなんてこんなものだ。ＰＭＣなんて大層な名前が付いているが所詮は傭兵崩れにすぎない。大手なら違うらしいが私のところはその程度の組織だった。
「さて、どう料理するか」
双眼鏡を覗きながらどう行動するべきかを考える。重機関銃を搭

載したテクニカルがある以上、迂闊に飛び込めば蜂の巣にされる。迫撃砲でもあれば問題は一気に解決するが生憎と今日は持ってきていない。こんなことになるのなら持ってくるべきだった。
「いっそこのまま逃げるか？」
　元からあのＰＭＣとは近いうちに縁を切るつもりだった。彼等だって私が任務を達成するなんて期待していないだろうしもし彼らがこれが原因で被害を被ったとしても私には何の関係もない話だ。逃げたことで信頼は落ちるだろうがそんなものはすぐに取り戻せる。
「そうだな、それがいい……なんだあれ？」
　そんなことを考えていると自動車のエンジン音が村に向かって近づいてくるのを聞き取った。すぐさま双眼鏡を音のする方向に向ける。荷台が幌で覆われたトラックが一台村に向かってやってくるのを確認した。どうやら敵の増援が来たようだ。
「いよいよこれは逃げた方が良さそうだな」
　レンズの向こうのトラックは村の広場のような場所に停まった。荷台の中身はここからではよく見えない。大方武器か物資だろうと私は考えたがその考えはすぐに覆された。
　荷台から降りてきたのは十人ほどの男女だった。年齢はバラバラ。子供も老人もいる。広場にやってきたテロリスト達に銃を向けられれ遠目でもわかるほど怯えきっているのがわかる。
　きっと近隣の村から無理やり連れてこられたのだろう。ここではよく聞く話だ。男は奴隷。女は性処理に子供は人身売買か殺されて臓器を売られる。
「……」
　トラックから降ろされた人たちはテロリスト達に連れられて村にある比較的大きな家に押し込められていく。恐らく牢屋代わりなのだろう。
「気が変わった」
　私はそう呟くと村へ向けて斜面を転がるように駆けた。決してあの人たちを助けようとしているわけではない。そんなヒーローのような利他精神なんて持ち合わせていない。ただ状況を考慮して任務

遂行が可能だと考えたまでだ。
「もう少しこっちにも監視を置いたほうがいいだろうに」
　幸いにも私のいる山側の警備は手薄だった。家屋の屋根に狙撃手が一人陣取っているが道の方ばかりに目を向けてこちらを見ようともしない。私はしばらく斜面を駆けちょうどいい大きさの岩の陰に身を潜めた。
「まずは目からだ」
　プレートキャリアーに括り付けたレンジファインダーを手に取り狙撃手へと向ける。ファインダーに表示された距離は３２６ｍ。風は体感で西に約４キロ。この銃と私なら問題なく狙える。
　腰を下ろしＡＲ―１５を構え岩に銃身を委ねる。左手はストックを支え右手はグリップを握りスコープのノブを回し目標に合わせ倍率とレティクルを調節。そして安全装置を解除しスコープのレティクルを狙撃手の後頭部へ合わせた。
「狙え（Aim small miss small）、そして外すな」
　軽く息を吸い肺が酸素で一杯になったところで止める。
　音はいらない。聴覚が遮断され世界から音が消える。
　色はいらない。色覚が遮断され世界から色が消えた。
　そして静寂が訪れる。聞こえるのは私の鼓動だけ。
「さようなら」
　引金を引く。軽い衝撃と共にサプレッサーによって抑制された銃声が鳴り響き排莢口からはじき出された空薬莢が宙を舞い土にめり込んだ。
　銃口から飛び出した．２２３口径の弾丸は緩やかな放物線を描きつつ風によって曲がっていく。
　そして命中。弾丸は狙撃手の後頭部から頭蓋骨を突き破り脳を破壊、そのまま延髄を突き抜ける。
　スコープの先で狙撃手は糸の切れた操り人形のように崩れ落ちた。あの男はもう二度と動かない。精々あの世で７２人の処女と乳繰り合っていればいい。
「まずは一人」

敵はまだ仲間が一人死んだことには気づいていないようだ。スコープで村を観察するが警戒するような動きは見られない。だがそれも時間の問題だろう。早いことミサイルを破壊する必要がある。無線で仲間を呼ばれてはたまったものではない。
「次は口だ」
いつだって、どこだって私のやることは変わらない。戦って殺して死ぬ。それだけだ。

頭を拳銃のグリップで殴られよろめく男の口を左腕で押え右手に握ったナイフを肝臓に突き刺す。肉を刺す鈍い感触と共に男の目が見開いた。
「ッ！――ッ！」
まだ足りない。突き刺したナイフを抜き今度は男の喉に突き刺す。その間男の目を見続ける。男はいったい何を考えているのだろうか。死への恐怖か、それとも後悔か。私にはわからないし、わかったところでどうでもいいことだ。
「……」
男は家の壁にもたれかかり力なく座りこむ。男の目から完全に生気が抜け落ちたのを確認し私は男の死体を空き家の中に隠した。
これで四人目だ。村への侵入は容易だった。いくらアサルトライフルや軽機関銃で武装していようともツーマンセルも組んでいない民兵如きでは私の相手にはならない。私と彼等ではかなりの体格差があるが、一度ナイフで刺してしまえばそんなものなんの意味もなくなる。
「これであと２５人か？」
一方的とはいえ体格差で勝る敵を連続で仕留めるのは流石に骨が折れる。銃を使ってもいいが可能な限り隠密に徹したい。だが、必要なら躊躇しない。
「あれが連中の無線か」
Ｐ２２６を構え気配を殺しつつアンテナが設置された家屋に向け

て歩みを進める。これを無力化すれば少なくともすぐに増援が飛んでくることはなくなるだろう

家の裏口のそばに身を潜め意識を研ぎ澄ます。呼吸音からして男が一人。対処するのは難しくない。私は意を決して裏口のドアをノックした。

『ん、何の用だ？』

男が尋ねるが当然答えは返ってこない。訝しむような声と共に足音が近づいてくる。そしてドアノブが回り扉が開いた。

『おい、冗談もそれぐらいッ!?』

開いたドアノブから見える腕を引っ張りそのまま勢いよくドアを閉める。当然腕はドアに挟まれドアの向こうから痛みに悶える声が聞こえた。私はドアの前に立つと手にしたＰ２２６をドアの向こうにいるであろう男に向けて発砲。

数にして計五発。ドアの向こうの気配が消えたのを確認した私はそのまま室内に入った。左右を確認、敵影なし。オールクリア。部屋の中では男が仰向けで事切れていた。真新しい血の跡が付いた銃創から察するに胸に三発、頭に二発喰らったようだ。恐らく即死だろう。

部屋を見渡すと無線機が机の上に置かれていた。すぐさま電源ケーブルをナイフで切断し無力化する。これで連中は孤立したわけだ。

「あとはミサイルだけだな」

チェックメイトは目前だった。

「これで良しと」

ミサイルにセットしたＣ４を見ながらそう呟く。爆薬は十分な量を仕掛けた。あとは起爆スイッチを押せばド派手に爆発するわけだ。目的のミサイルは典型的なセミアクティブレーダー誘導方式の短距離地対空ミサイルだった。恐らく東欧あたりから流れてきたものだろう。連中がどうやってこれを手に入れたか気になるところだがそ

れは私の管轄外というものである。
「喜べ、花火が見られるぞ」
　私は物言わぬ死体に話しかける。背中に付いた三つの血のついた直径９ｍｍ穴が男がどうやって死んだのかを物語っていた。
「まあ、花火なんて見たことないけどさ」
　知識では知っているが実際に見たことがないため想像することしかできない。噂に聞けばとても綺麗だと言うが……。駄目だ想像がつかない。
「さて、後は安全圏まで退避して起爆するだけだが……」
　不意に捕まった人たちのことが頭に過った。きっとあの人たちはこれから死ぬよりも酷いことをされるのだろう。尊厳という尊厳を犯されいらなくなったらゴミのように捨てられるのだ。
「どうでもいい。私にはなんも関係もないことだ」
　そう、私には何の関係もないのだ。あくまで最優先目標はミサイルの破壊、敵の無力化は二の次だ。少しは減らしたがまだ敵は二十人以上残っている。真正面から戦っても勝てないわけではないが余計なリスクは避けたい。だからここで私が取るべき行動はすぐさま離脱することである。
「さて、どうやってここから離れるかな」
　胸の中に湧くよくわからないものを押し込め自分が取るべき行動を考える。順当に考えるなら同じように侵入したルートから脱出するのが一番であるが、敵の動きが分からない以上迂闊に動くわけにはいかない。が、あまり長居すると敵も馬鹿ではあるまい、仲間が減っているのに気が付くはずだ。そうなれば脱出はさらに難しくなる。
　何はともあれ、
「行動あるのみ……ッ!?」
　突如鳴り響く銃声、そして大きくなる騒ぎ声。感づかれたか？私はＡＲ―１５を構えながら周囲を警戒する。が、すぐに気付かれたわけではないことを知った。銃声と騒ぎはここから１００ｍ程離れた広場から聞こえてくる。
「何が起きた？」

増援か？私は爆薬をセットしたミサイルから離れ、ちょうど反対側にある家屋の屋根に手をかけ一気に登る。そして腹這いになり銃のスコープを覗いた。村は道路を挟むようにして作られている。ちょうど村の真ん中にある広場には先ほど攫われた村人たちが集められていた。どうやら何かあったらしい。

スコープの先には隊長格らしき髭面の男が村人たちに向けて喚き散らしている。その周りには民兵の持つＡＫとテクニカルに備え付けられたＤＳｈＫ３８重機関銃の銃口が村人たちに向けられていた。

「見せしめか……」

商品価値がないと判断したのか、それともただの気まぐれか、どうやら彼らはここで村人たちを始末するようだ。隊長らしき男は下品な笑みを浮かべて村人たちに何かを言っている。スコープ越しに見える村人たちの顔は涙を浮かべるものや諦めて目を瞑るもの。色々な感情に溢れていた。

「屑共め」

何が聖戦士だ。聞いて呆れる。堅気に手を出すなど兵士失格だ。確か彼らは天国に行くために戦っているんだったな。

「そんなに天国に行きたいのなら私が連れて行ってやる……」

私の呟きは風に流れ消えていった。

死は避けられない。生きている限り人は絶対に死ぬ。どんな善人も悪人も等しく死に絶える。それが遅いか早いかの違いしかない。ただそれがいつか分からないだけのことだ。

たが、一つ言えることは今日が彼等の命日だということである。

『神は偉大なり!!神は偉大なり!!』

広場のテロリスト共が神を讃える祈りを叫ぶ。私にはそれが神への崇高な祈りではなくただ暴力を賛美しているようにしか聞こえなかった。違うな、彼らは一方的に暴力を振るうことに快感を得ているにすぎない。私と同じように暴力に酔った獣だ。

『お、お願いします!こ、子供だけは!』

広場に面した民家の陰に隠れ手鏡を取り出し広場を観察する。目の前にはテクニカルのテールランプと重機関銃を構えた男の背中が見える。耳には女性の悲鳴に近い懇願が入ってくる。そんな母の悲痛な願いは男たちの下卑た笑い声にかき消されてしまう。

いつもの光景、よくみた景色、今からする行動に意味なんてない。ただの条件反射であり善意なんてひとかけらも存在しないのだ。

足音を消しナイフを構えテクニカルに近づく。目指すは重機関銃の射手。そうして近づいていく間にも村人とテロリストたちの話は進んでいく。

『どうかお願いします！お願いします!!』

どうやら女性が男に掴みかかっているようだ。

『よせ！俺に触るな!!』

広場に響く肉を打つ音。そして聞こえる悲鳴。子供の叫び。

『母さんにいじわるするな!!』

『なんだこのガキ!!クソ！噛みやがったな！』

何やら騒ぎが起きている。どうやら子供が隊長に何かしたようだ。ここからでは良く見えないが声から察するに噛みついたのだろう。大した度胸だ。

『このガキがぁ！殺してやる！』

『は、はなせ!!』

声を聞くにきっと同い年くらいだろう。私と違ってちゃんと愛情を込められて育ったようだ。こんな時ですら他者を思いやることができるなんて。私みたいな屑とは比べるまでもない。

『地獄で俺に歯向かったことを後悔するんだな！』

『う、うわぁあ！』

『い、いやぁ!!』

テクニカルの荷台に音もなく登る。重機関銃の射手は目と鼻の先だ。

『な、なんだアイツ!!』

広場にいた敵の一人が私の存在に気が付く。真後ろに立たれていた射手もようやく気が付いたようで慌てて私の方に振り向こうとす

る。だがもう遅い。
『く、クソッ――』
男の左腕を掴み腋の下を逆手にもったナイフで斬りつける。腋は重要な血管が通った人体の急所だ。そこを7インチの鋭利なナイフで切り裂かれてはたまったものではないだろう。
『あ、あがっ!?』
そのまま流れるようにナイフを首に突き刺し押し出すように切り裂く。首がぱっくりと割れ露出した血管からは壊れた水道管のように血が吹き出ている。もう長くはあるまい。
首を抑え崩れ落ちる男を強引にどかしＤＳｈＫ３８重機関銃のグリップを握りコッキングレバーを引く。そして１２．７ｍｍの銃口を車の目の前にいる運転手らしき男へと向ける。
『あ、あああぁ――』
男の悲鳴は１２．７ｍｍの徹甲弾によって掻き消え肉片となって重機関銃の防盾にへばり付いた。照準器の隙間から血飛沫が私に降りかかった。だが拭く余裕はない。血塗れの顔のまま敵へ向けて引金を引き続ける。さぁ、ショウタイムだ。
『て、敵襲!!』
『畜生!どっから沸いてきたん――』
重機関銃の銃口を広場のテロリスト共に向けて乱射。テクニカルの荷台は瞬く間に熱々の薬莢で埋め尽くされていく。至近距離にいた敵は銃口から発射された航空機すら撃ち落とせる大口径の徹甲弾によって次々に肉片と化す。
ある者は胴体に大穴を開けある者は首から上を吹き飛ばされる。悲鳴と怒号、そして地を裂くような銃声が混ざり合いカオスを作り出す。まさにこの世の地獄であった。
『う、撃ち返せ!!早く殺せぇ!!』
隊長格の男は突如湧き出た敵に怯えながらもなんとか指示を飛ばす。その声にまだ生きているテロリスト共が土嚢や家の壁に隠れ銃で応戦を始める。
いくつかの弾が防盾に着弾し火花と金属音をかき鳴らす。どうや

らそこそこ根性はあるらしい。もう少し混乱させてやろう。私は応戦しつつポーチに入れた起爆スイッチを手に取りすぐさまスイッチを入れた。

電波によって遠隔操作された信管が起爆しＣ４爆薬が起爆する。起爆したＣ４はミサイルの弾頭とロケット燃料に誘爆、そばの予備ミサイルを巻き込みキノコ雲を伴った凄まじい爆発を引き起こした。

『ミ、ミサイルが！』

『くそったれ!!なんなんだ!?』

敵は大混乱。蜘蛛の子を散らすように逃げ惑いまともに陣形を維持することも叶わないただ闇雲に銃を乱射するだけの存在と化している。何人かが土嚢や壁に隠れて反撃しようとしているが１２．７ｍｍの徹甲弾は容赦なく壁や土嚢を貫通し敵をミンチにしていく。

よほどのことがない限り歩兵が銃座を制圧することは叶わない。それだけの力の差がここにはあった。広場は血と肉が土と混ざりそれは酷い有様だ。

攫われた人たちを横目でみる。突然の戦闘に逃げることもできずその場で蹲っていた。よかった、死んではいないようだ。弾もそろそろ切れるはず。加速した思考で次の行動を選択する。

引金から手ごたえが消えた。弾が切れたようだ。敵は好機とばかりに突っ込んでくるだろう。なら私の取るべき行動はただ一つ。

周囲を見渡す。目標は車から一番近い土嚢だ。近くの気配は四、左右に二人づつだ。ＡＲ―１５を構え荷台から飛び降りる。

右にいた生き残りが私に向けてＡＫを構えるが私のほうが早い。銃を斜めに構えオフセットレッドドットの光点を敵の胸に合わせ発砲、射殺する。流れるような動作で隣にいるＲＰＫを構えている男を撃ち殺す。

左側から銃声、車体左側面に着弾。すぐさま身を屈めてエンジンブロックに隠れつつモディファイドプローンに移行。変則伏射で車体下部から左の敵を狙う。銃を撃ちながら近づいてきた男の足に向けてサイティング、そして発砲。

エジェクションポートから弾き出された薬莢がすぐ真下の地面に

ぶつかり顔に跳ねる。命中を確認、足を負傷し転んだ男の胸に容赦なく弾を二発叩きこむ。
『なっ!?』
立ち上がりボンネットを挟んだ先にいる動揺して間抜け面を晒している敵を射殺。これで広場はクリア。直ちに移動を開始する。
全力で土嚢に向けて走る。その間も敵は私を殺そうと雑多な小火器で抵抗するが弾は虚しく私の通った後をすり抜けるだけに終わる。撃ち方がなっていないんだよ。素人め。
「こういうのはあまり好きじゃないんだがな!」
スライディングするような形で土嚢の陰に隠れつつ奥へ逃げた敵へと制圧射撃を行う。少し距離があるな。
使用する照準器をオフセットサイトからスコープへと変更、斜めに構えていたＡＲ―１５を真っすぐに構え直す。土嚢に銃身を預け５０ｍ先の家の陰から上半身を出していた間抜けにレティクルを合わせ発砲。レンズの先で赤い花が咲いた。
「やっぱり迫撃砲でも持ってくるんだった」
始めてしまった以上ボヤいてもしかたがない。一度銃を向けたらあとは殺すか殺されるかだけだ。マガジンを交換しボルトキャッチを叩く。
土嚢の横から敵を確認する。２０ｍ先の民家の影から足が覗いていた。すぐさま銃のスコープを覗き敵の足首に向けて．２２３レミントンを叩きこむ。叫び声と共に男が倒れ上半身が露わになった。
「そこ」
無防備になった顔に向けて発砲。敵は物言わぬ肉塊と化した。既に結構な数を倒したがまだ反撃の意思は残っているようだ。その証拠に私の隠れている土嚢に容赦なく弾が着弾し石や土をまき散らす。
「中々しぶといな」
銃撃の合間を縫って敵のいる場所に向けて制圧射撃を行う。反撃が止まった。この隙に距離を詰める。一所に固まっていては相手に包囲させる隙を与えるだけだ。数で劣る相手に勝負を挑む時の鉄則は絶対に本調子を出させないことである。団結させてしまえばそれ

だけ相手は強くなってしまう。故に絶対に敵を纏まらせてはいけないのだ。
残る敵は十人弱。敵も当然黙ってはいない。走る私に向けて容赦なく弾丸を叩きこんでくる。しかし構えもなっていないめくら撃ちばかり、弾は私の傍を掠めるだけであった。これなら問題ないな。私は走りながら制圧射撃をしつつ素早くだが確実に敵との距離を詰めていく。
『くそ！悪魔め!!悪魔め!!』
家の陰に隠れ弾倉を交換していると向こうの家から悲痛な叫び声が聞こえてくる。巷では私は黒い悪魔と呼ばれているらしい。それも当然か。たった数分で味方が三分の一に減ったのだ。敵からすれば悪夢そのものだろう。噂が独り歩きしている気がしないでもないが名前が売れる分には一向にかまわない。
声のする方向へ銃を撃つ。当然民家の壁に当たるだけだが余程の度胸がない限り数十センチ先に銃弾が着弾して平静を保つことは不可能だ。
敵を足止めしたのを確認しプレートキャリアーに括り付けた手榴弾を手に取りピンを抜き安全レバーから手を離す。二秒ほど待ってから向こうの家の壁に向かって手榴弾を投擲した。
『ん……手榴ッ!?』
それが彼の最後の言葉となった。耳をつんざくような爆発音と共に破片をまき散らしながら手榴弾が爆発する。ここからでは見えないがきっと遺体は酷いことになっているだろう。私の知ったことではないがな。
『クソ！クソッ！』
『化物だ！殺される！』
『お、おい逃げるな!!』
士気は完全に崩壊。敵は私から逃げるように奥へ奥へと進んでいる。ここで畳み掛けよう。私は発砲しつつ隠れていた民家から飛び出し道の真ん中をスチームローラーをかけるかのようにゆっくりと前進する。

『死ねっ――ぐふぉ!?』
健気にも反撃してきた男の胴体に二発正確に叩きこむ。死んだのを確認する必要はない。何故なら私の射撃は完璧だからだ。
残り九人。奥にいた背を向けて走る敵を殺害。その流れで民家の影から僅かに出ていた敵の顔に弾を叩きこむ。まるで熟練のライン工のような正確さで淡々と敵を処理していく。
普通なら道のど真ん中を馬鹿正直に歩いていれば的になるだけだ。相手だって馬鹿ではない。走っているわけでもない近距離の人間を撃ち殺すことなど簡単にできる。
ならなぜ私は生きているのか。答えは簡単だ。敵よりも早く、そして確実に殺しているからに他ならない。身も蓋もない話だがそれを可能にするだけの力の差がここにはある。
『こんのッ!!』
右前方１５ｍ先の民家の屋根に敵を視認。緑色の弾頭に無反動砲特有の構え。ＲＰＧ―７だ。加速した思考で瞬時に取るべき行動を選択する。
私が右側の家のドアを突き破り中に飛び込んだのとＲＰＧが発射されたのはほぼ同時だった。凄まじい爆発音と土煙。耳鳴りと衝撃で思考が一瞬だけ断絶される。
「うぅ……」
クリアになった思考で自らの状況を診断する。外傷なし、どうやら距離が近すぎて信管が作動しなかったらしい。
「危ないなぁ」
まともな訓練を受けていないからこんな危ない真似ができるのだろう。耳鳴りが治まり静寂が訪れる。やったかという敵の小声だけが耳に届く。そして近づく複数の足音。
あんな至近距離から撃ってくるとは思わなかった。が、お陰で敵を一掃するチャンスを得た。これでチェックメイトといこう。
『お、おい、死体がないぞ……』
『馬鹿言え！あんな近くでＲＰＧを喰らって生きてる人間がいるか！』

『本当に人間なのか……化物の間違いじゃ……』
散々な言われようだな。まあいいか。私は近づく気配に意識を集中させる。敵の一人がちょうど私の前で止まった。どうやら向こうからは家の中は逆光になり見えないようだ。行くとしよう。ＡＲ―１５を構え道に向けて飛び出す。
『ん？そこッ――』
男が銃を構える前に横から弾を叩きこむ。そのまま崩れ落ちる男にダイビングし地に横に倒れ銃を構える。
視界の先には五人のテロリスト。屋根の上に一人、道に四人。ＡＲ―１５をセミオートで二連射、屋根のＲＰＧ持ちを射殺。声も出さずに屋根から地面に向けて転がり落ちた。
『なっ!?』
人というのは想定外の事態が起きると大抵は硬直する。案の定動きを止めた目の前で硬直している二人組を排除。
超至近距離のガンファイトに私の脳はアドレナリンを放出し心拍数が増大する。鼓動に身を任せ、立ち上がり奥にいた敵へと距離を詰める。
『こ、こいつ！』
「遅い！」
突っ込んできた私に敵が発砲するもスライディングしこれを回避。敵の右を通過する際にラリアットの要領で左足を掬いとる。
『ぶふぉ!?』
顔を地面に強打し悶絶する男の背中を回転しながら立ち上がり右足で背中を踏みつける。
『は、はな――』
喚く男の後頭部に二発発砲。そのまま民家の壁ぎわで硬直していた男に向けて銃を構え引金を引く。
「――ッ！」
弾を撃った時のキレの良い感触の代わりに引金から感じたのは鈍い感触。そう、弾切れだ。興奮して残弾管理を怠ってしまったようだ。私もまだまだだな。

『はっ馬鹿め！死ね――ッ!?』
なら取るべき行動は一つのみ。瞬時に身を屈めつつ敵に突進、銃身で敵の銃を弾き飛ばし、銃身を敵の胸に突き刺し壁に押し付ける。
『ぐぇ!?』
例え銃剣がなくとも硬い金属の筒で胸を強打されれば碌な防具も着てない人間には致命的だ。
銃身を握り逃げ出そうとする男を抑えつつ迅速にマグチェンジ。冷静にボルトキャッチを叩く。薬室に弾が込められたのを確認。男と目が合う。
「笑え（Smile you son of a bitch）よ糞野郎！」
引金を引く。銃声、そして血飛沫。銃身越しに伝わる命の抵抗はいつの間にか消えていた。
「これで終わりか？」
男の死体を一瞥し周囲を見渡す。銃声はしない。人の気配もない。村は先ほどのまでも喧騒が嘘のように静まり返っている。
「そして誰もいなくなった……か」
いや、まだやり残したことがある。私は広場へと踵を返した。

すっかり地獄のような場所になった広場の真ん中で村人たちは恐怖に震えていた。身体を縛られているためうずくまることもできずただ目を瞑り悪夢が過ぎ去るのを待っている。
『ひっ』
近づいてきた私に気が付いた村人がまるで化物を見るかのような顔で悲鳴をあげた。敵意がないことを示すために銃を肩に掛け両手を上げるが大して変化がない。一々弁解しても面倒なのでそのまま近づく。
『ば、化物！』
この段階で私は自分の顔が血塗れだったことを思い出した。が、そう都合よく顔を拭くものなど持っていない。悪いがこのまま我慢してもらおう。

『く、来るな!!』
『別に殺したりしないよ』
先ほど隊長に反撃した男の子が私の前に出て必死に親を守ろうとする。説明するのも面倒だ。腰のナイフを引き抜く。周囲の空気が氷点下まで下がった。恐怖に足がすくんだのか少年が転ぶ。
『う、うわぁあ……へ?』
叫ぶ男の子を無視し彼を縛っていた縄を掻き切る。てっきり殺されると思っていたのだろう男の子は自分の身体が自由になったことに気が付いたのはしばらくたってからのことであった。
放心している男のを横目に見ながら同じように村人たちを解放していく。ん、そう言えばまだ一人残っていたな。いくとするならあそこか?
『あとお願い』
『え?ってうわ!』
少年の手にナイフを放り投げ私は無線機の置いてあった家へと向かった。

「いた」
私の予想通り無線機の置いてある家の窓から隊長らしき男の背中が見えた。ここからでは何を言っているかは聞こえないがきっと助けを呼んでいるのだろう。もっとも電源ケーブルの切断された無線機で何を呼ぶのかは知らないがな。
『クソ!聞こえないのか!!』
『おい!お前の負けだ。大人しく降参するんだな』
『なっ、もう来やがった!!』
私が声を掛けると男は慌ててドアから飛び出し背を向けて走り出した。この期に及んでまだ逃げる気でいるらしい。その根性は評価するが、それはいただけないな。
走りながらも男はこちらに拳銃を撃ってくる。しかし所詮素人の拳銃。それも走りながらの片手撃ち。当たるわけがない。弾は当然

のように私から大きく外れて着弾する。
「それで終わりか？じゃあ行くぞ」
ＡＲ―１５を構える。射撃競技で撃つようなしっかりした構えで男の足に狙いを定め安全装置を解除する。軽く息を吸いそして引金を引く。
正しい構え、正しい照準、正しい殺意。当然の帰結として弾丸は命中し男はバランスを崩し盛大に転んだ。
『あぁぁ!!』
男が膝を抱え喚き散らしている。膝を正確に撃ち抜いた。仮に生き残ったとしても二度とちゃんと歩くことは叶わないだろう。そんな男に私はゆっくりと近づいた。
『くっそ！くそ!!くそ!!』
私に気が付いた男が拳銃をこちらを撃とうと拳銃を構える。が、男が引金を引くよりも早く私のＡＲ―１５が拳銃を弾き飛ばした。唖然とする男。これで彼は正真正銘丸腰となったわけだ。
『動くな、と言っても動けないだろうがな』
真横に立ち銃を構え男に言い放つ。男の怯えや憎悪の混じった瞳が私を射抜く。さて、彼は次に何を言うのだろうか？どうせ碌なことがじゃないだろうが。彼は私の顔を見て驚きに目を見開いた。
『ま、まだガキじゃねえか……』
『そのガキにお前らはしてやられたわけなんだがな。さて、言い残すことはあるか？』
『ま、まて金なら払う！言い値の二倍でも三倍でも払う！だから命だけは!!』
意外と元気だな。まあ大出血しているわけでもないしアドレナリンで痛覚が飛んでいるのだろう。よく見る光景だ。
『金なんかいらない。一つ質問に答えろ』
『な、なんでも言う！何でも言うから殺さないでくれ!!』
必死だな。いや、私みたいな異常者でもない限り普通は自分の命が惜しいものだ。死なんてそんな怖い物でもないと思うんだがな。どうせ皆死ぬんだ。遅いか早いかの違いしかないだろうに。

『あの連れてきた村人たちをどうするつもりだったんだ？』
『そ、そんなことでいいのか？』
『つべこべ言わずにさっさと言え。私はそこまで気が長くないぞ』
『お、女は性処理、男は奴隷。子供は売るんだよ。山の向こうの駅で取引するんだ。特にこ、子供は高く売れる』
『その後は？』
『し、知らねえよ。た、たぶん奴隷にするか臓器でも取るんだろ。な、約束通り話しただろ。助けてくれよ！』
私の予想通り、救いようがない屑共だった。私も人のことは言えないが少なくとも自分から民間人に危害を加えたことはない。こいつから聞きたいことは全て聞いた。用事が済んだので徐に男の襟を掴んで引きずり始める。
『ど、どこに連れて行くんだよ！約束通り話しただろ!!話が違うぞ！』
『まあ殺しはしない。殺しはな』
喚く男を無視し私は広場へと脚を運んだ。

辿り着いた広場では解放された村人たちが自分達の無事を噛みしめるかのようにお互いに抱き合ったり励まし合ったりしていた。
『お、おい、来たぞ……』
村人たちは歩いてくる私達に気が付いたようで怯えながらこちらを見ている。あまり気分のいいものではないがいつものことなので無視して彼等の目の前まで進む。
『ぐあぁ！足が!!畜生！くそったれ！』
アドレナリンが切れてきたのか男が痛みに顔を歪ませ叫ぶ。その姿を見た村人たちの目が変わった。恐怖から憎しみへ、悲しみから怒りへと。はた目からでもわかるくらいの変化だ。きっと酷い目に遭わされてきたのだろう。
『な、なんだよお前ら！あぁ、くそ！』
村人たちの変化に男が戸惑う。男の襟を離し距離を取ると村人たちと目が合った。

『向こうに貴方達を連れてきたトラックがあります。鍵はその辺にあるでしょう』
村人たちは黙って頷き、そして次に未だに喚き散らす男へと眼を向けた。言いたいことは分かる。私はゆっくりと頷いた。
『どうぞお好きなように』
それだけ言うと私は村人たちの横を通り抜けそのまま自分が乗ってきた車に続く道を歩き始めた。程なくして背後から村人たちの怒号と男の悲鳴が広場に響き渡る。
確かに私は男を殺さなかった。が、その後のことは私の管轄外だ。精々、五体満足で死ねることを祈る。
歩きながらプレートキャリアーのポーチに入れた煙草のケースを取り出し一本口に咥える。持ってきたライターで火を点けゆっくりと煙を口に入れた。
正直にいうと煙草は依存症になっているだけであり、実はそれほど好みではない。だが今は無性に煙草が吸いたい気分だった。
「ふぅ……」
指で煙草を持ち煙を吐き出す。不意に後ろから足音が近づいてきた。立ち止まり後ろを振り返る。先ほどナイフを渡した男の子が私に近づいてきた。
『まって!』
『なんのよう?』
男の子は徐に私のナイフと手ぬぐいを差し出してきた。そして自分の顔を指さす。拭けと言うことだろうか?
煙草を地面に捨てナイフと手ぬぐいを受け取り顔を拭く。一通り拭き終わり使い終わった手ぬぐいを見る。案の定血がべったりだった。
『どうも……』
礼を言い使い終わった手ぬぐいを彼に返そうとするが顔が引きつっていたので止めておいた。どうしようもないのでそのまま折り畳みポーチに突っ込む。後で洗わなきゃな。
『多分しばらくしたらまた違う連中が来るだろうから早めにここから

出て行ったほうがいいって伝えてくれ。じゃあ私はこれで』
背を向け再び歩き出す。悲鳴はいつの間にか聞こえなくなり村人達の怒号だけが響き渡る。
『あ、あの……さっきはありがとう』
私は後ろから聞こえた言葉に聞こえないふりをしてそのまま歩き続けた。私は彼らを一度見捨てようとした。そもそも助けようとすらしていない。成り行きとして彼らが助かっただけだ。それに仮に善意だったとしても、人殺しが礼を受け取る資格なんてない。
「さて、次はどこに行くかな」
思わず空を見上げる。空は憎たらしいほど澄み渡っていた。新しい煙草を口に咥え火を点け大きく煙を吸い、そして盛大に咽た。

「とまあそういうわけでめでたく敵を全滅させたというわけさ」
私は話を終え皆を見た。案の定顔が引きつっていた。わかってはいたが面と向かってそんな顔をされると泣きたくなる。一応オブラートには包んだんだが、流石に刺激が強かったか。
「引いたか？」
「い、いやドン引きしたっちゃしたけど、どっちかっていうと……」
速水が言い淀む。その言葉を繋ぐように千葉が口を開いた。
「臼井の強さにドン引きした」
「「うん」」
カエデと渚と杉野が一斉に頷いた。酷い。あまりにも生々しい話だったから引かれるとは思っていたが想像していたのと別の反応だった。
「えっと、敵何人いたんだっけ？」
「流石にはっきり覚えているわけじゃないが三十人は確実にいたな」
「さ、三十人……」
渚が改めて絶句した。思い返すと随分と無茶しているな。
「確かに一人で相手するには多すぎる数だが練度も士気も低かったしそこまで苦労しなかったぞ」

「いや、普通は喧嘩売ろうとしないから」
「そう言えばロケットランチャーで撃たれて平気だったのか？」
　千葉の指摘に私は笑いながら腹を指さした。
「いや、大丈夫じゃないぞ、車を直してる途中に気が付いたんだが、どうやら石か何かの破片がボディーアーマーの隙間を縫って脇腹に突き刺さっていたらしくてな。流石に焦ったよ」
「あ、傷の話やっと出てきた」
「傷って……祥子！大丈夫だったの？」
　カエデが心配そうに私を見てくる。いや、見てくるというより掴みかかりそうな勢いだ。私はそんなカエデをなだめながら話の続きをした。
「カエデ、顔近いから。というかもう二年も前の話だ。幸い傷も小さかったしそんなんで医者に金を取られるのは癪だったから自分で傷を縫った。知ってるか？皮膚って布みたいに針が通るんだぞ」
「うわぁ……」
「グロ」
　自分達が想像したこともない壮絶な話に思わず顔をしかめている。流石に少しえぐかったかもしれない。エクレアを齧りながら昔を思い出す。改めて自分の境遇の異常さに驚く。つい最近まで当たり前だと思っていたがこんなことが当たり前であってたまるか。
「もう！今度怪我したらちゃんと病院いくんだよ？」
「分かってるって」
　カエデはどうにも信用ならないようで可愛らしい顔を怪訝な表情で歪ませている。
「ほんとに？」
「ほんとに」
「……うん、わかった。約束だよ。でもさ……」
　今度は一転して少し嬉しそうに顔を綻ばせた。
「やっぱり祥子は昔から変わらないんだね」
「変わらない？」
「だよな。なんていうの？ツンデレってやつ？」

杉野とカエデが笑いながら言ってくる。
「ほんとそういう時だけ素直じゃないわよね」
「速水がいうな」
「なに？」
「別に」
よくわからないが何だか恥ずかしい。そんな気持ちを隠すようにエクレアを齧る。甘くてほろ苦くて美味しい。というかカエデはどうやってこれを持ってきたのだろうか。こんな暑い時期に。
「にしても、さっちゃんさんの血塗れの顔とか想像できないなあ」
「確かに今の臼井じゃな」
「だな」
全員が私を注視してくる。何か顔についているのだろうか。そう疑問に思っているとカエデが自分の口元を指さしてきた。私もつられて自分の口元を触る。皮膚の代わりにべったりとした何かが付着している。
「あ、クリームか」
どうやら口にクリームが付着していたらしい。慌ててポケットからハンカチを取り出そうとするがバックパックの中に仕舞ったままだった。畜生。
「よかったら使う？」
「あ、ありがとう」
渚から差し出されたハンカチを受け取り口元を拭く。一通り拭いた後、手元にあるハンカチを見て戸惑った。クリームで汚れているからだ。
「どうしたの？」
私の動きが止まったのを見て渚が首を傾げる。このまま渡していいものだろうか。ふと先ほど話した過去のことを思い出す。あの時の手ぬぐいは血塗れだった。だが今は……
「いや、何でもない。ありがとう」
「どういたしまして」
渚にハンカチを渡すのと同時に予鈴が鳴り響いた。もうそんな時

間か。私たちは教室に向かうために各々立ち上がり歩き始めた。
「私も行くとするか」
ゆっくりと立ち上がり空を見上げれば澄み渡った青空が私を祝福していた。大きく息を吸う。
確かに過去は変えることはできない。犯した罪をなかったことにはできない。だが、それでも未来は変えられる。右も左も分からないことだらけだがそれだけは確かだ。だから止まるわけにはいかない。
「あ、そういえば祥子」
「ん、どうしたカエデ」
私の前を歩いていたカエデが唐突に振り返った。それはそれは綺麗な笑顔だった……何だか嫌な予感がする。思わず足がすくむ。逃げたい。
「煙草吸ってた話……後でもっと聞かせてほしいな」
このあと滅茶苦茶説教された。

放課後　もしもの時間

京都、この盤の目の街は日本の歴史の中で長い間首都とされてきた由緒正しい街。政治の中心というだけあって数多くの要人がこの地で暗殺され土に還っていったという。潮田曰く「暗殺の聖地」だそうだ。

「へー、祇園って奥に入るとこんな感じなんだ」

「うん、一見さんお断りのお店ばかりだから目的もなくフラッとくる人も少ないし見通しがいい必要もないの」

「なるほど、暗殺するならここがいいというわけか」

「うん、そういうこと」

今日は修学旅行初日。私たちは殺せんせーの暗殺の下見で祇園の裏路地に足を踏み入れていた。私を入れて杉野、潮田、赤羽、茅野、神崎、奥田の7人班。ここに来たのは神崎の提案であった。

「流石にこの大人数だとちょっと狭いね」

茅野の言うとおり。こんなにも人数が多いと襲撃された際に動きづらくなる。本当は嫌なのだが、暗殺のことを考えると無碍にもできない。それに理由を説明したとろこで妄言として一蹴されるだけだろう。

やはり一人で来るべきだったな。烏間先生も最後まで私の提案を受け入れてはくれなかった。こんな入り組んだ街ならいくらでも狙撃するチャンスがあったというのに。仕方ないので大人しく修学旅行に参加したが……

「というか臼井もせっかくの京都なんだからもう少し楽しそうにしろよなー」

「仕事には手を抜かない。常識だろ」

「し、仕事って……」

私達は政府から依頼される形で暗殺をしようとしているのだ。これが仕事じゃなかったら何になるというのか。

「そんなんで人生楽しいかあ?」

楽しいという感情など当の昔に捨て去った。私は兵士として戦う

だけ。それ以外のことは考える必要はないし、考えるべきではない。
「生きることを楽しいつまらないで考えたことはない」
「なんだそれ、変な奴」
「渋いねー臼井さん」
　茶々を入れてくる赤羽を無視し意識を集中させる。後方5時方向の表通りに複数の気配。数は三……いや四人。
　さりげなく手鏡を使い後ろを確認。如何にもチンピラ然とした男どもが下品な笑みを浮かべながらこちらを見ている。
「それよりもだ」
　足を止め立ち止まる。皆がそれにつられて立ち止まった。あっちも動いたようだ。足を肩幅に開きいつでも攻撃できるように準備する。
「どうしたんですか臼井さん」
「気付かないのか？」
「だから何だよ臼井」
「つけられてるぞ」
　私がそういうのと気配の主たちがこちらに声を掛けてくるのはほぼ同時刻であった。
「ほんと、何でこんな拉致りやすいところ歩くかなあ」
「ほんとほんと、攫ってくださいって言ってるようなもんだぜ」
　私達の退路を塞ぐように三人が横並びになって歩いてくる。距離は凡そ3m、武装はとくになし。舐められたものだ。塀の小さな勝手口に隠れている気配はまだ出てこない。おおかた不意打ちでもするつもりなのだろう。
「君達は下がってろ」
「うん、わかった」
「ちょ、カルマ君何言ってんの！」
「まあ、いいから見てなって」
　赤羽に言われ皆が下がっていく。これで少しは動きやすくなった。三人のうち、坊主頭の男が私の目と鼻の先に立ちふさがった。どうやら右のポケットにナイフを隠してるようだが……

「素人め……」
「あぁ？何か言ったか。まあいいわ、俺ら嬢ちゃんたちに用があってよ。来てくれるよなあ？」
　右手に持ったナイフを取り出しわかりやすい挑発をしてきた。後ろで息を呑む声が聞こえるが、正直言って怖くも何ともない。というか隙だらけ過ぎる。ふざけてるのか？
「これで勘弁してくれないか？」
　何にせよ初めは話し合いからだ。ジャケットから二つ折りの財布を取り出し男に突き付ける。金をやるから立ち去れと言う意味だ。それを見た男たちはゲラゲラと笑い始めた。
「ふはははは！こ、こいつこの期に及んで俺達がカツアゲに来たと思ってんのかよ！なあ――」
　ゲラゲラ笑いながら後ろのチンピラ仲間を見ようとした隙を狙い、財布で男のナイフを挟み込むようにして奪い取る。大して握りこまれてもいないナイフは簡単に男の手からすり抜けた。
「……え？」
　一瞬にして自分の手からナイフを奪われた男の目が驚愕に見開く。挟み込んだナイフを手に持ち観察する。よくある折り畳み式のナイフか。果物を剥くのに向いてそうなサイズだな。
「探し物はこれか？」
　男にナイフを見せつけ放り投げる。石畳にナイフの金属音が鳴り響いた。その音に反応して男たちはビクリを肩を震わせた。まあ所詮はチンピラか。
「悪いことは言わない。怪我したくないなら今すぐ立ち去れ」
　ほんの少しだけ殺気を込めて言い放つ。要はこういうことだ。次は容赦しない。男たちの目から余裕が消え去り額には脂汗が浮かんでいる。
　どうやら緊張しているようだ。緊張は心拍数を上げ、呼吸を乱す。乱れた呼吸は隙を生む。もうこいつらは驚異ですらない。あとはあの隠れている奴にだけ気を付ければいい。
「こ、こいつ……」

さて、出鼻を挫かれたわけだが、どう出るのかな？
「こ、このクソアマッ!!」
逃げると言う選択肢はなかったようだ。逆上し頭に血を登らせ拳を振りかざす。大振りのテレフォンパンチ。当たるほうが難しい。
「遅い」
右腕を左肘で逸らし、がら空きになった顎に掌底を叩きつける。
「か、かはっ!!?」
男は強烈な掌底を喰らい動けない。そのまま両手で右腕と首を掴み股間を蹴りあげる。
ただでさえ上半身を固定され衝撃を逃がすことができない状況。その上喰らった場所が場所だ。きっと想像を絶する痛みが彼を襲っているのだろう。
だがそれで終わらせる私ではない。そのまま倒れ込む男の顔面に四回膝蹴りを食らわし追撃。
「う、あ、あぁあ……」
最後にふらふらになった男の頭に前蹴りを叩きこみフィニッシュ。坊主頭は盛大に吹き飛びそのまま動かなくなった。残るは三人。
「なっ……」
ここまで１０秒とかかっていない。男たちの顔が真っ青になる。ようやくチンピラ共は自分達が誰に喧嘩を売ったのか気が付いたようだ。遅いんだよ。
「で、どうする？」
私は反撃以上のことをするつもりはない。十分過ぎる程力は見せつけた。このまま去ってくれるのが一番いいのだがな。
だがどうもそうはいかないようだ。
「臼井後ろ!!」
「死ねぇ!!」
杉野の叫びと隠れていたであろう男の叫びが聞こえたのは同時だった。まあ知っていたが。
振り下ろされた鉄パイプを振り向きながら避ける。完全に頭を狙っていた。どうやら少しはやるようだ。

「避けっ!?」
とはいえ所詮は素人。避けるのはそう難しいことではない。不意打ちが避けられ、バランスを崩すチンピラ。その勢いを利用し足を踏みつけ、腰のベルトを持ち上げるようにして押し出してやればどうなるか。
「のわっ!!?」
答え、受け身も取れずに胸から地面に叩きつけられる。あれは痛そうだ。
「て、てっめぇ!!」
どうやらまだやる気のようだ。敵意に満ちた眼差しでこちらを睨みつける。と言っても四つん這いの姿勢でこちらを睨んでも滑稽なだけだがな。
「あれだけやられてまだやるんだ。臼井さん、手貸そうか?」
「いや、必要ない」
赤羽がニヤニヤしながら聞いてくるが、この程度の相手に助けなんて必要ない。向こうもまだやる気のようだし練習相手になってもらうとしよう。
腰を落とし、両手を頭の高さまで持ち上げる。特に誰かに教わったわけではないが、これが一番しっくりくる。
「おめえらやっちまえ!!」
どうやら不意打ちしてきたオールバックのチンピラがリーダー格のようだ。こいつらを片づけたら締め上げて目的を吐かせよう。
オールバックの声に遅れて反応し二人が私の左右を取り囲む。正直言って攻撃の隙はいくらでもあった。だがここは日本だ。専守防衛といこう。
状況を確認。右には馬鹿の一つ覚えのようにナイフを取り出したチンピラ。左にはリーダーの持っていた鉄パイプを構えたチンピラ。恐らくナイフ持ちが攻撃している隙に鉄パイプで殴る魂胆なのだろう。
「お、おい臼井囲まれてるぞ!行くぞカルマ、渚!」
「う、うん!」

「二人とも、まあ見てなって」
まったく、他人事だと思って……ま、いいか。目の前の戦闘に集中する。仕掛けてくるとしたら先にナイフだ。さて、いつ動くかな。
「死ねやオラァ!!」
お、意外といい殺気だな。と言っても攻撃が単調で避けやすい。突き出されたナイフを先ほどと同じように半身になり回避、左手でナイフを持つ手首を掴む。
「――ッ!?」
相手は身体を左に向けているため直ぐに私を攻撃することが出来ない。がら空きになった顎に拳を叩きこむ。脳をシェイクされふらふらになった隙に手首を捻りナイフを奪い取る。こいつ意外といいの持ってるな。
「いいナイフだな。借りるぞ」
膝に蹴りを叩きこみ姿勢を崩し、掴んだ腕を引き寄せ背中側に捻りあげる。所謂ハンマーロックと呼ばれる関節技だ。
「――ッ!?」
痛みで仰け反ったところに奪い取ったナイフを首筋に突き付け拘束、盾にするように鉄パイプを振りかぶっていた男に向き直る。
「こ、こいつッ……」
「どうした?こないのか?」
ゆっくりと前進しながら肉盾を押し付ける。一歩進むごとに男たちも一歩下がっていく。殴り合いの喧嘩には慣れていてもこうした搦め手は初めての経験らしい。
「ひ、卑怯だぞテメェ!!」
「卑怯?女を攫おうとしといて良く言う」
次は私の番だな。組み付いていた男の後頭部に頭突きを食らわせながら後ろに突き飛ばす。流れるように用済みになったナイフを投げ捨て鉄パイプ持ちに接近。
「こんのッ!!」
遅れて反応し、鉄パイプを振りかぶる男の懐に入り込む。得物を握る手を払いのけ喉笛に手刀。

「うッ!?」
悶絶する相手の腕を掴み足を差し込みながら体重をかけ左側に投げ飛ばす。この時点でまともに立てないだろうが、念のため倒れた男の腕を捻り肘を外し武装解除。
「うわ、いったそ」
赤羽の呟きに心の中で同意する。男の叫びが路地裏に鳴り響くが、すぐさま拳を叩きつけ黙らせる。これで二人。背後に気配、先ほど突き飛ばした男がこちらに接近するのを視認。
「ちっくしょうッ!!」
前進しながら馬鹿正直繰り出された左腕を掴み取り、脇腹、顎に肘を喰らわせる。そして、胸倉を掴み強引に投げ飛ばす！
「ぐはっ!?」
背中から石畳に叩きつけられた男はしばらく口をぱくぱくさせた後、そのまま気を失った。残るは後一人。
「う、嘘だろ……」
先ほどまでの自信はどこにいったのやら、顔を真っ青にしてガタガタと震えている。試しに一歩近づいてやると面白いように飛び跳ねた。
「どうした？かかってこい」
「え、エリート校に何でテメェみたいなのがいんだよぉ!!」
「さぁな」
本当に、何でこんなところにいるんだろうな。
「う、臼井さん大丈夫ですか!?」
「ああ、見ての通りかすり傷一つない」
事が終わったのに気が付いたのか奥田たちが血相を変えて近づいてきた。怪我を心配しているらしいがチンピラ風情に傷を付けられるほど私は弱くない。
「臼井すげーな!!あっという間に倒しちまったぞ!!」
「映画見てるみたいだったね」
よくわからないが褒められているようだ。さて、後はこいつらを拘束して先生達に連絡するか。

「誰か先生に連絡してくれ。それとこいつらの手足を縛るから手を貸せ」
近づいてきた潮田達にいつも持ち歩いている結束バンドを手渡す。さて、他のことは任せて私はこいつの相手をするとしよう。
「おい」
「あ？いてて、いてぇ!!?」
後ろに隠していた手を捻りあげれば案の定携帯電話が手から零れ落ちた。
「なんだこれは？」
画面を見る。どうやら仲間に連絡しようとしていたらしい。小賢しい奴だ。手に力を込め携帯電話を握りつぶす。
「ば、化物かよ……」
目の前で粉々になった携帯電話を見てチンピラは信じられないと言いたげに呟いた。これで連絡手段は断たれたわけだ。流石に何十人も呼ばれたら厳しいものがある。
「では楽しいお話しの時間だ」
「な、なにすん――」
喚く男を無視し首を掴み持ち上げる。絞めてこそいないが足が完全に宙に浮いてるので相当息が苦しいはずだ。
「君達、私はこいつとお話ししてくる後は頼んだぞ」
「あ、あんまやりすぎんなよ……」
女子中学生が高校生を持ち上げているというシュールな光景を目にし、ドン引きしている皆を横目にチンピラ共が乗ってきたと思わしきバンに向かう。後でこの車もパンクさせておこう。
「は、離せ！い、息が……」
「わかった」
私が手を離してやると咳き込みながらバンを背に座り込んだ。まあ休ませるつもりはないがな。今度は髪を掴み持ち上げる。まるで女のような悲鳴を上げながら男が悶えた。
「吐け、何が目的だ」
「わ、悪かったって！もう近寄ら――」

言い終わる前に男の身体を回し額を車の運転席のガラスに打ちつける。大きな音と共にガラスにひびが入り男の額が血塗れになった。
「――ッ!!?」
「お前のランチの予定なんてどうでもいい。聞かれたことだけ言え」
「こ、この野郎!!あとで覚えて――」
この期に及んでまだそんな減らず口が叩けるのか。髪を引っ張りもう一度、今度は後部座席のガラスに顔を叩きつけた。
「さて質問だ。今割ったガラスは二枚目。この車にはあと何枚ガラスが残ってる?」
「わかった!わかったよ!いやぁいいんだろ!!」
クソが、遅いんだよ。ガラスに押し付けていた頭を引っ張り少しだけ楽な姿勢にしてやる。男の顔は血塗れで鼻も折れ曲がり先ほどと同一人物だとは思えない。
「具体的にだ。余計なことはいらん」
「あ、あんたらを車で拉致ってから廃墟に連れ込んで輪すつもりだったんだよ……」
予想通りの答えで安心した。これで心置きなく痛めつけることができる。
「ほぉ、随分と良い趣味じゃないか。他に仲間は?」
「撮影用にあと5、6人呼ぶつもりだった……」
「誰に雇われた」
「はぁ?何の話だよ……」
どうやら本当に偶然目を付けられただけのようだ。まったく、日本は平和な国じゃなかったのか?
「臼井さん……って」
後ろを振り向く。神崎と茅野がこちらを見て絶句していた。まあそれもそうか。私の行動は民家の死角に隠れて見えていなかったはずだ。何かやるとは気が付いていただろうがまさかここまでとは思わなかったのだろう。
「う、臼井さんその人……」
「神崎、今取り込み中だ。悪いが後にしてくれ」

尋問はまだ終わっていない。男に続きを催促する。
「続きだ。何のためにこんなことをした」
計画は聞いた。次は動機だ。まあどうせ碌なものじゃないだろうがな。男も少しだけ余裕が出てきたのか呼吸が落ち着いてきた。これは愉快なことを聞かせてくれそうだ。
「クソ、鼻血が止まらねぇ……理由だと。んなもん簡単さ、エリートぶってる奴を見るとムカつくんだよ。だから俺らと同じレベルに落としてやるのさ」
一応自分のことは屑だと自覚しているのか。いや、開き直っているだけだろうな。
「金持ってそうなサラリーマンには女使って痴漢の罪を着せてやったり、てめぇらみてえなお高く留まった女は拉致ってレイプしてやったり……まあ色々だ」
「最低……」
茅野の言うとおりだ。本当に絵にかいたような屑だな。
「んだよチビ、てめぇもどうせ馬鹿高校だと思って見下してんだろ？いいよなぁ私立のエリートは、人生イージーモードでさ」
「お前はそれで、それだけの理由で何人食い物にしてきたんだ……」
こいつは救いようのない屑だ。そして私も屑だ。だが、屑には屑のルールがある。誇りがある。こいつはそれを平気で破った。
「ちょ、う、臼井さん!?」
「な、なにしやが――ッ!!?」
両腕を使って男の首を締め上げる。もうこいつの言葉なんて一言も聞きたくない。腕に込めた力を更に強める。
「惨めだな人生だな。このまま生きてても辛いだけだろう？いっそ、ここで死んだらどうだ」
「や、やめ……い、息が……」
「この世界はお前の憂さ晴らしの玩具じゃない。みんな必死になって生きているんだ。お前が今まで食い物にしてきた人達だってそうだ。そしてここにいる皆もだ」
騒ぎを聞きつけ男子達も私の前にやってくる。ここにいる皆は私

のような屑とは違う。未来に希望を描き、それを叶えるために全力で生きている。
「落ちこぼれと蔑まれ、虐げられ、教師からも見放され、それでも必死に足掻いている。何がエリートだ。何が馬鹿高校だ。下らないな、どうせ腹を裂けばお前も、私も、あそこの神崎も、皆同じ内臓が詰まってる」
「皆……同じ……」
　ああ、本当にイライラする。
「いいかよく聞けクソ野郎。落ちるなら一人で落ちてろ。どうしようとお前の自由だ。だがな、私やお前みたいな屑が、這い上がることすら諦めた弱虫が、精一杯努力して生きてる。そんな人達の足を引っ張っていい権利はどこにもない」
　更に締め上げる。どうせ聞いちゃいないだろうが言わずにはいられなかった。
「どうだ。わかったか」
「ねえ、臼井さん」
「なんだ。今忙しいんだ」
「そいつもう落ちてるよ」
　赤羽の指摘され男の顔を見てみる。案の定泡を吹いて気を失っていた。両腕の力を抜き男を解放する。気を失っているせいかまるで操り糸が切れた人形のように崩れ落ちる。
「はぁ、根性のない奴だ」
「いや、あれ喰らって平気な人の方が少ないから……」
　誘拐事件は潮田の突っ込みによって幕を閉じたのであった。

「この浴衣という服は慣れんな……」
　非常階段に腰かけ、身に纏った服を撫でながら呟く。結局今日の暗殺は誘拐未遂事件のせいでお流れになりその後はただの観光で一日が終わった。
「あ、臼井さんこんなところにいたんだ」

「む、神崎か」
　非常階段の出入り口に立つ神崎が私を見ていた。さっきは女子の部屋で皆と話していたと記憶しているんだが。
「皆のところにはいかなくていいのか」
「うん、ちょっと臼井さんとお話ししたくて」
「礼なら言わなくていいぞ」
　誘拐犯をぶちのめしてから皆に礼を言われたが正直あんなものを見てよく礼を言う気になったなというのが正直な感想だ。普通に考えて怯えるだろうに。
「それでも、お礼を言わせて。あの時臼井さんが助けてくれなかったら私達あの後酷いことをされたと思う。だから本当にありがとね」
「勘違いするな。私は自分の身を守っただけだ」
「じゃあ勝手に感謝する。これでいいでしょ？」
　そう言われてしまうと何も言えなくなってしまう。というか神崎ってこんなに芯が強い人間だったのか……
「……勝手にしろ」
「うん！あ、隣いいかな？」
　私が返事をする前に神崎が隣に座ってきた。あまり広いとはいえないため必然的に肩が触れ合う。
「臼井さんは皆の所に行かないの？」
「ああいうのは好きじゃない……それに私みたいな不気味な奴がいたら皆に悪いだろ」
「そんなことない、皆心配してたよ」
　神崎が悲しそうに呟くが何故そんなことを言うのか分からない。化物呼ばわりされるのが普通だったしここでもそんな認識だと思ったんだがな。
「今日臼井さん言ってたよね。学校なんて関係ない。皆同じだって」
「そう言えばそんなことを言っていたな」
　これは私が人を殺し続けて行きついた真理だ。ある意味真の平等主義とも言える。
「私、嬉しかったんだ」

「いきなりなんだ」
「ちょっと、昔話してもいいかな？」
　それから神崎は自分の過去について語りだした。エリートの父親の許で育ち、優秀であることを強要され、それから逃げるように姿を変え遊び耽る毎日。そして行きついた先がE組。
「それで自分の居場所が分からなくなっちゃってたんだ……」
「そうか……」
　親がいない私に親の重圧なんて理解できない。だが神崎の言うことは間違っている。居場所はあるものじゃない。自分で作るものだ。そして私の居場所は戦場だ。戦場でしか生きられない。だから必死に強くなってきた。
「だからあの時臼井さんがああ言ってくれて、私すごい気が楽になったの。肩書きなんて関係ないんだなって」
「それは君が勝手に気が付いただけだろう？」
「だからさっき言ったでしょ？勝手に感謝するって」
「むむむ……」
　私が困っているのが楽しいのか、神崎は鈴を鳴らしたように笑った。ああ、この笑顔が曇らなくて本当によかった。
「でも一つだけ訂正してほしいことがあるの」
「まだ何かあるのか」
　そういうと今度はとても優し気な表情で私を見つめた。こんな目で見られたのは初めてかもしれない。
「あの時、臼井さん自分のことを屑って言ったよね。あれは違うと思う」
「そんなことはない。私はく――」
　私が言いきる前に神崎が私の両手を握った。またこの目だ。私はこの目が嫌いだ。殺せんせーにも似たような目で見られることがある。これは駄目だ。これは私を駄目にする。
「臼井さんは屑なんかじゃないよ」
「だから、それは――」
「じゃあなんであの時私達を助けてくれたの？臼井さんなら逃げるこ

ともできたよね」
「それは……」
　否定はできない。私の身体能力なら簡単に巻くことができるだろう。でもそれをするのは私のルールに反する。
「屑に「屑じゃない！」わ、私には私のルールがある。それを守っただけだ」
「そう思えるってことは、臼井さんが優しいからだよ」
「……勝手にしろ！私は部屋に戻る！」
　これ以上は埒が明かない。ここは戦略的撤退を選択する。そんな私の姿面白いのか、神崎はまた笑うのであった。
「じゃあ、本当にいくぞ。ここは冷える。君も長居しないほうがいい」
「あ、待って私も行く！」
「はぁ……」
　女子部屋に戻るために二人で歩く。そんな修学旅行の一日であった。
　そして、この日を境に神崎は積極的に私に話しかけるようになった。本当にここは変な奴ばかりだ。そう思わずにはいられない。

放課後　お金の時間

～時計の時間～

「じゃじゃーん！かっけーだろ！」

早朝、トイレから戻り教室に入ると私の席がある列で杉野たちが騒いでいた。いや、杉野達というよりも杉野が一人で騒いでいるという表現のほうが近いだろう。

「うわあ、かっこいい時計だね。いつ買ったの？」

「いやさ、親父が新しいの買うっていうからくれたんだよ」

「なんだ杉野が買ったわけじゃないのかよ」

「いや俺が買えるわけわけないだろ」

何やら杉野が腕時計を見せびらかしているようだ。確かに彼の腕にはそれなりの値段がしそうな腕時計が巻かれている。まあそれはそうとしてだ。

「君達、会話の途中で申し訳ないが通行の邪魔だ」

「あ、ごめん」

「わりぃ」

別に意図的に塞いでいたのではなくただ単に気が付かなかっただけらしい。私が注意するとそそくさと場所をずらした。

「なあなあ、臼井も見てくれよこの腕時計！」

改めて杉野の腕に巻かれている腕時計を観察する。使い込まれて傷こそ入っているが作りもしっかりしていて悪くない時計だ。

「ああ、いい時計だな」

「いいよなあ、俺ももっといい時計が欲しいぜ。そうすりゃ時計に寄ってきたチャンネーをゲットできるってのに」

「と、時計だけで寄ってくるのかな……」

「わかってねーなー渚は。女って意外にこういう細かいところ見てんだぜ」

そういえば腕時計か。私もジャケットの袖を捲り自分の腕時計を見る。時刻を確認、次の授業までは時間があるな。まだ買って時間が経っていないためか、時計は新品のような輝きを放っている。

「そういや、臼井も腕時計使ってたよな。よかったら見せてくれよ」
「ああ、いいぞ」
　男子である以上こういった機械には弱いのだろう。目を輝かせる杉野たちの期待に応えるべく、左手に巻いていた腕時計を外し渚の机の上に置いた。金属のずしりとした音が机に響く。
「なんか……ごつくね？」
「う、うん……予想はしてたけど」
「お、思ってた以上だわ」
　よくわからないが彼らがそういうのならそうなのだろう。確かに杉野の腕時計と比べると些か厳ついとは思う。
「うわ、臼井さんの時計ゴツ」
「む、中村か」
　私達のやり取りを聞いていたらしい中村が話に入ってきた。私も杉野の真似をして自慢とやらをしてみよう。
「ちなみにどこの？」
「ふっ、聞きたいか？こいつはスイスのオメガ社が作ったシーマスター６００だ。ダイビング用に作られた腕時計で水中での活動に適した設計がされている」
「あ、いつもの始まった」
　いつものってなんだいつものって、まあいい。
「６０気圧まで対応可能なボディ。回転式のベゼルに水中での視認性を考慮した大型の文字盤、しかもトリチウムを使っているから夜間や水中でも高い視認性を維持できる。更にサファイアガラス製の風防は極めて強靭で例え水中で岩に擦ろうが傷一つつかない。デザイン、機能性、強度、全ての要素が完璧に纏められ欠点らしい欠点はみつからない。強いて言うのなら機械式なことくらいだな。とにかくこれ以上の腕時計はそうそうない」
「お、終わった……」
　説明が終わり皆を見ると何故だが一様に疲れたような表情を浮かべていた。この表情は見覚えがある。前に千葉と速水にハンドガンのカスタム内容を説明した時の顔だ。

「と、とにかくすげぇ時計なんだな」
「ああ、他にもスピードマスターというクロノグラフも持っているのだが、そっちも素晴らしくてだな！なんといっても「も、もうわかったから！臼井さんの時計が凄いのはじゅーぶん！わかったから！」なんだ中村」
　話に熱が入り始めたところで中村が割り込んできて説明は中断された。これからが良いところなのに……
「あ、ありがとう中村さん……」
「はあ、臼井こうなると止まんねえからなあ……」
「???」
　よくわからないが溜息をついているのが気になる。まあいいか、机の上に置いていた腕時計を再び手の内側に巻く。その仕草に中村が不思議そうな表情を浮かべた。
「あれ、臼井さんそうやって巻くんだ。意外」
「ほんとだ。なんか女子みたいな巻き方だな」
「女子みたいだなって、臼井に失礼だろ。一応臼井も女なんだからよ」
「いや、あんたが一番失礼でしょ」
　いつものことだが全くと言っていいほど女子扱いされてないな。これも過去の所業のせいか……一度神崎に女子らしさというものを習ったほうがいいかもしれない。既に手遅れ感が否めないけども。
「それにしてもそういう時計でその巻き方ってあまり見ないけど何か意味あるの？」
「特に深い意味はない。単純に動きまくるから傷つけたくないんだ」
「あー確かに烏間先生の授業でも動きまくるもんなあ」
　一応他にもガラスの反射光を見られないようにするだとか、ライフルを構えた時に視界に文字盤が映るようにだとか理屈はあるが、結局一番の理由は傷つけたくないからである。
「ちなみ、おいくらなの？」
　耳打ちするような仕草で中村に問われ、買った時のことを思い出す。えっと、確か……
「ああ、大した値段じゃなかったな。確か５０万くらいだったか？」

「へぇ、そうなんだ……え？」
相づちを打っていた渚の動きが止まった。正確には渚を含む杉野、前原、中村の全員である。
「ね、ねえ渚、聞き間違いじゃなかったら臼井さん今さらっととんでもないこと言ってなかった？」
「う、うん……」
なんか変な空気になってきた。前原が引きつった顔でこちらに訊ねてくる。
「う、臼井もう一回聞くけどそれいくらなんだ？」
「何回も言わせないでくれ。５０万だ」
「５０万？」
「５０万」
しばらくして前原たちの絶叫が教室に響き渡った。銃声にはなれているからどうということはないが耳元で叫ばれると流石にうるさい。
「いきなり耳元で叫ばないでくれ。うるさいじゃないか」
「お、おま、なんつーもん学校に持ってきてんだよ！」
「何って腕時計だが」
「臼井さんそういう意味じゃないからね……」
じゃあどういう意味だ。
「ぼ、僕のお小遣い何カ月分だろ……」
「いや何カ月ってレベルじゃねーだろ……」
このやり取りのあと、体育の授業でいつも通り腕時計を巻いたまま校庭に出ようとしたところ、渚達に「心臓に悪いからお願いだから外してくれ」と懇願されるというよくわからない出来事があったのはどうでもいいことである。

～買い物の時間～
「ふふふ、買ってしまった……」
放課後、私は教室でニヤニヤしながら目の前の紙箱を眺めていた。

この後は訓練もない。存分にこれを使い倒すことができるだろう。
「臼井は帰らないの？というかその箱なに」
「速水か、ちょっと待ってくれ今開けるから」
　速水も気になるのか後ろに回りこみ私の手元を覗きこんでくる。息を呑んで箱を開封する。そして中に入っている物を両手で掲げた。
「じゃじゃーん！エルカン、スペクターＤＲ可変倍率スコープだ！凄いだろ！」
「……」
　私の豹変っぷりに流石の速水も困惑しているようだ。だが私のテンションが上がってしまうのも理解してほしい。
「スコープってことはそれ銃のパーツ？」
「その通り！ずっと欲しかったんだ！先週注文して今日やっと届いた。今から試し撃ちにいくのさ！ああ、楽しみだなー！」
「二人とも何の話してるんだ……ん？それスコープか？」
　隣で帰宅の準備をしていた千葉も私の言葉に反応して混ざってきた。Ｅ組きっての射撃の名手だけあってスコープが気になるのだろう。
「ああ、今日届いたんだ。いやあ早く使いたいなー」
「そんなに凄いのか」
「ああ、凄いぞ！なんてたってアメリカ特殊作戦軍にも採用されているだけあって、耐久性、耐水性ともに文句のつけようがない！その上倍率を等倍と４倍で瞬時に切り替えられるから距離を選ばず照準を付けられる！ＶＣＯＧも悪くないがやはり実績があるのは信頼できる。こんなものがたったの２５００ドルで買えるんだからいい時代になったものだな！」
「そ、そうか……ん？」
　私の言葉に引っかかるものがあったのか、千葉は言葉を詰まらせた。速水も同じように首を傾げている。
「千葉、私の聞き間違いじゃなかったら今２５００ドルって言ってたよね」
「あ、ああ、俺もそう聞こえた」

「ということはだいたい２７万円くらい？」
「た、高すぎる……」
　この反応前にも見たことがあるぞ。腕時計の時と同じ反応だ。
「臼井、もしかしなくてもこれって自腹だよね？」
「ああ、烏間先生に請求してもよかったが完全に趣味で買ったものだからな。流石に申し訳ない」
「趣味で２７万……」
　確かに大人でもそうそう払うことのない金額に面食らうのも無理はないが、今までの暗殺でも凄まじい額の資金を消費しているはずなんだがな。特にプリンとか。あれいくらかかったんだろう。
「まあなんだ。今までの暗殺作戦にかかった費用に比べればこんなもの可愛いものだ。戦いには金が掛かるんだよ」
「いや、臼井のは微妙に意味が違う気が……」
「なんか言ったか？」
「いや何も」
「そうか。それはそれとして二人ともこいつの試し撃ちに行かないか？感想も聞きたいしな」
　その後は私たち三人でスペクターの試し撃ちを行い、その使いやすさに感心するのであった。

～感覚の時間～
「すまない片岡、この古文の言い回しが今一つわからないんだが」
「うんとね、それは――」
　放課後、私はたまたま立ち寄ったファミリーレストランで片岡と遭遇した。そして今こうして二人で勉強を教え合っている。いや、正確には私のほうが教わっていると言うべきか。
「ありがとう。お陰ですっきりしたよ。どうにも国語は苦手でなあ」
「日本に戻ってきたのって中学に入ってからなんでしょ？なら仕方ないよ」
「いや、教えてもらってばかりで申し訳ない」

「臼井さんにも数学教えてもらってるしお互い様だよ」
「それもそうか」
　おもむろに窓の外を眺める。日も落ちてきたようだ。そろそろ帰ったほうがいいかもしれない。前に座っていた片岡も私に釣られるように外を眺め、私と同じような顔をした。
「もうこんな時間なんだ。私はもう帰るね。臼井さんはどうする？」
「一人でいても仕方ないしな。私も帰るよ」
「うん、じゃ駅まで一緒に帰ろっか」
　一緒に立ち上がり片岡よりも先に伝票を掴み取る。ふむ、ドリンクバーとケーキ一つで粘ったお陰か大した金額じゃないな。
「今日は私が払うよ」
「そんな、臼井さんに悪いよ」
「講習代だと思って受け取ってくれ」
　片岡が何か言う前にレジに行く。そんな私の強情さに諦めたのか追及して来ることはなかった。
「合計１３５８円になります」
「五千円あれば十分か。はいこれで」
　カルトンに五千円札を置きレジから離れる。これで支払いは済んだので帰るとしよう。
「お、お客様！お、お釣りがまだ――」
「釣りは結構です。行くぞ片岡」
「ちょっと待ったー！」
　後ろで見ていた片岡が血相を変えて飛び出してきた。そしてそのまま私の横を通り過ぎ店員から釣りを受け取ると私に急接近してくるではないか。
「臼井さん、ちょっと話しようか」
「ど、どうしたんだ。顔が怖いぞ。なぜ腕を掴むッ痛い痛い引っ張るな！」
　私の抗議も虚しく片岡に引きずられ店の外に出る。
「臼井さん、これ」
　片岡の手には先ほど払った分の釣りが握られている。受け取れと

言うことだろうか。別にいらないんだがな。
「いや、いらないってば」
「受け取りなさい」
「あ、はい」
凄まじい怒気を感じ反射的に釣銭を受け取ってしまう。いったいどういうことなんだ。私が何をしたんだ。
「臼井さん」
凄まじい剣幕に思わず息を呑む。脳内では警報が鳴りっぱなしだ。
「な、なんだ？」
「いつもああやってお金払ってるの？」
「ああやって？」
「お札押し付けるみたいに払ってるのかってこと」
「押し付けるの意味がわからないが金の払い方はいつもと同じだが……か、片岡？」
何故だ。猛烈に片岡が怖くてしかたない。冷汗が額から頬、顎へと伝わり襟に染みを作った。
「臼井さん……お金はちゃんと払おうね」
「いや払っただろ。ちゃんとチップも含めて」
「……あ、あんたねぇ」
この数秒後、片岡の説教が始まったのは言うまでもないことである。解せぬ。

「臼井さんわかった？」
「な、なんとなくわかった」
凛として説教の名前に恥じない説教を披露され、精神を削られた私は頷くしかなかった。対する片岡のほうも頭に手をやって疲れ切った表情を浮かべている。
「はぁ、常識がないのは知ってたけど予想以上だった……」
「そ、そんなにおかしな払い方だったかなあ」
世界を渡って知ったことの一つは金払いの良い奴は信用されると

いうことだ。だから特におかしなことはしていないつもりだったんだが……
「どこの世界に倍以上のお金押し付ける客がいるのよ！」
「ここにいるぞ」
　私が反射的に言ってしまった言葉を聞いた瞬間、片岡の顔から全ての感情が抜け落ちた。これは不味いぞ。
「ご、ごめんなさい」
「はぁ……とにかく！ああやって押し付けられても店員さんが困るだけだからもうやらないこと、いい？」
「わ、わかった」
「はぁ、これはまだまだ時間がかかりそうね……」
　よくわからないがこれ以上何か言うと私の命に関わりそうなので大人しく頷くことにする。それに満足したのか片岡は帰ると言ってくれた。ようやく解放される。長かった。
「あと臼井さん」
「まだ何かあるのか」
「今みたいなこと磯貝君の前では絶対にやらないであげてね」
「どうして」
「多分泣くから」
「そ、そうか……」
　それだけ言うと片岡は背を向けて去っていった。仕草がとても様になっていた。なるほど、これがイケメンという奴か。

　～お勉強の時間～
「こんな所に呼び出して何の用だ？」
　例の支払いの件から三日後の放課後、私は片岡に呼び出されて空き教室にやってきた。
「ごめん、いきなり呼び出して。でもどうしても聞きたいことがあって」
「別に構わないよ。で、要件とはなんだ？」

適当な椅子に座りつつ、何か心配するような片岡の表情に困惑する。これは私が何か不味いことをしている時の顔だ。カエデによくこんな顔で注意されるので覚えてしまった。
「単刀直入に聞くね、臼井さん今週何円使った？」
「はぁ？」
「最近臼井さんのお金遣いが荒いって噂が流れてるの知ってる？」
「いや、初耳だ」
そんな噂が流れているのか。金を持っているのは事実だが皆の前で散財したことはなかったはずなんだがな。
「不躾なことを聞いてごめん。でも、もし噂が本当ならクラス委員としても友達としても見過ごせない。それにこの前のこともあるから余計に心配なのよ」
ここまで言われて答えない程私は薄情ではない。片岡の質問に答えるべくここ一週間の記憶を辿る。ここ一週間は本当に色々なものを買ったな。
「えっと今週使った金だったな。まずエルカンのスペクターＤＲを買った。確か２７万くらいだったか？それからＥｏｔｅｃｈのＩＲレーザーサイトも買った。あれは２０万だったな。他はボルテックスのホログラフィックサイトも注文したからそれも合わせると……５４万円使ったな。いや、昨日ブッフェバイキングも行ったから５５万か」
「ご、五十……」
「と言っても支払いはドルだから本当は微妙に違うだろうけど……ってどうした片岡」
普段は凛としている片岡の表情が面白いくらいに崩れている。まるで信じられないと言いたげな顔だ。まあよく考えたら、というかよく考えなくても一週間で５０万円使うのは常軌を逸しているのだろう。
「千葉君と速水さんが言ってたこと本当だったのね……ねえ臼井さん、そんなにお金使って大丈夫なの？その、生活費とか」
どうやら純粋に心配してくれているようだ。こういった気持ちは

素直に嬉しいが、片岡の懸念は杞憂に終わるだろう。
「心配してくれるのは嬉しいが大丈夫だよ。銀行口座には日本円で八千万くらい貯めてある。私が馬鹿な使い方をしなければ向こう十年は遊んでくらせるだろうな」
「その馬鹿な使い方してるから心配してるんでしょーが……」
「ん？何か言ったか？」
　声が小さくて聞こえなかったが表情からして本気で心配してくれているのがわかる。だからこそ勘違いのせいでいらない心配をさせてしまったことが悔やまれる。
「八千万って凄いね。ぜんぜん想像できないよ。全部臼井さんが戦って稼いだお金なんだしょ？」
「そうだな。でも所詮汚れた金だ。誇れるようなものじゃないよ」
「ううん、それでも本当に凄いとことだと思う。私達と殆ど同い年なのに生活費も学費も遊ぶお金も全部自分で稼いで……今の私じゃきっと無理」
　片岡が何を言いたいのか全く見えてこない。何となく諭されているのはわかるのだが、私が疎いせいで理解することができないのだ。
「今まで使ってきたお金も、これから使うお金も全部臼井さんが血を流して手に入れたお金だよね？」
「その通りだな……」
「そんな大事なお金を今の臼井さんが言ったみたいに使うのって、皆からどう思われると思う？」
「自分を……蔑ろにしている？」
　ここにきてようやく片岡が本当に言いたいことを理解することができた。これはきっと金額の問題じゃないのだろう。自分の命と引き換えに手に入れた金を平気で散財することできる。その考えが間違っているのだ。
「茅野さんや倉橋さんがよく「もっと自分のこと大切にして」って言ってるじゃない？つまりそういうこと」
「確かに、よく考えればそうだよな……どうして気が付かなかったんだろ」

自虐癖といい金銭感覚のずれといい直すべき欠点が多すぎる。普通に生きるってこんなに難しいことだったのか。
「自分を大事にするって難しいんだな……」
そうやって思考の海に潜航していると不意に頭を撫でられた。この教室には片岡以外誰もいない。つまり片岡が撫でているに他ならない。
「そんなに落ち込まなくても大丈夫！時間はまだまだあるし私達も協力する。だから焦らないでいいからゆっくり変わっていこ？だって仲間だからね」
「うん……ありがと」
こうして撫でられるとやはり自分は年下なのだと自覚する。皆といることによって今まで抑えつけていた私の子供の部分が露わになっているのだろう。
「こうしてると水泳部で後輩相手にしてた時思い出すなあ。あんまり実感なかったけど臼井さんって本当に年下なんだね」
「そのネタはもう止めてくれ……」
からからと笑う片岡の見て私は「イケメグ」というあだ名の本当の意味を理解した。これは同性でも惹かれるだろうな。本人は不本意らしいが彼女の人徳というやつなのだろう。
「ごめんごめん、じゃ、一段落ついたところで……お勉強しようか」
「お、お勉強？」
なんか片岡の雰囲気が変わったぞ。嫌な予感がする。思わず椅子から立ち上がろうとするがその直前で片岡が私の肩を掴んできた。
「さっき協力するって言ったでしょ？だから私がみっちり庶民の暮らしを教えて上げるから」
威圧感が凄い。これじゃあ凛として説教じゃなくて厳として説教だな、って違う。早く逃げなければ。
「は、離してくれ！顔が怖い！」
「駄目に決まってんでしょ！臼井さんあんたこのままだとマジで卒業する前に破産するわよ！」
「誰が破産するか！」

「一週間で５０万使う人間が言っても説得力無いのよ！」
立ち上がろうとする私とそれを押えつけようとする片岡。唐突に発生した力比べ。彼女もかなり力持ちだが流石に私の方に分があるらしい。徐々に片岡が押されていく。
「う、臼井さん力強すぎ……仕方ない、みんなー！」
片岡が窓に向かって叫ぶと独りでに窓が開き、どこに隠れていたのか複数の人影が中に入ってきた。いったい何時の間に。
「ごめんねーさっちゃん」
陽菜乃がニコニコしながら逃げようとする私の腕を押えつける。
「臼井さんごめんね……」
矢田が申し訳なさそうに……いやこれ嘘泣きだ。
「ッ！臼井力強すぎっ」
速水が呆れながら。
「祥子の裏切りものー！なんで一人でブッフェ行ってるのー！」
若干一名違う目的の者がいるが計四人の力で強引に椅子に押さえつけられる。くそ、初めから謀っていたのか。いくら力が強いとはいえ流石の私も力負けしているのか徐々に椅子に座りそうになる。だがまだ終わっていない！
「負けるもんかー！」
「う、嘘!?」
遂に四人の力を押しのけ逆引き摺るようにして扉に向けて歩き出す。というか何でこんなことしているんだっけ。
「ッ！こうなったら……来てー！」
こんどは誰だ！そんなことを考えていると扉が開き外から増援がやってきた。
「ごめん、臼井！」
「磯貝！何故君が！」
予想外の男子の出現に負荷は更に増していく。もはや意味が分からない。
「本当にごめん！でも片岡が手伝ったらカップ麺奢ってくれるって！」

「安い男だな！」
「だってカップが丼ブリタイプなんだぞ！あれすっげえ高いんだぞ！」
「知るか！」
こ、このままでは負ける！私は負けないために更に力を振り絞る。途中素直に片岡と勉強すればいいだけじゃないかという考えが過ったがそれは無視した。そんなことを考えていると更に力が強まった。今度はなんだ！
「6人がかりで押さえてもまだ動けるとか流石臼井さんだわ」
「なんでカルマまで！」
「え、面白そうだからに決まってんじゃん」
「だと思ったよ！畜生！しまっ!?」
何かに躓いたのかあと一歩のところで床に転がる。だが扉はまだ開いている。まだ終わっていない！最後の力を振り絞り腕の力だけで廊下に向けて前進する。
「か、烏間先生ぇ！」
そしてちょうど扉の前を歩いていた烏間先生に助けを求める。きっとこの人なら助けてくれるはずだ。先生は私達を一瞥すると優し気な微笑みを浮かべてこういった。
「君達、遊ぶのもいいが程々にな」
「せ、先生ぇえぇ!?」
一番信頼していた大人のまさかの裏切りにあい気を抜いてしまった私はそのまま教室の中へ引きずられていった。
「いやあああ!!」
ちなみにこの後普通に社会勉強した。磯貝の節約術がとても興味深かったとだけ言っておく。なんだこれ……

「サチコじゃない……ってなんでそんなボロボロなのよ」
「ビッチ先生……途中までいい話だったんですよ……」
「……何だかしらないけどココアでも飲んで元気だしなさい。今淹れてきてあげるわ」
「び、ビッチ先生ぇ！」
「いきなり抱き着い、ちょ、何マジ泣きしてんのよ……はぁ、もうはいはい泣かないの」
ビッチ先生に撫でられながら考える。ほんと、どうしてこうなった。

放課後　メイドの時間

「な、何故……」

丈が異常に短い黒いエプロンドレス、フリルのついたヘッドドレス、レースの白いソックス、エトセトラ……

紛うことなきジャパニーズメイドの衣装、見た目の可愛さを追求して作られたそれは、当然だが実用性皆無だ。少しでも戦闘行動をしようものなら体中が擦り傷だらけになり、白と黒のコントラストは例え５００ｍ先で対赤外線処理を施したバラキューダを被っていたとしても簡単に発見されるだろう。

だが、それは別に問題ではない。そもそも用途が違うからだ。問題は別にある。

「こ、こんな格好を……」

問題はそれを私が着ているということだ。あまりの恥ずかしさに顔は真っ赤、目はきょろきょろと泳ぎ、心臓ははち切れそうに脈打っている。

「どうして、こうなった……」

私は何故こんなことをする羽目になったのか、記憶をたどることにした。決して現実逃避などではない。

日曜日、普段なら誰かしら（主にカエデと陽菜乃からだが）連絡してきて出かける羽目になるのだが、今日は珍しく誰とも会う約束をしていなかった。

私は一人で時間を潰せるような趣味を持っていない。一昔前ならトレーニングと銃の整備、それが終われば後はひたすら酒を飲むといった終わった生活をしていた。

だが、トレーニングはやりすぎると怒られるし、かといって撃ってもない銃を整備するわけにもいかない。酒は言わずもがなである。つまり何が言いたいのかと言うと、猛烈に暇だった。

「暇だー！」

ベッドに置いてあるタコのぬいぐるみに顔を埋め足をバタバタさせる。非常に馬鹿っぽい姿だが、この有り余る体力の行き場がない。
「カエデに連絡でもしてみるか？」
あんまり自分から誘ったことがないから少し緊張する。放置していた携帯電話を手に取り連絡アプリを起動、カエデの連絡先にメッセージを送る。
「今日、暇ですか？っと」
送信ボタンを押しメッセージを送る。そしに顔を埋めた。枕代わりにもなるぬいぐるみはマシュマロのように柔らくてこのままどこまで沈んで行ってしまいそうな錯覚に陥る。
「……もふもふ」
そうして顔を埋めていると携帯電話の着信音が鳴った。電話を手に取りアプリを開く。案の定、渚達とどこかに行くらしく遊べないとのことだった。私もどうかと書いてあったが、水を差すのもどうかと思い断っておいた。
「……」
何をするわけでもなく、ただ仰向けに寝転がる。こうしていると昔を思い出して少し嫌な気持ちになる。
「……外、出るか」
ベッドから立ち上がりクローゼットに向かう。思うに私は誰かに頼りすぎなんだ。少しは自立すべきということだろう。

「うん、おいしい！」
クレープを食べながら目的もなく商店街を歩く。ふわふわのクリームと甘酸っぱい苺をサクサクのクレープが包み込み、何とも言えない味を作り出す。
「今度、カエデも誘おうかな……ん？」
クレープを食べ終えて次は何処に行こうかと考えていると視界の先で何やら二人の男がもめていた。片方はウェイターのような恰好をした男でもう片方はいかにもなチンピラだった。

もめているという言葉には語弊がある。どちらかと言えばチンピラがウェイターに一方的に突っかかっていると表現したほうが正しいだろう。
行きかう通行人たちはチラチラと二人を見ているが面倒を被るのは御免なのか、誰も仲裁しにいこうとはしない。
「……しかたないか」
私は溜息をつくと二人に駆け寄っていった。思えばこれが全ての始まりだった。

「な、なんで私がこんな格好を……」
そして今に至る。仲裁は簡単に終わった。チンピラはよくある当たり屋で私が少し殺気を出して脅してやるとすぐに逃げていった。
問題はそれからだ。助けた男はどうやら喫茶店を経営しているようで、私に礼を言ったあとしばらく私のことを見ると何を思ったか自分の店で働かないかと持ちかけてきた。
当然断ったのだが、一日だけでいいからと食い下がってきた。当時の私は暇のせいで判断力が鈍っていた。それならばと安請け合いしてしまったのだ。
そしてあれよあれと言う間にメイド服を着せられて店員として働くことになった。どうやらここは竹林が言っていたメイド喫茶というものらしい。
「祥子ちゃんって言うんだっけ?ごめんね、店長変人でさ。たまに貴方みたいな子連れてくるのよ」
私と同じメイド服を着た若い女性が申し訳なさそうな顔をしてそう言った。どうやらこういうことはたまにあるらしい。
「あとで店長に注意しておくけど、今日は社会勉強だと思って我慢してくれないかな?ちゃんとお給料は払わせるからさ」
社会勉強か……目下普通の生き方を学んでいる身としては、絶好の勉強のチャンスなのではないだろうか。本当なら中学生なので働いてはいけないのだが、誰も私が中学生だとは気が付いていないらし

い。ここは黙ってることにしよう。
「……わかりました。では、私は何をすればよろしいのでしょうか？」
「うーんと、まずは挨拶からかな？私に続いて真似してみて」
「はっ！」
店員の人はよくわからないポーズをとってとんでもないことを言った。
「おかえりなさいませ！ご主人様！」
「……はい？」
疑問が頭の中に浮かび思考がフリーズする。が、すぐに我に返る。こ、これを私がやるのか。だが、今更覆すのも不味い……ええい、ままよ！
「お、おかえりなさいませ、ご、ご主人様！」
よくわからないポーズも一緒だ。一気に顔が赤くなる。やはり、あの選択は間違いだったかもしれない……

こうして働き始めてから一時間が経過した。正直言って意味不明な店だ。何がしたいのかわからない。メイドなんて要するに給仕だ。給仕は雇うものであって間違っても会いに行く存在ではない。
そしてそれ以上に疑問なのが意外と客が入ってることだ。しかもそのほとんどが男だ。メイド服を着た女を見に来ているのだろうか。なら風俗にでも行けばいいのではないだろうか。
「お待たせしましたーご、ご主人様」
客のいる座席に料理を配膳する。未だにご主人様の下りでつまってしまう。それ以外は元傭兵としての能力をフルに使い他の店員と謙遜のない動きが出来ていると思っているが、こればかりはどうにも恥ずかしくて上手く言えない。
耐えず襲ってくる羞恥心との戦いに私は自棄になることで対処した。だが、慣れは怖い物でもう一時間も経つとノリノリで写真を撮ったりオムライスにケチャップで名前を書いたりとはっちゃけていた。
「ふふ、可愛い……」

休憩時間、控室に設置された姿見に映る自分に思わず顔が綻ぶ。やっぱり私はこういうのが好きらしい。とは言え好きだからと言って人前でこの格好ができるかと聞かれれば無理と言わざるを得ない。

スカートの裾を掴んでくるくると回ったりポーズを取ったりと色々試す。うん、可愛い。

「祥子ちゃん、お客さんのオーダーお願い」

「はーい」

さて、行くとするか。

ホールに出て頼まれた座席に向かう。あれ、あの客の後ろ姿どこかで見たような……まあいい、私はやけくそになりながら客の横に駆け寄った。

「お待たせしました、ご主人……さ……」

「注文、いい……か……」

よく見ると整っている顔、そしてそれを隠している眼鏡、どうみても竹林だった。時間にして数秒か、あるいは数分か、見つめ合う私達。先に動いたのは彼だった。

「……僕は何も見なかった。ああ、何も見なかったとも」

眼鏡を指で押し上げそう言う。その言葉にまるでバケツで水を掛けられたかのように頭が冷やされ、そして再び沸騰する。

「あ、その、えと！ち、違うんだ！こ、これは――」

「何も言わなくていい。人には色々な一面がある。それだけだ。それよりも注文いいかい？」

極めて冷静な竹林の言葉に何も言えず私はただ顔を赤くして頷くことしかできなかった。

「……は、はい、かしこまりました」

「それにしても本当に意外だな……」

ボソッと追い打ち掛けるの止めてくれ……

「はぁ、酷い目にあった……」

昼のピークも過ぎ去り人気の少なくなった店内で私はテーブルを

拭きながら溜息を零した。まさか竹林が来るなんて思いもしなかった。思い出すだけでも顔が赤くなってくる。
「これ以上知り合いに見られたら死ぬな」
死因が憤死なんてみっともないにもほどがある。まあ、流石にもう知り合いが来ることはないだろうけど。
背後から店のドアに付けられたベルが鳴る。どうやら来店のようだ。気配は三つ、呼吸音と足音からして男女の三人ペアだろう。他にも店員がいるのでその人に任せ私は片づけに徹する。
「何で、メイド喫茶……」
「いやさ、俺一回行ってみたかったんだよねえ。へぇメイド服貸出してんだ。よかったんじゃん渚君」
「何が良いのか全然わかんないんだけど」
「あはは、渚なら似合うんじゃない？」
「茅野まで便乗しないでよ……」
背筋が凍った。ここまでの恐怖を感じたのはアフリカで政府軍に捕まった時以来だと思う。飛び上がりそうになるのを必死に抑えなんとか平常心を維持しようとする。
「おかえりなさいませ、ご主人様！空いてる席へどうぞ」
「あ、どうも。ほんとにご主人様って言うんだ……」
どう考えても渚の声だ。それにカルマ、そしてカエデ。メッセージで渚達と用事があると言っていたがよりにもよってどうしてここに来るんだ。
でも顔はまだ見られてない。テーブルを拭き続ければごまかせるはず。絶対にばれるわけにはいかない。特にあの赤い奴には絶対にばれるわけにはいかない。
「このメイド喫茶パフェが美味しいって評判なんだって！私前から行ってみたかったんだー」
「そうなんだ、茅野ちゃんが言うくらいだから間違いないだろうね。あ、渚君メニュー取ってくんない？」
何で私の真後ろの座席に座るのだろうか。わざとやっているのか。竹林といい、皆わざとやっているのか？

三人はまだメニューに目が行ってて私には注意が向かないはず。このまま横に移動して顔を見せないように頑張ろう。
「おすすめはこの特製苺パフェだよ。竹林君が美味しいって言ってたんだ」
「じゃあ、僕はそれで。カルマ君もそれでいいよね。すいません、注文いいですか？」
予想以上に早く決まってしまった。本気で不味い。カエデ、今日ばかりは恨むぞ……
前に椚ヶ丘のスイーツは全て網羅していると言っていたが、まさかこんなメイド喫茶まで範囲に入っているとは……
「……」
「あの、すいませーん。店員、いやメイドさん？」
ど、どうしよ……ほんとにどうしよ……そうだ！私は拭いていた座席に置いてあったメニューを顔の前に広げて向き直った。
「ご注文はお決まりですか？」
「……あの」
「はい、なんでしょうか」
「何で、メニューで顔隠してるんですか？」
「……宗教上の理由です」
「そんな宗教聞いたことないよ!!」
うん、今日も渚の突っ込みは冴えてるな。いや、そんなことはどうでもいい。早く注文を言ってくれ。
「あれ……この声どっかで聞いたことあるような……」
まずい渚が気付きかけている。メニューで目の前を覆っているせいで三人がどういう顔をしているか全くわからないが、どう考えても怪しまれている。
「ねえメイドさんの名前教えてよ」
探るような声でカルマが私に訊ねてくる。まだ、ばれてないよな？というか名前どうしよう。そうだ、あれがいい。
「あ、藍井祥子（しょうこ）です！」
咄嗟に昔の名前を言う。大丈夫、この名前を知っているのはカエデ

だけ……あっ
「それ祥子(さちこ)の昔の名前じゃん」
無慈悲にもカエデが真実を口にしてしまった。うん、終わった。
「え、それほんと？じゃ、じゃあ……」
「おやおやおやぁ？」
三人とも確信を得ていると言っても過言ではないだろう。これ以上はどう取り繕っても逆効果だ。諦めて顔を見せるべきなのだろうが、そんな思考に反してメニューを持った手は一切動かなかった。
「メイドさーん？メニューどかして顔見せてくんない？」
「う、うう……」
「ほらほら、俺らご主人様なんでしょー？命令してんの聞こえない？それともご主人様の命令が聞けないのかなー？」
「あ、悪魔だ……」
見なくてもこいつがどんな顔してるのか容易に想像がつく。いつもいつも私のことからかいやがって……ああ、もうこうなったら自棄だ！メニューを下ろし三人を睨みつける。
「そうだよ！私だよ！」
顔は真っ赤でもう酷い有様だろう。それに涙も少し出ている。ほんとに、どうしてこうなったんだ……
「さっちゃんさん……何してんの」
「これはこれは……」
そう言ってカルマはニヤつきながら携帯電話で写真を撮った。勝手に撮るなよ……いや、もう遅いけどさ……
「祥子」
男子二人が何とも言えない顔をしている中で、唯一カエデだけは真剣な顔をしていた。何か私に思うところがあったのかもしれない。
「とりあえず先にパフェ持ってきてくれないかな？」
あ、そうですか。カエデは私よりもパフェのほうが大事なようだ。もういいよ。だけどお陰で少しだけ冷静になった。そしてやるべきことを思い出す。
「……わかった。今伝えてくる」

背を向けてスタッフに注文を伝えに行こうとするとカルマに呼び止められた。どうせ碌なことじゃないだろうな。
「いやいや、駄目でしょ臼井さん、ちゃんとご主人様って言わないとさー」
「う、うう……」
こいつ、好き放題言いやがって……さっきまで言えたのは赤の他人だったからだ。どうせもう二度と会うことはないと持ったからこそはっちゃけることができた。
けど三人とは明日も明後日も、あるいはこれから何十年も付き合うことになるのかもしれない。だが、致し方あるまい……私は腹を括って息を吸い込んだ。
「か、かしこまりました……ご、ごしゅじんさま……」
恥ずかしすぎて舌足らずな発音になってしまう。下がっていた顔の熱が再び再燃する。恥ずかしくて仕方がない。
羞恥心で人が殺せるのなら間違いなく大量虐殺ができるだろう。耳まで真っ赤になった顔を隠すように足早に踵を返す。
「今の録音したんだけど後で聞く？」
「鬼だ、鬼がいる……」
もうやだ……家帰りたい……

「死にたい……」
「ご、ご愁傷さま」
商店街をとぼとぼと歩きながら呟く。渚のフォローも現状は大して役に立たない。結局渚達と話していたせいで中学生であることが店の人にばれてしまい、それまでの時給を貰って店を出ることになった。
店長と店員の人からは来年になったら働かないかと言われたがもう二度と行くもんか。というかメイド喫茶自体金輪際行かないようにしよう。
「それにしても、狼狽えた臼井さんほんと面白かったなー」

「カルマ君、そこら辺で止めないと祥子が本気で泣くと思う」
　ありがとうカエデ、だけど色々遅いと言わざるを得ない。
「茅野ちゃんがそこまで言うなら。あ、渚君にメイド服着せるの忘れてたわ」
「だから着ないよ!!」
「ええ、絶対似合うって」
「似合ってても着ないから」
　渚とカルマが言い合い（実際はカルマが一方的にからかっているだけだが）を始めたので私は解放された。
　三人の少し後ろを歩き持っていた鞄に入れていた給料袋を手に取り中にある六枚の紙幣を取り出す。
「それ、さっきのお給料？」
「ああ、そうだ」
　いつの間にかカエデが横から覗き込んでいた。五時間働いて貰ったのはたったの6千円。そこそこのウィスキーを一瓶買ったらなくなってしまう額だ。
「五時間で6千円、傭兵だったら同じ時間で１００万は稼げた」
　危険度が段違いな上に弾薬費や治療費も自腹だ。割にあうかと聞かれれば首をかしげたくなるが、それが当たり前の世界で生きてきた私には衝撃的な事実だ。
「え、傭兵ってそんなに貰えるんだ」
「私はちょっと特別だったからな。だから、こんなの私にとっては端金もいいところだ」
　皆こうやって地道に頑張っているのだろう。金のことについては片岡にみっちり叱られたが、今やっと本当の意味で理解できた気がする。
「だけど、生まれて初めて、戦い以外でお金を貰えた」
「……そっか、よかったね」
「うん、本当に……嬉しい」
　これは飾っておこうか。いや、金は使う物だ。そうだいいことを思いついた。腕時計を見る。少し早いがちょうどいい時間だ。

「なあ、皆よかったらこの後ファミレスにでも寄らないか？もちろん私の奢りだ」
「え、いいの？さっちゃんさん」
「ああ、金はあるからな」
　手にした紙幣をチラつかせる。そんな仕草におふざけモードだったカルマの目が普通に戻った。
「でもそれ臼井さんがさっき貰ったやつじゃん？いいの？」
　さっきまで散々からかってきたくせにこういうところは妙に律儀だな。もしかしたらあれは彼なりの友情表現のつもりなのかもしれない……絶対違うな。
「どうせあぶく銭だ。後生大事に貯めておくようなものじゃない。それに口止め料も兼ねてるんだ。遠慮しないでくれ」
「そっか、じゃあそうしようか。二人ともいいよね？」
　カルマの言葉に二人が頷く。四人でオレンジ色に染まりつつある商店街を歩く。このあと、ファミレスで彼に写真や録音でからかわれたのは本当にどうでもいいことだと思いたい。
　ちなみに何故か殺せんせーも知ってた。もうやだ、死にたい……

放課後　性別の時間

目が覚めたら男になっていた。
「うん、やっぱり男だ」
洗面所の鏡に映る男になった自分を見て呟く。そこには臼井祥子を男にしたらこうなるだろうと思われる人間が立っていた。
自分でも何を言っているのか全くわからないしわかりたくもない。けれどそうとしか言いようがなかった。
「どこからどうみても、男だ……」
顔と身長はそのままだが、骨格と筋肉の付き方が明らかに男のそれだ。恐らく体重も増えているはずだろう。それに声も少し低くなっている。
「誰かに薬でも打たれたか？」
薬物は何度か打たれたがここまではっきりした幻覚をみたことはないしそこまでリアルな幻覚を見る薬物も私は知らない。そもそも寝ている私に何かしようとすれば家に入った時点で気が付くだろう。
「臼井、祥（しょう）」
学生証に印字された名前を読む。生年月日も学籍番号も全て同じだが、性別が男になり名前がこうなっていた。それだけじゃない。クローゼットとタンスにしまっていた服が全て男物になり、部屋も見知ったインテリアの替わりに見たことない漫画やゲーム機があった。
まるで私が男として生まれていたらこうなっていただろうと想像できるだろう生活感あふれる部屋。唯一同じだったのは銃の配置くらいか。
「……夢だな」
うん、そうだ。これは夢だ。世の中には明晰夢という夢があるときくし、恐らくこれがそうなのだろう。決して思考を放棄したわけではない。と、思いたい。
「……リボンはそのままなんだな」
化粧台に置かれたケースに仕舞ってある知っているものよりも少し短いリボンを手に取り髪を結ぶ。いつもようにポニーテールにす

るには些か短いので後ろで適当に縛る。いわゆる一本結びという髪型だろうか。
「女顔は渚一人で十分だろうに……」
少しだけ輪郭が男らしくなっているが、基本的に私と同じ顔なので私が男装しているようにしか見えない。夢の世界の私がどういう立ち位置なのかは知らないが、キャラが被っていると言わざるを得ない。まあいい、とにかく……
「学校に行くか……」
例え夢だろうと、平日なら学校はやっているだろう。パニックになっていつもより大幅に遅れてしまったが遅刻するわけにはいかない。
決して学校に行けば少しはこの異常な事態から目を逸らせるだろうだなんて思っていない。

「いつになったらこの夢は覚めるんだろうか……」
校舎前で立止まりぼやく。本当に異常なまでにリアルな夢だ。身体が少し重い以外はいつもと何もかわらない。
というか本当に夢なのだろうか。いくら明晰夢と言えども舌にまとわりつく唾液の感触まで再現できるものなのだろうか。いや、夢じゃないと困るんだが。
「皆の反応が気になるところだが……」
学生証を見る限り初めから男ということになっているのだろう。身の振る舞いには気を付けた方がよさそうだ。
「あ、しょーちゃんおはよー」
そうやって玄関前で立ち止まっていると聞き慣れた声が聞こえた。振り向けば花壇の方向から手にじょうろを持った陽菜乃が私に手を振っているではないか。反応を見る限り私は男で通っているのだろう。
「ふ、ここでもちゃん付けか……」
どうやら夢の世界でも陽菜乃は陽菜乃のようだ。そうしている間

にも彼女はみるみる近づいてくる。いつもなら抱き着く勢いで来るのだが今日はいつもより距離があった。
「え？・というかしょーちゃんいつもより遅くない？何かあったの？」
腕時計を見れば既に授業開始１５分前だった。いつもなら一時間前には到着している。彼女が疑問に思うのも無理はない。
とは言え突然男になってパニックになっていましただなんて説明するわけにはいかない。適当に濁すとしよう。
「いや、寝坊しただけだ。だからそんなに心配しないでくれ陽菜乃」
「ふぅん……えっ!?今名前で……」
やばい、つい癖で名前で呼んでしまった。反応を見る限り普段から苗字呼びなのだろう。これは不味い。慌てて取り繕う。
「や、その、すまない、呼び間違えた。悪かったな倉橋」
私は気にしないが世間一般では本人の許可なしに名前で呼ぶのは失礼だと聞く。女性ならなおさらだ。
「陽菜乃……陽菜乃……」
私が謝ると彼女は何故か急にそわそわしだした。何かぶつぶつと呟いているし今さっきまでこっちを見ていたのに今では目を合わそうとしても逸らされる。
しばらくしたのち、陽菜乃は顔を合わせずに目だけこちらに向けてきた。私のほうが身長が高いので必然的に上目遣いになる。横顔から見える頬は心なしか赤いような……
「……別に、しょーちゃんならいいよ？」
え、何その反応。私は陽菜乃の想定外の反応に面食らった。性別が違うだけでこうも反応が違うのか……。
「ま、まあそのなんだ。もう行くよ」
「え、あ、う、うん……」
どことなく不満そうな顔の彼女を横切る。というか陽菜乃よくみたら髪切ったのか。微妙に変わってる。
「じゃあな倉橋、その髪似合ってるぞ」
「……え!?」
振り返り笑顔と共に褒める。こうやって人の変化に気が付けるよ

うになったのは私が人として成長した証なのだろう。これからもどんどん学んでいこう。
「……えへへ」
背後で彼女の笑い声が聞こえたが、そんなにおかしかったのだろうか、まあいいか。とりあえず何も言われなかったのでこっちの私も言葉遣いは大して変わらないようだ。
そんなことを考えつつ、私は靴を履き替え教室に向かったのであった。

扉を開き中に入る。いつもの寂れた教室には見慣れた顔ぶれが私を見ていた。よかった、私以外はいつも通りのようだ。
「よ、今日は珍しく遅いな」
目の前にいる木村がまるで男子に話しかけるかのように気さくにあいさつしてきた。いや、まるでじゃなくて私は男だったな。
「私も――」
「「私？」」
しまった、一人称も違うのか。矢田や後ろの竹林まで驚いてるじゃないか。ああもう、これだから日本語は面倒なんだ。なんでこんなに一人称があるんだ。
どうしよう、こっちの私の一人称なんて知らないんだが……ここは無難に俺か？
「俺も――」
「「俺？」」
これも違うのか……
「……僕？」
自分で自分を指さししながら聞くとそうだと言わんばかりに頷いた。どうやらこちらでは僕らしい。ぼ、僕か……本格的に渚と被ってきたな。慣れないが、仕方あるまい。
「わ、僕も寝坊するときくらいあるってことだ」
「……寝ぼけてるのはマジみたいだな」

よかった、そういうふうに解釈してくれたようだ。それにしても僕か……。その言いようのない違和感に顔を白黒させていると不思議なものを見るような目で見られる。
「変な臼井君」
「道端に生えてるキノコでも食っておかしくなったんじゃね？」
「彼なら有り得ないと言いきれないのがまた……」
どうやら私の扱いはここでも大して変わらないようだ。というか凄い失礼なことといわれたような。いくら私でも道端のキノコは食べないぞ。
「失礼だな、虫は食べてもキノコは食べないぞ。一度アフリカでそれをやって死にかけた」
キノコは本当に危ない。食べられる種類とそうでない種類の法則性がないので見分けがつかない。人工的に栽培されたもの以外絶対に食べるものか。もう腹を抱えながら戦うのはごめんだ。
「……やっぱ食べたことあるじゃん」
「つうか虫もたいがいだろ……」
あっ……。私は弁解しようとして逆に自爆したことを理解した。案の定三人の顔が引き攣っている。余計なこと言うんじゃなかった。
「まあ、いつもの君で安心したよ」
「だな、この絶妙なポンコツっぷりは間違いなく臼井だ」
「あはは……」
もう、何も言わない。ただ一つ言えることは世界が変わっても私はポンコツだということだ。
「もう行く、じゃあな」
止まっていた足を動かし自分の席に赴く。猛烈に疲れた気がしてならない。そんな疲れた心を引きずりながら歩き続ける。

それから授業はいつも通り行われた。殺せんせーはいつも通りヌルヌルしているしビッチ先生は相変わらずビッチだったし烏間先生は例によって堅物だった。

男になったことによる変化は、当たり前だが男子との距離が近くなって逆に女子との距離が離れていた。まさか杉野のことを名前で呼ぶ日が来るとは思わなかった。と言っても元から性差なんて大して意識していないので、それ以外は大して変化のない生活だった。精々カルマが私を名前呼びしていたくらいだろう。

こっちのカエデとはまた会話していない。明らかにこっちをチラチラ見ていたのでそれなりに仲はいいのだろう。しかし話しかけようにもどう話せばいいのやら。話しかけようにもタイミングがつかめず時間だけが過ぎていく。

「では、これくらいにしてお昼にしましょう」

そうして迎えた昼休み。殺せんせーが授業を締めくくり昼休みが始まった。大きく息を吐き頭を机に突っ伏す。案の定授業は殆ど頭に入らなかった。

「はぁ……」

私の席に隣接する三人は流石に私の異変に気が付いたようで私のことを見ながら訝し気な表情を浮かべている。

「どうしたんでしょうか祥君」

「なんか悪い物でも食べたんでしょ？」

「いや、流石にそれはねえだろ……いや、あるか？」

男になったせいで心なしか男子のあたりが強くなっているような気がしてならない。なんというか遠慮がない。それは別に構わないのだがなんというか違和感が凄い。

「ねえ、祥」

声を掛けられ顔を上げる。そこには心配そうな顔をしたカエデが私の顔を覗き込んでいた。

「いっしょにお昼食べよう？」

机に突っ伏している私に対して腰を屈めて視線を合わせているため、必然的に顔が良く見える。今まであまり意識していなかったがこうしてみるとやはり可愛い。

こんなふうに思ったことなんてなかったんだがな、無意識のうちに心が身体に引っ張られているのだろうか。

「あ、ああ」
そんな思いをごまかすように頷き立ち上がりながら、弁当をバックパックから……あれ？机に引っかけたバックパックの中にいつもあるはずの弁当箱がなかった。
「……あっ」
「あれ、行かないの？」
「……弁当、忘れた……」
思い返してみればパニックになってて弁当のことが頭から抜け落ちていた。別に一食抜いた程度でどうにかなるわけではないが、飢え死に一歩手前を経験したことのある私にとってこれは途轍もないショックな出来事だ。
「何言ってるの？祥の手まだ治ってないから私が作るって言ったじゃん」
今更だがこっちの私は右手を怪我しているようだ。恐らく死神にやられた傷だろう。それが何故弁当に繋がるのかわからないが、顔を見れば何言ってんだと言いたげな目で見ているので恐らく周知のことなのだろう。
「そうだったな。うっかりしてた」
ごまかすように席を降りカエデについていくように教室を後にする。あれ、渚は一緒じゃないのだろうか……。いや、どうせ夢だ。深く考えるのはよそう。
私は下世話な笑みを浮かべて私達を見てくるカルマたちの視線を無視しながら外に向かうのであった。

「ご馳走さまでした」
「お粗末様」
人目のつかない校舎裏、カエデに手渡された弁当を食べ終え一息つく。料理ができるのは知っているが、いつもお菓子を食べている姿した見てこなかったのでこういった弁当を作れるのは意外だった。
「ど、どうだった？お、美味しかったかな？」

「ああ、美味しかったよ。ありがとう、カエッ……茅野」
いつものように名前で呼びかけて慌てて訂正する。こっちの私とカエデがどの程度仲がいいのか知らないが流石に名前で呼び合うほどの……
「……名前」
「え？」
そんなことを考えていると急にカエデの表情が曇った。眉をひそめじとっとした目でこちらを見てくる。というか名前って……
「いつも、名前で呼んでくれるのに……」
え、こっちの私名前呼びなの？男なのに？逆はわかるけれども、男が女の名前を気安く呼ぶのは不味いのではないだろうか……。いや、致し方あるまい。
「すまなかった。カエデ」
取り繕うように名前を呼ぶがカエデの反応は芳しくない。むしろ悪化した。
「……二人きりの時はあかりって呼ぶって約束したじゃん……嘘つき」
えぇ……何この反応。性別が違うだけでこうまで違うものなのだろうか。最近になってようやく性差を意識するようになった私にとってこの反応は非常に難解なものであった。
「ごめん、あかり」
「許さない」
「ど、どうすれば許してくれる？」
「……頭撫でてくれたら許してあげる」
そう言うと突然カエデは私の右肩に頭を乗せてきた。彼女の髪が私の首筋をくすぐる。なんだこれ……ど、どういうことなの……
と、とりあえず撫でよう……私は意を決して右手を回しカエデの頭を撫でた。さらさらとした髪の感触が掌に広がる。
「……ふふ」
いつも撫でられてばかりだったが、これはいいものだな。その心地よい感覚に浸りながら頭を撫で続ける。

「ちょ、ちょっと撫ですぎだよ！」
「あ、ああ！ごめん」
カエデの声に我に返り手を離す。掌には彼女の髪の感触がまだ残っていた。何故か胸が高鳴るのを感じた。
「あっ……」
私が手を離すと緩んだ表情を一変させ何故か名残惜しそうな表情になった。というかいつものノリでやってしまったがこれは相当不味いことじゃないのだろうか。
「こ、これでいいか？」
「う、うん！特別に許してあげる」
よくわからないがよかった。私が内心胸をなでおろしているとカエデが私に向き直った。先ほどまでの緩んだ顔を一変させどことなく真剣な眼差しで私を見つめる。
「ねえ、やっぱり今日の祥なんか変だよ」
「そ、そうか？」
心の中でカエデに感心する。やはり、例え夢だったとしてもカエデには叶わないな。
「今朝からずっと様子変だし……本当に大丈夫？」
「大丈夫だって、わ、僕を信じてくれ」
校舎の壁に背をつけ風に揺れる木々の枝を眺める。もうすぐ冬か……
「……信じられないよ」
唐突に言われた言葉に思わず振り返る。スカートの裾を握りしめ顔を俯かせて表情がわからない。だが微かに振るえる拳がカエデの心境を如実に表していた。
「祥はいつもそうだよね……。いつも無茶してばっかり、本当は辛いのに大丈夫だ、平気だって嘘ついて……誰にも頼らないで一人で行っちゃう……このままだと本当にいつか死んじゃうよ……」
「……あかり」
十中八九死神のことだろう。私はいつもそうだ。カルマに言われた通りだな。一人で納得して一人で突っ走る。ちっぽけな自己満足

のためにいったいどれだけの人間を傷つければ気が済むのだろうか。
「祥がいなくなったら私……私」
「あかり」
　カエデの手を握り話を遮る。私を見上げた彼女の目じりに浮かんでいた涙を指で払いながら話しかける。
「確かに、わ……僕はいつも嘘をついて君に心配ばかりかけてしまっている。言い訳になってしまうけど、きっとまだ少年兵だったころの洗脳が抜けてないんだと思う」
　カエデの手を取り立ち上がらせ、目を真っすぐ見つめる。心なしか顔が赤くなっている気がするがそんなことはどうでもいい。この思いを伝えなければ。
「あかり、だけどこれだけは覚えていてくれ。僕は絶対に君の前からいなくなったりはしない。もう二度と君を独りぼっちにはさせない」
「えっ!?そ、それって！」
　突然の行動にしどろもどろになるカエデを見つめながら言葉を続ける。夢だろうが現実だろうが、男だろうが女だろうが関係ない。この思いそんなことでは変わらない。
「君が私を生き返らせてくれた。墜ちるだけだった私を引きずり戻してくれた。戦うことしかできなかった私を殺してくれた。今度は私が君を守る番だ。例えどんな困難が立ちふさがろうと、例え世界が敵に回ろうとも、君が私の味方になってくれたように、私も君の味方であり続ける。このリボンに誓って君を独りにしないと誓う」
　言いたいことを言い切り手を離す。カエデは私が手を握られた姿勢のまま固まっていた。顔も真っ赤だしどうしてしまったのだろうか。
「あ、そ、その……う、うぅ……」
「……大丈夫か？」
　顔を近づけカエデの額に手を当て熱を見る。よかった、病気の類いの熱さではないな。そうやって安心していると突然カエデと目が合った。その目は例えるのなら渦が巻いているというべきだろうか。
「う……」

「う？」
「うあああああああああああ!!!!」
唐突に叫んだと思ったらそのまま背を向けて走りさってしまった。後に残されたのは額に手を当てたままの姿勢の私。風が虚しく私を撫でた。
「……戻るか」
そう思って後ろに向き直ると、速水と目があった。
「あっ……」
いや、正確にはあってしまったというべきか。明らかに気まずそうな表情を浮かべている。
「ご、ごめん、盗み聞きするつもりじゃなかったんだけど……」
「どこから聞いてた？」
「えっと、例えのところから……」
よかった、あかりの名前は聞いてないようだ。あだ名でごまかすのも無理がある。聞かれなくてよかった。私が安堵していると速水は心なしか悲しそうな目で私を見てきた。
「邪魔、しちゃったよね……」
無表情なのは相変わらずだが眉が下がっている。言葉にも心なしか覇気がない。いつもならもう少し表情を見せているはずなのだが、やはり男だと反応が違うのだろう。というか邪魔ってなんのことだ。
「は？なんのことだ」
「え、今の告白じゃないの？」
「告白？誰に」
「……茅野に」
苦虫を噛み潰したような声で絞り出す。ここでいう告白とは恐らく意中の相手に自分の好意を伝えるという意味だろう。だとするのなら違うと言わざるを得ない。
「勘違いしているようだから言うが、僕はカエデに告白したわけじゃないぞ」
「……は？」
速水の目が点になった。本当に告白していたと思ったらしい。私

はそこまで無分別じゃないんだがな。
「単に今まで心配ばかりかけてしまったから、もうそんなことはしないって改めて伝えただけだが……って、どうした速水」
私の言葉を聞いた速水は心底呆れたと言いたげに頭を押え深い溜息を吐いた。気のせいかその溜息に怒気が混ざっているような気がしてならない。
「はぁ……あんたはそういう奴だったね……」
「その……何か、気に障ったか？」
私がそう言うと何故か速水は眉を吊り上げてこちらを睨んできた。さっきから反応が違い過ぎて困る……
「ッ！勘違いしないでよね、あんたのことなんて何とも思ってないんだから」
「別に僕のことなんて聞いてないんだが……」
「――ッ!!!!」
何故か顔を赤くした。よくわからないが私のせいで気を悪くしたのなら謝るべきだろう。というか夢なら早く覚めてくれ……。
「すまない、何か気に障ることをしてしまったようだ。僕にできることならなんでもする。それで手打ちにしてくれないか？」
私の言葉に速水の動きがピタリと止まった。どうやらこれでよかったようだ。
「……なんでも？」
その言葉に無言で頷く。よく考えれば大げさすぎたかもしれない。とは言え速水が法外な要求をするとは到底思えないので大丈夫だろう。
「……じゃあ今度銃の訓練に付き合って」
「僕なんかでよければ」
こっちの世界の私も彼女に銃の使い方を教えているのだろう。このくらいならお安い御用だ。
「そのなんかっていうの止めて。私はあんたに頼んでるの」
「ッ！そうだったな……」
いつもの癖で自分を下にみてしまった。こういう時速水は真っす

ぐに言ってくれる。いつも無表情で考えていることが読みづらいが、その実誰よりも仲間のことを考えてくれている。そういう彼女だからこそ私は心を許すことができたのだろう。
「ありがとう、速水のそう言うところ本当に好きだ」
「……はぁっ!?」
突然速水が奇声をあげたせいで驚く。いきなりどうしたんだ？
「ど、どうしたんだ？」
「べ、別になんでもないから！もう戻る」
速水はそう言って背中を向けると足早に去っていった。そう言えば今何時だ？腕時計を見る。もう昼休み終わるな。
「はぁ……疲れた……」
本当の意味で一人になった途端、猛烈な疲れが襲ってきた。なんか、色々ありすぎだ。早く目、覚めてくれないかな……
「戻るか……」
私は気だるさを引きずるようにゆっくりと歩き出した。

「結局夢から覚めなかった……」
玄関のすぐ外でオレンジ色に染まる空を眺めながら一人ごちる。しばらくすれば唐突に目が覚めるだろうと思ってたが、そんな私の目論見とは裏腹に一向に夢から覚めないまま一日が終わってしまった。
「おーい、祥！野球やろうぜ」
「……いや、今日はいいや」
バットにグローブを吊り下げた友人（こっちでは名前呼びらしい）が校舎の中から私に手を振ってきたが、疲れ切った私にそんな気力があるはずもなく、断ることにした。
「なんだよ付き合い悪いなー。ま、いいや、おーい祥はこないってよ！」
彼の話によれば私は一学期の球技大会で満塁ホームランを打ったらしい。何エンジョイしてるの私。その時トラウマで酒浸りだったんじゃないの？

「もういいや、帰ろ……」
帰って寝れば流石に元に戻るだろう。というか戻ってくれないと困る。みんなの反応が微妙に違って寂しい。
「あ、しょうちゃん、この後――」
「ねえ祥、よかったら――」
「臼井、今――」
聞き慣れた三人の声が重なる。思わず振り返れば陽菜乃とカエデと速水がお互いに見つめ合っていた。
「どうしたのーカエデちゃんに凛香ちゃん」
「そういう倉橋さんは祥に何か用でもあるの？」
どうして二人とも笑顔なのにこんなに怖いのだろうか……。二人から感じるオーラに怖気づく。逃げたい、けれど二人のオーラが私が逃げることを許さない。
「は、速水はどうかしたのか？」
目の前の現実から逃げるために唯一普通そうに見えるの速水に話しかける。
「……私は別に、暇そうだったから訓練誘おうと思っただけ……でも、もういい」
何故そんなに不機嫌そうなのだろうか。なんでこんなに反応が違うの？もうやだ、家帰りたい……
「しょーちゃん、よかったら一緒に隣駅にある猫カフェ行かない？もふもふですっごいかわいいんだよー！」
「ね、こ、カフェ……はっ!?」
何故速水が動揺するのだろうか。もしかして猫好きなのかもしれない。いや、そんなことはどうでもいい。
「祥、プリンが美味しいって評判のカフェ見つけたんだけど、今時間あるかな？」
前の二人の話などなかったかのようにカエデが訊ねてくる。微妙に笑顔が怖いのは気のせいだと思いたい。
「しょーちゃん？」
「祥？」

「臼井？」
　これは、もしかして三人の中から一人選ばなければならない流れなのだろうか。え、どうすればいいの？ほんとにどうしよ……
「何やってんのあんた達」
「び、ビッチ先生！」
　救世主が現れた。私は呆れた目で私を見るビッチ先生に視線で助けを求めた。なんだかんだ言ってこの人なら助けてくれるに……
「はっ、自業自得ね。あんた達、引き裂いてやりなさい！」
「えっ!?」
　それはそれは良い笑顔でビッチ先生が言い切った。いつぞや私は男で生まれたいと思ったことがあるが、それは間違いだったと言わざるを得ない。
「ねえ！聞いてるの!?」
「そうだよ、無視はだめだよ！」
　やばい、本当にどうしよう。最後の望みが水泡に帰した今、頼れるのは唯一冷静な速水だけだった。彼女と目が合う。
「あんたの自業自得よ……ばか」
　あ、そうですか……。私が何をしたって言うんだ！頭の中がぐちゃぐちゃになりパニックになる。過度の入力に耐えきれず混乱した頭は普段の冷静な思考を奪い、そして愚かな決断を出力した。
「うっ……」
「「う？」」
「うわぁぁぁぁぁ!!!!」
　背を向けて全力で走る。即ち逃走だ。背後で三人の声が聞こえるがもう知ったことか！間違いなく人生で一番の速さで山を駆け降りる。
「お帰りなさい、祥さん！って、どうかされましたか？」
「もうやだぁ！」
　当たり前のようにＰＣに入り込んでいる律の声を無視し制服も脱がずベッドに一直線に潜り込む。
「祥って誰だよぉ！私は祥子だよぉ！」

掛け布団に顔まで包まり団子のように身体を縮める。もう、何もかもわけがわからない。夢なら早く覚めてくれ！
「いやぁあああ!!」
布団に私の絶叫が吸い込まれていった。

被った掛け布団の隙間から差し込む日光が瞼越しに私の眼球を攻撃する。
「……あれ、私寝てたのか？」
しばらくもぞもぞしたのち何故か団子のように被っていた掛け布団から身体を出す。そう言えば確か……
「……ある」
ぞっとしながら身体を触りあるべきものがあることに安堵する。そうだ私は女だよな。よかった、夢だった……。
「やったー!!元に戻ったー!!」
両手を高々と上にあげ脇目もふらず喜びの声をあげる。今までいろんな悪夢を見てきたがあんなリアルで怖い悪夢は生まれて初めてだった。
「よかったぁ……あ、学校いかなきゃ」
また遅刻しそうになるのは流石に不味い。私は急いで準備を始めるのであった。

「おはよう!!」
「う、うん、お、おはよう……どうしたの凄いテンション高いけど……」
「さっちゃん、何かあったの？」
扉を開きいつものようにあいさつをするが喜びを隠しきれず矢田に怪しまれる。だが、この喜びが皆にわかるだろうか！
「木村！私は女だよな！」
「そりゃそうだろ……」
「だよね！だよね！私は女だよね!!」

スキップしながら自分の席に向かい悪夢からの解放を喜ぶ。こんなに嬉しいことは誕生日会以来だ！ああ、本当によかった！

「遂におかしくなったか……」

「臼井さん、疲れてるのかな……」

「さっちゃん……」

「そっとしておいてあげよう……」

後ろで皆が好き放題言うがそんなことが気にならないくらい嬉しい。もういっそのこと皆に酒を奢りたい気分だ。いや、怒られるからやらないけど。

「おかしくなったって言えば、昨日の臼井すっげぇ変だったよな」

「大方、道で変なキノコでも食べたんじゃないか？」

「さ、流石にそれは……でも変だったよね、杉野君のこと急に友人君って呼んだり、男子とも妙に距離近かったし、あとポニーテールじゃなかった！」

「さっちゃん、大丈夫かな……」

……え？

放課後　もしもの時間（2）

「もし僕に暗殺の才能があるって言ったらどうする？」
　ベンチに座る渚が重い口を開いた。彼の言葉を心の中で繰り返す。暗殺の才能、標的の不意を打ちその生命活動を停止させるための才能、つまり人殺しの才能だ。
　彼の才能については鷹岡と対決した時から薄々は気が付いていた。気配のぼかし方、立ち回り、一切の躊躇をしない精神力、全てが暗殺、ひいては人殺しにおいて大きなアドバンテージを持つ。
「予想はしていた……」
「やっぱり見抜いてたんだ……」
「暗殺も戦闘も、本質的には同じ殺しだからな」
　私の目指していた戦闘スタイルは一方的な殺し。相手に反撃の余地を与えることなく、最小限の攻撃で最大限の損害を与える。現代の戦闘の常識だが、見方を変えれば暗殺にもつながる。
「死神に攻撃を喰らってから視界が一気に変わったんだ。意識の致命的な隙間って言えばいいのかな……そういうのが見えるようになった。多分、僕は死神と同じことができると思う」
　彼は私と違って空気を読むのが上手い。私なら余計なことを言って怒らせてしまうような場面でも彼は相手の顔色を読んでそれを回避することができる。
　恐らく母親を怒らせまいと必死に身に着けたスキルなのだろう。相手の感情を読み怒りを回避する。それは同時に隙を見つけ相手を貶めることもできるのだ。
「だから、殺し屋になるのか？」
「まだ決めたわけじゃないけど、僕の才能なんてこれくらいしかないから……」
　確証は持てないが、彼が然るべき訓練を積めばきっと最高の暗殺者になるだろう。一切の殺意を悟らせずまるで自然現象のように相手を死に至らしめる。まるで死神のような理不尽で恐ろしい、そんな殺し屋に。

「それが、どういう意味かわかっていて言ってるんだろうな……」
自然と言葉が強くなってしまう。怒りにも似た感情が沸き起こってくるが、それを必死に押さえつける。お門違いの怒りをぶつけるわけにはいかない、彼は真剣に自分と向き合って結論を出しただけなのだ。
「いや、止そう……」
「止めないの？」
「自分の生き方に口出ししていいのは自分だけだ。勿論止めてほしいに決まっている。でも、君が本気で殺し屋になる気なら私に口出しする権利はない」
他人がどう思ったところで自分の人生は自分が決めていかなければならない。私は決めることを放棄し流れされた。だが渚は違う。きっと全て考えたうえで出した結論だろう。なら私がどうこういうべきではない。
「ただ……人を殺すって君が思っているよりもずっと重いぞ」
ゆっくりと息を吐き組んでいた足を戻し腿に肘を付け手に顎を乗せる。夕陽に照らされた電柱の影法師を目で追いながら過去に思いをはせる。銃声と悲鳴、血と硝煙の臭いが脳裏に立ち込めた。
「一つ、昔話をしよう」
渚がいきなりなんなのかと言いたげにこちらを見てくるが、私はそんな彼を無視し話を続けることにした。
「あれは八、いやもう九年前になるのか。私が何故少年兵になったのかは知ってるよな」
「うん……飛行機が墜落して反政府組織の基地に辿り付いたんだよね……」
彼の表情が暗くなっていく。私が今から何を話すつもりなのか、気が付いてしまったのかもしれない。そんな彼の言葉を繋ぐように話を繋ぐ。
「そうだ、そうやって保護されてしばらくたったある日、基地の指揮官に呼びだされた私はいきなり銃を握らされた。あれはＦＮのハイパワーだったかな、９ｍｍの使いやすい拳銃だが５歳の私には大きすぎ

た」
頭にあの時の光景がまるでビデオカメラで撮影したようにくっきりと映し出される。頭が痛くなり思わず抑える。
「ッ！大丈夫!?」
心配する彼を手で制し話を続ける。もし彼が殺し屋になるというのなら、絶対に話さければならないことだからだ。
「大丈夫だ……。しばらくするとボロボロの男が連れて来られてきた。多分捕虜かスパイだったんだろう。私が戸惑っていると指揮官はこう言った。そいつを撃てと」
渚が息を呑んだ。この話の続きなどもう分かりきっていることだろう。頭痛が酷くなる。
「私が拒否するとそいつは部下に命令して私の頭にＡＫを突きつけてきた。幼いながらも逆らえばどうなるかわかったよ……」
脈拍が増大し呼吸が微かに荒くなる。当たり前だ、これは私の全てのトラウマの元凶のようなもの。夢で見るだけで身体に異常を来すトラウマの塊を素手で掴むような所業をすればどうなるかなど自明である。
「だから私は撃った。引金は軽かったよ……もう九年も経つのに、今でも昨日のように思い出せる。男の目の色も、髭の生え方も、銃創から滲み出る血の広がり方も、死ぬ間際の呪詛の声も、一切合切何もかも、全て思い出せる」
「さっちゃんさん……」
額から滲み出る汗が目に染みて思わず目を瞑る。頭の中をあの時の悲鳴と呪詛、悪鬼のような兵士たちの下卑た笑い声が反響する。おかしくなりそうな頭を理性で押えつけ次の言葉を紡ぐ。
「今でもたまに夢に出てくるよ。多分、死ぬまで忘れることができないんだろうな」
荒くなった呼吸を整える。はち切れそうだった心臓が徐々に落ち着きを取り戻していく。だが例え身体が正常になったとしても心は治らない。きっと今日は悪夢を見るだろう。
「この話は誰にもしたことがない。するつもりもなかった。でも、君

だけには話しておくよ……」
「どうして……」
「殺し屋になるのなら、君も同じことを経験するからだ」
　場所や、状況は違えど初めて人を殺した瞬間は忘れることができない。渚のように真っ当な倫理観や良心を持っている人間ならなおさらだ。
「でも大丈夫さ、最初の四、五人はショックを受けるが十人二十人殺していくうちに何も思わなくなる」
　そこで一呼吸置き言葉を探す。この先どう言えばいいのだろうか……いや、とっておきの言葉があるじゃないか。
「だが、その時鏡に映っているのは君じゃない。君の皮を被った化物だ」
「……ッ!?」
　唖然とする渚に〝私のようにな〟と付け加える。別に大げさに言ったつもりはない、どんな理由や境遇があろうとためらいもなく人を殺せる人間は例外なく化物だ。人間が簡単に人など殺せるか、殺せる奴は皆化物に決まっている。
「九十七」
「え?」
「私が殺してきた人間の数だ」
　空気が凍り付いた。渚の視線に一瞬だけ恐怖が混じる。覚悟していたことだがやはりきついな……。だが、言わなければならない。
「今君は分かれ道に立っている。化物になるか、人として真っ当に生きるか。私に止める権利はない。だが、わがままを言うのなら、お願いだから私のようにはならないでくれ……」
　込み上げそうなる涙を必死に堪える。私は誰かの人生を奪う恐怖から逃れるために化物になった。今更後悔しても遅いのはわかっているが、もしあの時撃たなかったらと思ってしまう。
「化物になるのは一人でいい……あんな思いをするのは私だけで十分だ……」
　目尻が熱くなり思わず目を押える。隠しきれない涙が手から零れ、

風に晒され冷たく乾く。
「ごめん……」
「君は何も悪くない。私が勝手に感傷的になってるだけだ……」
ちょっと説教して終わりにすればよかったのに、勝手に自爆して勝手に泣いているだけのことであり、彼が謝る必要は微塵もない。とはいえそれを言ったところで渚が聞くとは思えない。
「……すまないが、独りにしてくれないか……」
「……そうだね、僕行くよ」
目を手で覆っているせいで彼がどんな顔をしているのかわからない。けれど声を聞く限り怒っているわけでも嫌悪しているわけでもなく、元気がない以外は至っていつも通りだった。
「僕、もう少し考えてみようと思う」
「……ああ」
感傷に浸る私に渚が優しく語り掛ける。これで伝わっただなんて思っていないが、その優しい言葉に少しだけ救われた。
「あと、僕はさっちゃんさんのこと化物だなんて思ってないから。それだけ、じゃあね」
足音が遠ざかっていく。一人残った私を秋の冷たい風が冷やす。掌を貫く夕陽も随分と弱くなってきた。もうじき夜になることだろう。だけどここから動く気になれなかった。
「もう、そんなとこで座ってると風邪引いちゃうよ」
「え……？」
思いがけない声に思わず顔を上げる。逆光に中に笑顔のカエデが私を優しく見下ろしていた。
「帰ったんじゃなかったのか……」
「二人のことが気になってちょっとつけてたんだ。ほんとは黙って帰るつもりだったけど、祥子が泣いてるから慌てて駆けつけてきたのです」
「別に……泣いてなんか……」
取り繕おうとしたがシャツの袖が涙で濡れていることに気が付き言い訳できないと悟った。いや、そもそも泣いてなかったとしてもカ

エデにはばれてしまっただろう。
「横座るよ」
私の了承を得る前にカエデが強引に私の真横に座る。カエデの小さな肩が私の肩に当たる。それだけで心が少しずつ温かくなっていく。
「渚に何話したの？」
「……それは、言いたくない」
例えカエデだったとしても、あのことは絶対に話したくない。渚に話したのは本当に例外中の例外だ。
あれは私の人殺しとしての根源。渚に話したのは彼が人殺しとしての道を選ぼうとしたからであって、日向に住むカエデに言うべきことではない。
「そっか、じゃあしょうがないね」
「聞かないのか？」
「本当は聞きたいけど、祥子が言ってくれるまで待つよ」
まるで私がいつか絶対に話してくれるとでも言いたげな言葉。たった一言なのに、それだけでカエデの私に対する絶対的な信頼を感じることができた。心が揺れる。思わず言ってしまいたくなる。
「でも忘れないで、お姉ちゃんはいつだって祥子の味方だから！」
「……ああ」
笑顔と共に放たれたその言葉に私の中にあった壁はいとも容易く壊れてしまった。殆ど家族同然に信頼している者からの温かい言葉。過去を思い出し疲れ切っていた私には、その言葉に抗う術はなかった。
「九年前のことだ……」
気が付けば私は渚のことを除いた全てを話してしまった。辛いトラウマも隣にカエデがいると思えば不思議と怖くはなかった。
「あの時撃たなければ、死んでいたのはわかっている。でも、あの選択は本当に正しかったのだろうか……そう思ってしまう……」
仮定の話をしたところでどうしようもないのはわかっている。だがわかっていても考えてしまうのが人間、ひいては私という生き物な

のだろう。
「君は、どう思う……」
聞いても困らせるだけだとしても、聞かずにはいられなかった。カエデが私の言葉を吟味するように考え込む。そして笑顔と共にこう言った。
「私、祥子に会えて嬉しかったよ」
カエデが立ち上がると私をおもむろに抱きしめた。温かい鼓動が私の頭を包み込む。
「名前を聞いてくれて嬉しかった。お姉ちゃんって言ってくれて嬉しかった。私を独りぼっちから救ってくれて嬉しかった。全部全部祥子が死んじゃってたらなかったことなんだよ?」
そう言って再び私を強く抱きしめる。胸の鼓動が聞こえるたびに嗚咽が抑えられなくなっていく。
「何回でも言うよ。生きててくれてありがとう」
死ぬことを望まれ続けた私にとってこの言葉は猛毒だ。何度言われようとも慣れることはないだろう。耐えきれなかった。嗚咽が大きくなりやがて泣き声となった。
「あ、あぁ……お姉ちゃん……う、うぅ……」
私が泣き止んだのはそれから数分たってからのことであった。

「もしかして球技大会の時休んだのって夢のせいだったの?」
横を歩くカエデが私に訊ねてきた。あの時も今日と同じ様にあの日の夢を見たせいで酷いことになっていた。カエデには洗いざらいばれてしまっているので隠す必要はないだろう。
「ああ、あの時もあの日のことを夢に見た……。休むしかなかったよ」
「そっか……決めた!今から祥子の家に泊まりに行くね」
「ッ!?何故そうなる」
私の抗議にカエデは知ったことかと言わんばかりはにかむ。この顔はもう何を言っても聞かない時の顔だ。
「じゃあ、今から家に荷物取りに行くから家で待ってて!」

「……わかった」
私が返事を言い切る前にカエデは手を振りながら走り去っていってしまった。私も人のことは言えないがカエデも負けず劣らず頑固者だ。でも、だからこそ私は救われたのだろう。
「えへへ……」
温かくなった心を弾ませながら家路を急ぐ。渚のことも気になるが、必ず殺せんせーがなんとかしてくれるだろう。
私にできることは精々過ちを犯してしまった身として助言を与えるだけだ。だが人の人生は人のものだ。誰かが干渉していいものではない。
「私も将来考えないとなあ……」
有り余る可能性に思いを馳せる。だが、まずはどこの高校に行くが考えるのが先だろう。別に行かなくてもなんとでもなるがその場合カエデに何を言われるかわからない。
「さて、私も帰ろう」
早く帰ってカエデにお帰りと言うのだ。

放課後　殺し屋の時間

このE組で私が紡いできた縁というのは、何もE組だけにとどまらない。私達の知らないところで、多くの殺し屋が殺せんせーを殺そうとし、そして失敗している。

今日は殺せんせーがそんな彼らを呼び出したらしく旧校舎前の喫食スペースには一般人に混じって、というか殺し屋の中に一般人が混じっているくらいの勢いで、何人もの殺し屋が黙々と恨めしい目つきでつけ麺を啜っていた。

だから、そんな負け組の殺し屋達の中に私の見知った顔が混じっていても、それはなんらおかしなことではなかった。

「よ、久しぶりだな嬢ちゃん」

そう言って、サングラスとニット帽を被った男は私に気さくに挨拶してくる人間は、一学期の修学旅行の時に共に仕事をしたレッドアイだった。烏間先生から死神にやられたと聞いたが、どうやら生きてたようだ。

「え、誰祥子ちゃんの知り合い？」

「すまない、ユウジ。少し席を外す」

流石に一般人の彼と殺し屋を合わせるわけにはいかない。私は半ば強引に話を切り上げるとレッドアイの許へ駆け寄り校舎の裏まで連れていった。

『久しぶりですね、レッドアイ。ですが一般人もいるのでできるなら話しかけないで欲しかったのですが』

『わりぃわりぃ、嬢ちゃん見かけたからつい声掛けちまった』

英語で割と強めの語彙を使い注意するが、倍近く歳の離れている小娘の言葉など取るに足らないのか、軽く流される。

『にしても、随分となりが変わったな。まるで別人じゃねえか。前に会った時よりもよっぽどいい顔してるぜ。どうだ学校楽しんでるか？』

『お陰様、というほどでもありませんが、まあ楽しくやっています。兵士ももう辞めました』

私がそう言うとレッドアイは何処か嬉しそうに笑った。確かこの人には似合わないことはするなと言われていた。
『辞めて正解だ。ガキに銃なんて似合わねえよ』
『そうですね……』
あの時は気が付かなかったが、彼なりに私のことを案じてくれていたのかもしれない。いや、しれないではなく、してくれていたのだ。でなければあの時殺せんせーに文句など言わなかっただろう。
『ま、人生長いんだ。嫌なことだけが全てじゃねえよ。良いことだってきっとあるさ。保証はできねえけどな』
『えぇ、その通りだと思います……』
いつかカエデが言ってくれた。私は一生分の不幸を使い切ったのだと。勿論そんなことは現実にはあり得ない。けれど人生において不幸なことが起きるのは必然だが、それと同じくらい良いことだって起きるのだ。
『元気でやれよ嬢ちゃん、風邪引くなよ』
私の頭をガシガシと撫でる。せっかくのセットが崩れるから止めてほしかったが、私は子供で彼は大人、抗議の視線を飛ばしたところで何処吹く風だった。
『じゃあな、いつか大人になったら一緒にハンティングでも行こうぜ』
それだけ言うと彼は木に立てかけてあった空気銃を肩に掛け、手を振りながら山の中に消えていった。もしかして、狩りにでも行くのだろうか。え、ここで？
「ま、いいか……さて、戻ると――」
「おいおいおい、見覚えのある奴かと思ったら、あん時のクソガキじゃねえか」
背後から接近する気配、慌てて振り返ればいつか見た男が私を見ていた。普久間島で戦った拳銃使いだ。殺気はない。だが、お互いに殺し合った関係だ。警戒するに越したことはない。
「ったく、そんな身構えんなよ。今日はオフだから安心しろ。つうか仕事でもねえのに殺すかよメンドクセェ」
私の隠そうともしない殺気に男はやれやれと手を振りながら弁明

した。その言葉に少しだけ警戒を解く。確かに仮にここでこいつが私に危害を加えようとすれば、その瞬間、マッハ２０の教師が文字通りすっ飛んでくるだろう。彼だってそのくらいわかっているはずだ。だとしても、ジャケットの左腋が不自然に膨らんでいる奴を、どうして信用できるというのか。
「もう知ってるかもしれねえが、スモッグとグリップも来てるぜ。顔くらい見せてやったらどうだ。会いたがってたぜ。特にスモッグはてめぇのせいで下顎骨折したからな」
「知るか」
　正しくどうでもいいことであった。スモッグ、あの時の毒使いのことだろう。彼のお陰で皆はウィルスに侵されずにすんだが、それとこれとは別の問題である。
「こういう俺もてめぇのせいで大事な永久歯が折れちまったんだが、どうしてくれんだよ。毎日デンタルフロスでケアしてたのによぉ」
「何度も言うが知ったことではない。というかお前もか」
　ビーンバッグを顎に喰らったのだ。それくらいなって当然か。
「けっ、つれねえな」
「お前がフレンドリーすぎるだけだ。よく殺し合ったのに気軽に話せるな」
「俺はプロだ。ビジネスに私情は持ち込まねぇ、逆もまた然りだ」
　確かに言う通りだが、割り切りが良すぎる。まあ私も昨日まで味方だった連中と敵になったこともあるので、同じようなものなのだろうと勝手に当たりを付ける。
「おい、うちの生徒になんの用だ」
「あ、烏間先生」
　私が絡まれているのに気が付いたのか、烏間先生が応援に駆けつけてくれた。いつもの仏頂面なのは変わらないが、いつでも攻撃に転じられるように足を肩幅に開いていた。
「おっかねえのが来たから俺はつけ麺あと二杯食ったら帰るわ。あれ銃にあうんだよなぁ。あぁ、そうだ。俺らがプレゼントしてやった銃は使ってるか？」

忘れていた。私が使っているＶＰ９は彼等から贈られたものだった。有効に活用しているかと聞かれれば微妙なところだが。
「それなりには」
「ま、なんでもいいけどよ。殺せねぇてめえにはあれがお似合いだろ。あばよ、二度と会わねえことを祈ってるぜ」
それだけ言うと男は再び喫食スペースへ戻っていった。烏間先生は問題が去って行ったのを見ると溜息を吐いた。
「大丈夫か臼井さん」
「ええ、何もされませんでした。腐ってもプロということでしょう」
「それならばいいんだが……あのタコ、面倒なことをしてくれる……」
私的には売り上げが上がるので大いに結構だが、烏間先生にとっては大迷惑だろう。子供には配慮するが、大人には配慮しないのは殺せんせーらしかった。
「烏間ー！話してる途中でいきなり居なくならないでよ！」
ビッチ先生が少し怒りながら私達、正確には烏間先生に近づいてきた。そしてそのまま強引に腕を組みどこかに連れて行こうとする。
「あの子達がモンブラン取っておいてくれたから、向こうで一緒に食べましょ？」
「おい腕を組むな！仕事中だぞ」
口ではそう言うが、明らかに満更でもなさそうな様子だ。死神との一件以降、どうなったのかはわからないが、これを見る限りそう悪いことにはなっていないようだ。これはもしかしたら近いうちにカップルができるかもしれないな。
「悪いわね祥子、烏間借りてくわよ」
「……どうぞお好きなように」
ビッチ先生はそれだけ言うと幸せそうな顔を隠さずに私の前から去って行った。さて、やっと一人になれたと思いたいが、実はまだ一人残っている。
「ストーキングは趣味が悪いですよ。ロヴロさん」
私は先ほどからずっと感じている気配の主を呼んだ。するとどこからともなく、大きな影が現れた。ビッチ先生の師匠、ロヴロその人

だった。
「やはり君は気づいていたか」
「烏間先生も気付いていたでしょう。目が動いてましたから」
「と、なると気付いていなかったのはイリーナだけか……後で説教が必要だな」
　色仕掛け専門の人間に獣染みた察知能力を求めるのは酷だと思うのだが、それを言ったところでロヴロが手心を加えることはないだろう。私は心の中でビッチ先生に合掌した。
「イリーナから聞いたぞ。死神を倒したそうじゃないか。あの伝説の殺し屋を、烏間でも暗殺対象でもなく、まさか君が倒すとはな。今一度君への評価を改めなくてはいけないようだ」
「止めを刺したのは私じゃなくてイリーナ先生と烏間先生ですよ」
「それは聞いている。奴相手に最後の最後まで騙し続けたイリーナも称賛するべきだろう。まさかあれがあそこまで成長するとはな」
　弟子のことを語るロヴロの顔は隠しようのない喜びに満ちていた。12歳の頃から面倒を見続けてきたのだ。彼にとっては娘のような存在なのかもしれない。
「だが勝利の切欠を作ったのは間違いなく君自身だ。誇りたまえ」
「戦いに誇りも糞もありませんよ。でも、言葉だけ受け取っておきます」
　やはり殺し屋は私とは違う人種だ。兵士は何を成し遂げたのかを誇り、殺し屋は誰を殺したのかを誇る。この先一生わかることもないだろう。
「そうか……君がそう思うのならこれ以上は止めておこう。では話を変えよう」
　ロヴロはまだ何か言いたそうな顔をしていたが、これ以上言ったところで私が心変わりなどしないと悟ったのだろう。話題を変えてくれた。
「一つ聞きたいのだが、この俺ですら手も足も出なかった死神を、言い方は悪いが一介の傭兵でしかなかったはずの君がなぜ倒せたんだ？」
　ロヴロの疑問はもっともだった。この私自身すら何故勝てたのか

完全に説明することはできない。畑違いのせいでそこまで凄さがわからないが、きっと９ｍｍ口径の拳銃で５０ｂｇｍ弾を撃つくらい有り得ないことなのだろう。つまりはどうやっても不可能なのだ。
「確かに、奴のほうが何もかも上手でした。慢心、油断、運、どれか一つでも欠けていれば私は今頃死んでいたでしょう。でもそんなことは些細なことなんですよ」
　そこで一旦言葉を置き、次に口にするべき言葉を探す。喉元まで出かかっているのだ、だが上手い表現が見つからない。しばらく考え、再び息を吸う。恐らくこれ以上の表現はないだろう。
「奴は殺し屋で、私は戦争屋。殺し屋が戦争屋に戦争で勝つ。そんな道理がこの世のどこにあるというのですか？」
　元とはいえ私は生粋の戦争屋だ。寝ても覚めても戦争のことしか考えてこなかった。そんな狂った相手に、たかが一人の目標を殺せば終わりの殺し屋風情が、戦争で勝てると思ったら大間違いだ。狂気の純度がまるで違う。
「はははは！確かに君の言う通りだ。にわか仕込みでその道のプロに勝てるわけがない！確かにその通りだ！まったく失念していた」
　私の言葉がロヴロの琴線に触れたらしい。額に手を当てて今まで見たことのないような顔で彼は笑いだした。正直不気味で仕方がないから止めてほしい。
「とまあ、大口を叩きましたが正直私は奴が本当に死神だったのか疑問ですけどね」
　ずっと思っていたことだ。というか私は偽物だと思っている。これぱかりは勘にすぎないが、こういう時の私の勘は大抵当たる。
「……ふむ、どうしてそう考えた？この目で見たが奴の技術は確かに超人的だった。この俺ですらそれが銃弾によるものなのか、刃物によるものなのか、わからなかった」
　私は正面戦闘しか経験していないので知らないが、どうやら死神は敵を一瞬で屠る技を持っていたらしい。だがそれがなんだと言うのだ。
「確かに奴は超人的だった。ですが、奴のやり口はあまりにも下品

だった。勿論殺しに品なんてありませんしあってはいけませんが」
どこまで行っても殺しは殺しで、それ以上でも以下でもない。だからこそまるで自分のことを偉人のように語る死神が私には許せなかった。
「だが人質に脅迫、規模は大きくてもやっていることはそこらのチンピラと何も変わらない。奴が伝説で謳われた通りの殺し屋なら、本当にそんな手口を使いますかね？」
簡単に言えば陳腐すぎるのだ。私が噂で聞いた死神は、もっとスマートで芸術的とすらいってもいい技術を持っていた。だから私には奴がどうしても噂に聞く死神とは思えなかった。
「死神の名を騙る偽者、か。有り得ない話ではないな。確かに俺が同じ手口を使うのならもっとスマートにやるだろう。もっとも趣味ではないがな」
ロヴロがどういった殺し屋だったのかは知らないが、少なくとも人質を使うような見境のない殺し屋ではないだろう。
「あるいは噂が独り歩きしていたのかもしれない。この界隈ではよくあることだ」
「どちらにせよ、真相は闇の中ですけどね」
そう、今こうして二人で頭を捻ったところで真相は闇の中。考察したところでそれは机上の空論だ。故に私達が知るべきことは当面の危機は去った。ただそれだけである。
「そうだ、話は変わりますけど、私兵士辞めることにしました」
「それはイリーナから聞いている。おめでとうとだけ言っておこう」
そう言った彼の表情は何一つ変わらないが、どことなく嬉しそうだった。この一年で出会った殺し屋達は、皆揃って子供が兵士になることは認めてはいたが、決して肯定はしなかった。
「これを持っていけ」
彼は手帳を取り出し何かを書きこむとページを千切って私に手渡してきた。紙片には電話番号らしき数字列が書きこまれていた。
「卒業したら銃は捨てるのだろう？ならばそこに連絡したまえ。適正価格で引き取るように俺が口添えしておく。安心しろ、信頼できる業

者だ」
「えっと……ありがとうございます」
どうして私にそこまでしてくれるのかわからない。もしかしたら見かけによらずお人好しなのかもしれない。
私がメモをポケットにしまうと、彼はビッチ先生が去って行った方向をどこか遠い目で見ていた。
「……弟子候補と弟子が揃ってこうも変わるとはな。ここは本当に奇妙な場所だ」
「弟子……イリーナ先生のことですか？」
私の問にロヴロが頷く。候補とはさしずめ私のことだろう。確かにビッチ先生も私も殆ど別人と言っていいほど考え方が変わった。それもたった一年足らずでだ。
「先ほどイリーナと話してきたが、あれはもう殺し屋の目をしていない。ただのどこにでもいる恋を夢見る小娘だった。恐らく二度と殺し屋に戻ることはないだろう」
愛弟子かどうかはわからないが、自分の弟子ことなどお見通しのようだ。彼の言う通りビッチ先生はもう殺し屋なんかではない。
「あれには直に破門を言い渡す。後は精々恋でもなんでも好きにすればいい。殺せない殺し屋など、弾の出ない銃と同じくらい不要な存在だ」
「ロヴロさん……」
悪態をつく彼の横顔は、どこか嬉しそうで、そしてどこか寂しそうだった。ただの勘違いかもしれないけれど、私にはそう見えた。
「もう、殺し屋という時代ではないのかもしれないな……」
その言葉にはどこか、後悔や自嘲のような響きが含まれていたと感じたのは、私の思い込みだろうか。
「だったら」
「む？」
「だったら貴方も転職したらどうですか？」
思わず声に出してしまう。慌てて口を塞ぐがもう遅い。彼の耳にはしっかりと届いていた。暗い目が私を睨みつける。

「……すいません出過ぎたことを言いました」
「……いや、こちらこそ失礼した」
二人の間に（正確には私だけだろうが）気まずい空気が流れる。そろそろユウジの許に戻ろう。ずっと待たせるのも彼に悪い。
「まさか、孫ほどの歳の娘に人生を説かれるとはな」
「本当にすいません」
「だが、そうだな、老後の選択肢として一考しておこう」
流石は大人と言うべきか、私の失言も軽く流してくれた。私が同じ立場だったらこうも簡単に許せるものだろうか。文字通り経験が違う。
「私はこれで。貴方もどうかお元気で」
背を向けて歩き出す。多分これが彼との最後の話になるだろう。彼は殺し屋で、私はただの中学生。この奇跡の教室が終わればもう二度と道が交わることはないだろう。
だが、もしかしたら、またいつか出会うことがあるかもしれない。その時はお互いに安心して手を握り合える。そんな関係になれていたらと私は思うのであった。

放課後　鉄砲の時間

～ＡＲの時間～

「コンタクト！・１２時方向！」

私の号令と共に速水がプローンポジションを取り、３０ｍ先の５つのターゲットに向けて制圧射撃を開始する。

「ムービング！」

制圧効果が続く間にベニア板で作られたバリケードに移動。ＡＲ－１５のセーフティを解除しレイザーＡＭＧの赤い虚像をターゲットに合わせる。

「レディ！」

制圧射撃を開始。セミオートで弾を効果的にばら撒く。１０発撃った段階で持ち手を変えスイッチ。リーンしながらベニア板の左側から射撃を続行する。

「ムービング！」

その隙に速水が私のいるバリケードまで移動。二人で防御線を維持する。だが私より先に発砲していた速水の残弾が尽きる。

「リロード！」

再装填が終わるまでの数秒間、制圧射撃により速水を支援、防御線を張り続ける。横でボルトキャッチを叩く音が聞こえる。

「レディ！」

「ムービング！」

速水が制圧を続ける間に私は斜め前方にあるドラム缶に移動。スライディングしながら目標地点に到達。ニーリングポジションでターゲットに向けて射撃を開始する。

「レディ！」

セミオートで発砲。ただひたすら火力を維持する。

「リロード！」

「カバー！」

制圧、そして移動、歩兵戦術の基本中の基本、ファイア＆ムーブメントだ。仮にあのターゲットが私だったら正面からでは反撃もまま

ならないだろう。
「ムービング！」
　ターゲットの５ｍの距離にあるドラム缶に速水が発砲しながら突っ込む。結構な速度で走っているのにも関わらず上半身にはまったくブレがみられない。
「ムービングッ！」
　ダッシュ、同じ距離にあるドラム缶へ突っ込む。そして発砲、弾が尽きる。
「リロード！」
「カバー！」
　すぐさま再装填。ボルトキャッチを叩き薬室にＢＢ弾を叩きこむ。そろそろ終わりにしよう。
「小隊前進！」
　再装填を見計らい、揃って立ち上がりゆっくりと前進。右へ左へと弾を叩きこむながらターゲットに向けて猛攻を掛ける。
「ピストル！」
　弾切れを想定し号令、私と速水が同時にライフルを脇にどかしトランジション、ホルスターから１９１１を引き抜く。速水のレースガン、私のモダナイズド１９１１がターゲットを徹底的に蜂の巣にする。
「……」
　互いに薬室に一発残し沈黙。銃を構えたまま左右を警戒する。脅威目標なし。
「オールクリア！」
　ホルスターに銃を戻し全身に掛かっていたテンションを抜く。よし、完璧だ。いや、その前に弾を抜かなければ。
　ＡＲ―１５の弾倉を抜き、チャージングハンドルを引きながら装填されているＢＢ弾を抜く。実銃と違ってエキストラクターがないから面倒だ。
　そうしてしっかりと弾がないことを確認し前方に向けてハンマーダウン。１９１１も同じように安全確認を行う。

「やっぱ仕事人コンビと臼井は別格だな」
「僕たちじゃまだあそこまでできないよね」
　そんな私達のやり取りを横から見ていた杉野と渚が目を見開いて感心していた。
「付き合わせてしまってすまなかったな。ありがとう」
「気にしないでいい。いつもの訓練だから」
　すまし顔でそう言う速水に私たちは改めて感心した。私でこれほど息が合うのだから、千葉と速水が組んだらどれほど凄いことになるのだろうか。
「試してみてどうだったの？それは」
「ああ、特に問題なかったよ」
　私が彼女に付き合ってもらったのは新しく組み上げたＡＲ―１５を試射するためであった。結果は問題なし。これなら実戦でもちゃんと戦えるだろう。
「にしてもやっぱ臼井の銃かっけえよなー。一応俺らが使ってるのと同じなんだろ？」
「もう原型留めてないけどね」
　渚の指摘に私は新しく組んだＡＲを眺めた。支給品の太いハンドガードに慣れている皆からすればこのＡＲ―１５はとてもスマートに見えるはずだ。
「ＣＱＢをメインに組んでみたからな。いつも使っているＡＲよりも軽くて取り回しがいい」
「まあそれだけスカスカだと軽いよな」
　杉野が思うのも無理はなかった。ハンドガードにはハンドストップを取り付けたミッドウェストのＭ―１ｏｋハンドガードを使用し細身かつ軽量。ストックもＭＦＴのミニマリストストックだから通常のストックよりも非常に軽い。
　サイト周りも予備のマグプルのフリップアップサイト以外はボルテックスのホログラフィックサイトしか取り付けていないので取り回しの良さは段違いだ。
　いつもレーザーやらフォアグリップやらウェポンライトやらでゴ

テゴテになっている私の銃からすれば大変スリムに見えるだろう。
更には大型化したボルトキャッチ及びマガジンリリース、チャージングハンドルエクステンション、ウェポンライト、などなど正にＣＱＢのためのＡＲ―１５と言っても過言ではない出来栄えに仕上がった。
本当ならこれの凄さを皆に語りたいところだが、それをするともれなく止められるのを学習しているので我慢する。
ちなみにこう言った私の語りを皆は臼井語と呼んでいるらしい。不破曰く宇宙人と話している気分になるとのことである。ついていけるのは律と殺せんせーだけだ。烏間先生ですら途中でリタイアしてしまった。ビッチ先生も言わずもがなである。
「それ、幾らしたの？」
速水が半目で私の銃を訝し気に眺める。前にさらっとスコープの値段を言ったら凄い顔をしていたので気になるのかもしれない。
「前に買ったホログラフィックサイト以外は持っていたパーツを流用しただけだよ。私達の使っているものは本物のＡＲ―１５と同じ寸法だから簡単に移植できるんだ」
頭の上に疑問符を浮かべる渚と杉野を横目に速水はほっと息を吐いた。もしかして前のように散財したとでも思っていたのだろうか。
「例えエアガンだとしても、ＡＲ―１５は良い銃だ」
「ねぇ、臼井がいつも言ってるＡＲ―１５ってなに？」
ライフルに指を指して訊ねてくる。よく見れば渚と杉野も速水に同意するように頷いていた。
「何って言われてもＡＲ―１５はＡＲ―１５だろ」
「よく知らないけど、これってＭ４って名前じゃないの？」
ああ、そういうことか。私は渚の言葉にようやく合点がいった。Ｍ４、正確にはＭ１６シリーズのカービンモデルこのことだろう。
「私は軍人じゃないからＭ４とは呼ばん。ＡＲ―１５っていうのは今私達が使ってるライフルの商品名のことだ。ＡＲってのはアーマライト・ライフルの略で、これを始めに作った会社の名前だな」
普段、それこそ毎日のように使っている銃のことだけあって、皆は

興味深そうに私の話を聞いてくれた。いつもは話し出すと止められるのに。
「それでもってＭ４は軍に採用されたＡＲ―１５のカービン仕様の名称、米軍が採用した四番目のカービンライフルって意味だ」
「ん？つまりどういうことだ？」
「出席番号みたいなものじゃないかな。管理しやすいように本名とは別に番号を割り振るやつ」
「まあ、そんな感じだ」
　別にＭ４もＭ１６も一般名詞と化しているのでそう呼んだところで問題なく通じるが、軍属じゃない引け目か、傭兵としての安っぽいプライドのせいか、軍の制式名称で呼ぶのはなんとなく嫌だった。
「この銃はとにかく色々なメーカーで作られてていちいち呼び分けるのが面倒だから私は纏めてＡＲ―１５って呼ぶようにしている」
「へぇー」
　杉野絶対真面に聞いてなかっただろ。まあいいや。私はこの手の話になると熱くなってしまうから自重するくらいがちょうどいい。
「ちなみにどんな会社が作ってるの？」
「ああ？確か……アーマライトは勿論、コルトにＳ＆Ｗだろ？それからレミントン、スプリングフィールド、ナイツ、スタームルガー、ダニエルディフェンス、スタッグ、サベージ、ＪＰ、ヤンキーヒル、それから――」
「お、多すぎる……」
「どんだけ作ってんだよ……」
　使いやすいし最高のライフルだと思うが、だからと言っていくらなんでも作りすぎだろと私も思った。Ｍ１４だってそこまで作られていないだろうに。噂によるとポンプアクション式のＡＲ―１５もあるらしい。世も末だな。
　世界で一番作られた銃がＡＫファミリーなら、さしずめＡＲ―１５は世界で一番売れた銃だろう。あと半世紀は現役で行けそうだ。
「ちなみに今言ったのは全部アメリカだ。他にもアメリカにはまだまだたくさんあるぞ。ブラボー、ルイス、アンダーソン、ロックリバー、

ウインドハム――」
「マジかよアメリカ怖すぎだろ」
杉野達の頭にアメリカに対する偏見が植え付けられた瞬間であった。ちなみに速水は途中からいなくなっていた。

～ライフルの時間～
「そう言えば君は新しい銃を使わないんだな」
シューティングレンジで隣になった竹林がターゲットに向けて発砲しながら話しかけてきた。お世辞にも上手いとは言えないが、それでも構えはしっかりしている。後は数を重ねれば上達するだろう。
「ああ、Ｇ３６のことか」
「確かこれはそう言う名前だったね」
いつの間にか、正確には二学期に入ってからであるが防衛省から支給されるエアガンの中にＨ＆Ｋの（実際はエアガンだが）Ｇ３６が混ざっていた。しかもカービンモデルのＧ３６Ｃだ。
皆はこっちのほうが使いやすいのか、一部を除いて殆どＧ３６に変えている。竹林もそのうちの一人だ。
「その銃は少ししか撃ったことないが良い銃だよ。短銃身だからコンパクトだしポリマーを多用したお陰で軽量。しかも操作系統は完全に左右対称になっているからＣＱＢには打ってつけだ。ＡＲに比べれば拡張性が低いが、元の出来がいいからそれも必要ない」
「その割には一度も使っているところを見たことがないんだが、何か拘りでもあるのかい？」
彼の言う通り私は二学期に入ってから一度もＧ３６を使っていない。一応何度か触ったが結局いつものＡＲ―１５に戻してしまった。
「別に拘ってるわけじゃないよ。銃なんてものは所詮弾薬の発射装置。要は撃ちたい時に撃てて狙ったところに弾が飛べばなんでもいい。ただな」
「ただ？」
ＡＲ―１５のマグウェルに弾倉を挿入、チャージングハンドルを

引っ張り薬室にＢＢ弾を叩きこむ。
足を大きく開き身体は斜め４５度。ウィークハンドはハンドガード前方を握りしめストロングハンドでグリップを引き寄せバットストックを肩に押し付ける。
背中は大きく丸め頬は形が変わるレベルでしっかりとストックに押し付けサイティング。サイトピクチャーとサイトアライメントにずれがないことを確認しセーフティ解除。
「私にとってＡＲ―１５は身体の一部だった」
ホログラフィックサイトの虚像をターゲットに合わせる。ゼロインは既に済ませた。
引金を絞る。ターゲットのど真ん中に穴が開く。いついかなる時もこの銃はいつも私の隣にいた。
「アーマライトと共に生き」
発砲、ど真ん中の穴が少しだけ大きくなる。これから如何に良い銃が出たとしても。
「アーマライトと共に死ぬ」
発砲、穴が広がる。今更他の銃など使わない。
「今は違うのかい？」
構えを解き、もう一度構え直す。拘りなどではない、ただの独りよがりの自己満足だ。
「そうだ」
だがその自己満足もいずれ必要なくなるだろう。
「そうだとも」
発砲、弾がターゲットの穴の向こうに消えていった。

～撃ち方の時間～
「よーい！」
ターゲットの目と鼻の先に立ちホルスターに意識を集中させる。カイデックスホルスター収められた１９１１には既に１４発の６ｍｍボールベアリング弾が装填され、ターゲットへ牙を向く瞬間を待っ

ている。
「はじめ！」
号令。脳が信号を発し筋肉が収縮、目の前のターゲットに拳を叩きつけ１ｍ後退。
後退しながら１９１１をドロウ。腰を落とし銃を中心に右足を引き両手で銃を胸に押し付けるように保持する。
ダブルタップ、ターゲットの真ん中に風穴を開け、そのまま右隣のターゲットに胴体ごと銃口を向け同じようにダブルタップ。
ポジション変更。腕を持ち上げ銃を斜めに構えサイトを左目の前に持って行く。四連射、二つのターゲットの上部に風穴を開ける。
移動開始、瞬時に銃を左にスイッチ。上体をぶらさず左に小走りしながら横並びになった二つのターゲットに三発づつ叩き込む。
残弾なし、立ち止まり右にスイッチ。手首のスナップをきかせ弾倉を弾き飛ばしフレッシュマガジンを叩き込む。
スライドストップ解除。目線から銃口を僅かに下ろしターゲットを警戒。全弾命中を確認。
胸に二発、頭に一発、お手本のようなモザンビークドリル。これを食らえば如何に超生物と言えどひとたまりもないだろう。
「オールクリア！」
状況終了。セーフティを掛け銃をホルスターにしまう。僅か十秒にも満たない行程だが適切なサイティング、残弾管理、スムーズなスイッチ、リロード等、考えることは多い。私はほっと息を吐いた。
「と、今のがＣ．Ａ．Ｒの基本的な動作だ」
「師匠！速すぎて見えませんでした！」
そんな私の動きを体育座りで横から見ていた不破が手を上げながらそう言った。その横には速水と千葉のコンビきょとんとしながら座っている。
というか不破はいつまでそのネタ引っ張るつもりなんだろう。
「教えてくれって言ってきたのは君達だろ」
始まりはいつものように私は至近距離での射撃訓練を行っている最中、速水が私の撃ち方を教えてくれと言ってきたのが発端だった。

千葉がいるのはわかるが不破は何故いるのだろうか。まあいいや。
「でもそうだな、一から説明しよう。私が今行った撃ち方はC・A・R、正式名称Ｃｅｎｔｅｒ　Ａｘｉｓ　Ｒｅｌｏｃｋと呼ばれる撃ち方で、主に室内や車内での射撃に念頭を置いて考案されたテクニックだ」
　ここまで言い切りホルスターから１９１１を引き抜き胸に押し付けるように保持する。
「これがハイポジション、ファストドロウや超至近距離で戦う場合のポジションだ。銃を両側から押さえつけるように握り、胸に押し付ける。この際左右の親指の腹を合わせるのがポイントだ」
　そのまま真横のターゲットに向けてダブルタップ、銃を押えつけていることもありＢＢ弾は綺麗に同じ場所に命中した。
「普通に構えるのと違ってこれなら肘を相手に向けるだけで照準がすむし胴体を横に傾ければ頭を狙うこともできる」
　再びダブルタップ、続けて流れるように胴体を傾け少ない動きでターゲットの上部を撃ち抜いた。
「これは私達とはあまり関係ないが、普通のスタンスと違って銃を奪われる心配が少ない。万が一手を伸ばされそうになっても――」
　真横のターゲットに左肘を叩きつけ後退、銃を持ち上げエクステンデッドに移行する。速水達は真剣に聞いているのかじっとこちらを見るだけだ。
「こうやって距離を置ける。ちなみに今の構えがエクステンデッドポジションと呼ばれる構え方だ。ハイポジションから持ち手を少し上にするだけで簡単に移行できる。こちらは少し距離がある場合の構えだ」
　足を入れ替え左手にスイッチ。それを見せるように前後に移動しながら何度か繰り返す。本当は真後ろに銃口を向けたいところだが、人がいるので断念する。
「右手なら左目、左手なら右目と、持ち手とサイティングする目が逆になるようにするのがコツだ。だが、これは欠点も多いから個人の自由だな」

「どんな欠点があるんだ？」
「やってるみるとわかるんだがサイティングする側の視界が著しく狭くなってしまうんだ。アイソセレスやウィーバーと違って顔を正面に向けているわけでじゃないからな」
　だがその分至近距離での安定感はアイソセレスの比ではない。私はこれが好きで愛用している。エアガンだとホップアップのせいで斜めに構えると弾がおかしな方向に飛んでいくが、それが懸念される距離ではそもそも使うべきではない。
「欠点も多い撃ち方だが、このように瞬時に左右を入れ替えられるからアイソセレスやウィーバーよりも周囲の状況に対応しやすい。なおかつ腕を伸ばす必要がないから至近距離での銃撃や狭い場所では特に有効だ。殺せんせー相手には丁度いいかもしれないな」
「なるほど……」
　感心する三人を尻目に右肘を伸ばし銃を捻り出すようにウィーバーに移行する。やはりこっちのほうがしっかり狙えるな。
「ちなみに更に距離がある場合は持ち手の肘を伸ばしてそのまま普通の構えに移行できる。言っておくが最適解というものはない。状況に応じて適切なスタンスを取ることが重要だ」
　弾を抜き銃をホルスターに戻す。とりあえず基礎は教えた。使うか使わないかは三人次第だろう。
「ただ、そうだな。そもそもこんなテクニックが必要ないような立ち回りやチームワークを磨く方が手っ取り早い。使う機会も限られているだろうし練習する意味はあまりないな」
「ゆ、夢がないなぁ……」
「実際の戦闘なんてそんなものだ」
　居場所のわからない敵に襲われ三十分撃ち続けたがとうの敵はとっくの昔に逃げていたなんてのはざらだ。映画のような華々しい戦闘は現実にはあり得ない。
「まあ慣れないうちはこの撃ち方はお勧めしない。スライドが目にぶつかって危うく失明しかけた馬鹿を知っているからな」
「あちゃー、それは痛い」

不破はその光景を想像してしまったのか顔を痛そうに歪めた。
「ちなみに私だ」
「……」

～ホルスターの時間～
「おはよー臼井さん」
「おはよ！臼井」
教室の扉を潜る。委員長コンビの片岡と磯貝が今日も私を出迎えた。私は軽くスキップしながら二人の前に躍り出た。
「おはよう片岡！磯貝！」
「あれ？どうしたの臼井さん、なんか嬉しそうだけど」
「いやぁ、新しいホルスターを買ったからつい興奮しちゃってな！実はもう着けているんだ！」
秋にしては今日は少し暑い。上着を脱ぎシャツ一枚になる。そんな私の姿に片岡達は首を傾げた。
「あれ、銃なんてどこにも見えないぞ」
「そう思うだろ？でも違うんだよー」
胸に感じる重みを噛みしめながら私はニヤリと笑った。今の私は丸腰にしか見えないだろう。私の興奮を皆にも知ってもらいたいくらいだ。
「しかもこれは殺せんせーにも効果があるかもしれないホルスターなんだ。凄いだろ！」
「そんなに凄いんだ。よかったら見せてくれない？」
「うん！いいぞ！」
待ってましたと言わんばかりに私はシャツの裾を思いきり捲りあげる。乾燥した空気が素肌を撫でる。皆の視線が一気に私に集まりだす。ざわつく皆を横目に私は下着に取り付けたホルスターから――
「臼井さんストップ！ストップ!!」
「うわっ、何をする！やめ！」

顔を真っ赤にした片岡が慌ててシャツの裾を押えつけてくる。隣にいた磯貝も同じように顔を赤くして動揺しているようだ。
「う、臼井さん!?今何しようとしたの?!」
「何って、下着に取り付けたホルスターからエアガンを……」
「ああもう!見せようとしないでいいから!!磯貝君も向こう見てて!」
「わ、わりぃ!」
もう一度捲って銃を引き抜こうとすると今度はもっと強い力で元に戻される。なんで駄目なんだ……
「お、おい今見えたか!」
「ああ……白だった……」
男子達、特に前原や岡島あたりが妙に血走った目でこちらを見てざわついていた。なんか怖いぞ。
「ちょっと男子!!って言いたいところだけど、今回は臼井さんが悪いから何も言わないでおく……」
私?私がいったいいつ悪いことをしてしまったのだろうか。もしそうなら謝るべきだろうか。
「な、なあ片岡なんでみんなこんなに――」
「臼井さんちょーと一緒に廊下で話しようか」
「あ、ちょ!痛い引っ張るな!」
首を掴まれ猫のように引きずられていく私。そのまま教室の窓から見えない位置まで連れてやっと解放される。
「はぁ……臼井さん、何しようとしたの?もうだいたいわかってるけど……」
「あぁ、烏間先生に頼んだら新しいサブコンパクト型の１９１１を貰ったからちょうどいいホルスターを探していたんだ」
「それで?」
「な、なんか怖いぞ片岡。それでネットで下着に取り付けるホルスターが売ってたからこれだ!と思って買ったんだ」
これなら服を脱がないかぎり絶対にばれないし殺せんせーは女性の胸に弱いと聞く（渚からの情報だ）これしかないと思ったんだがな

……
「これだ！じゃないでしょ……ビッチ先生じゃないんだからさ」
「よかったら着けてみるか？サイズがC以上なら使えるらしいぞ」
偽殺せんせー騒動の時、生徒の名簿に女子生徒の胸のサイズが書きこまれていたが、確か片岡は私と同じサイズだったはずだ。
「いらんわ！はぁ……頭痛くなってきた……」
「そうか、まあいいや。話はこれで終わりか？そろそろ戻らないか？」
その瞬間、片岡から感じる威圧感が途轍もなく大きくなった。こ、これは嫌な予感がする。いつかレストランで一緒に勉強した時のことを思いだし私は身震いした。
「臼井さん」
「な、なんだ？」
「それ使うの禁止ね」
「えっ!?せっかく買ったの――」
「禁止ね？」
「で、でも結構――」
「禁止」
「……らじゃー」
それ外してから戻ってきてね、と片岡は爽やかな笑みを浮かべ去って行った。仕方ない、トイレで外してくるか……。そう思って後ろに向き直った瞬間だった。
「ねぇ祥子」
背中に悪寒が走る。油の切れた機械のようなぎこちない動きで後ろを向く。そこにはいつの間にかいたっていつも通りのカエデが立っていた。
「ちょっと、お話ししよっか」
顔はニコニコしているのに、目が、目だけが全く笑っていない。こ、怖すぎる……。ここは一旦退却しよう。
「……断る！」
「あ！待ちなさい！」
全力でダッシュする私、そしてそれを追いかける涙目のカエデ。こ

の無益な逃走は数分の間続き結局私が観念することで終息したのであった。

そして私は金輪際カエデの前でこのホルスターを使わないこと誓うことになった。酷すぎる。私はホルスターから銃を抜こうとしただけなのに……

放課後　もしもの時間（３）

Ｐ２２６をゆっくりと構える。息も絶え絶えでただ握るのが精一杯。けれど、必死に己を律し震える手で口径９ｍｍの銃口を仰向けで倒れ伏す恩師へと向ける。

『さぁ、撃ちなさい。君にはその権利がある』

薬室には既に弾薬が装填されている。あとは引金に数キロの力を籠めれば撃鉄が撃針を前進させ雷管、装薬へと伝わる。

そして急激な勢いで膨張した燃焼ガスが弾頭を押し出し右回りで回転しながら銃口を飛び出し……

目の前の人を殺すのだ。

『よく、頑張り……ましたね……』

震える指を無理やり引金に持っていく。セーフティは外してある。後は引金を引くだけ。それだけで全てが終わる。終わってしまう。

不意に今までの楽しかった光景が脳裏に蘇る。頭を撫でられたこと、褒められたこと、生きてくれて嬉しいと言ってくれたこと……

視界が滲みサイトピクチャーがぼやける。

『泣いては、いけません。君は自分の、やるべきことをやっただけなのですから……』

そうだ。私にはまだやるべきことが残っている。こんな所で泣いている暇はない。前に進まなければならないのだから。

腕の震えが止まる。視界がクリアになる。引金に力を籠める。

『あぁ……皆さんの受験の対策を、始めなければ……これから、忙しく……なりますねぇ……』

引金は、とても軽かった。

銃声――

「……ッ！」

目が覚める。視界に映るのは白い天井、横目に見えるカーテンから僅かに陽の光が差し込む。身体に感じるのは新品のように綺麗な

シーツとベッドの感触。
「まだ四時だ」
身体を起こし枕元に置いている腕時計を手に取る。薄暗い室内であっても自発光塗料が塗られたの文字盤と針のお陰で時刻を知ることができた。
「夢、か……」
額に手を当て溜息を吐く。決して高温多湿な地域でもないのに酷く汗ばんでいる。寝汗が多い体質ではない。これは夢のせいと見るべきだろう。
「今更、後悔したって遅いだろ……」
「……さちこぉ、もう起きてるのぉ……」
隣のベッドからシーツの擦れる音と共に見知った人の声が聞こえる。ゆっくりと振り返ればそこにはあかりが眠そうに目を擦りながら私を見ていた。
黒い髪があちこちに跳ねあがり一年前よりも少しだけ大人びたが表情はずっと子供っぽくなっている。
「……今、何時？」
黙って腕時計をあかりに見せる。ダイビング用に作られた視認性の高い腕時計は寝ぼけたあかりの脳にも一瞬で現在の時刻を知らせた。
「まだ四時じゃん、寝てようよ……」
「うん、そうだな」
あかりの至極もっともな言葉に頷く。こんな時間に起きる奴はそうそういない。あと三時間は寝ていても誰も文句は言わないだろう。
でも、眠れるのだろうか。脳裏には先ほどまで見ていた夢の光景が焼き付いている。横になったところできっと眠れないだろう。
「……もしかして、またあの夢見たの？」
その言葉に黙りこくる。こんな態度、秘密を隠そうとするにはあまりにも悪手だ。案の定あかりはやはりと言いたげな顔で心配そうに眉を下げた。
「祥子は何も悪くないよ」

「わかっているさ……わかっているとも……」
殺せんせーを殺したあの冷たい冬の夜からもう一年が経過した。大量の銃火器、用意周到に準備した罠、そしてあかりの執念、それが功を成したのか殺せんせーは遂に倒れた。
だが、あかりは触手によって体力を使い果たし殺せんせーを殺すことができない。あの時撃てたのは私だけだった。
「でも、あの時の光景が目に焼き付いて離れないんだ……」
だから撃った。皆の止めろという声を無視し、弾薬を装填した拳銃を構え、そしてその銃口を恩師の心臓に突き付けた。引金はとても軽かった。
殺せんせーが消えていく瞬間を思い出す。あの人は最後まで笑顔で、最後まで教師のまま死んでいった。光の粒になりまるで初めからいなかったように跡形もなく消えてしまった。死んでしまった。
「ただ、それだけだ……」
盛大に脱力しベッドに沈み込む。マシュマロのように柔らかいマットレスが私を優しく包み込む。柔らかすぎてこのまま沈んでしまうのではないかと不安になる。
「起こしてごめん、寝てていいよ」
目を瞑りあかりに背を向け横になる。いつもならあと二時間は寝ている。このまま横になるというのも悪くないだろう。
眠る気にはならない、眠ってしまったらきっとあの夢の続きを見てしまうから。
「……そっちいくね」
「そうか……んっ？」
突如、マットレスが横に沈み込む。シーツの擦れる音と共に私の肩に何か温かいものがぶつかった。寝返りを打ち振り返る。視界一面にあかりの顔が映った。どうやらこちらのベッドに移りこんだらしい。
「朝まで時間あるし、このまま一緒に寝よっか」
そう言って問答無用で私の頭を抱き抱える。温かい体温が私の荒れ狂う心の波を沈めていく。

心臓の脈打つ音が教えてくれる。目の前の人は生きているのだと。死体でも幽霊でもないと。
「あかりは、生きてるんだな……」
「そうだよ。祥子が私を助けてくれたの」
殺せんせーを殺した後、シロは酷くつまらなそうな様子で殺せんせーがいた場所を眺めた。そしてそれから約束通りあかりの触手を抜いてくれた。
あの小賢しく悪い意味でエネルギッシュな面影はどこかに消え去りまるで人形を相手にしているようだった。
どんな意味であれ、シロにとって殺せんせーは生きる糧だったのだろう。だが、結局は全て過ぎ去ったことだ。
「そうか、ならいいんだ……」
なんであれ、あかりは生きている。もう触手の副作用に苦しむことはないし、復讐に狂うこともない。
殺せんせーの秘密は結局わからずじまいだったし、皆とは別れなければならなかったが、その事実さえあれば十分だ。
「温かいなぁ……本当に温かいなぁ……」
人の温もりを知らなかった私にとって、この温かさは麻薬のように身体と心に沁み込んでいく。
少しでも気を抜けば溺れてしまいそうな程の強烈な優しさ。いや、もうとっくの昔に私は溺れているのかもしれない。
「むぅ、もしかして私が子供体温だって言いたいの？いいもん、どうせ祥子と違って私はお子様ボディですようだ」
あかりが優しく笑って頭を撫でる。瞬きが多くなる。
「あぁ……そう、だな……。お姉ちゃんは本当に、小さい……な……」
瞼が重くなり目を瞑る。意識が微睡に沈んでいく。多分、気が付いていないだけで碌に眠っていなかったのだろう。眠くて眠くて仕方がない。
「――、――」
あかりが何か言うが聞き取れない、まるでエレベーターで急降下するように意識が闇に吸い込まれていく。不思議と不快感はない。

きっといい夢を見れそうだ。

「お休み、祥子」

安らかな寝息を立てて眠りに落ちる祥子を見て、私はほっと息を吐いた。こうして祥子が跳び起きるのは特に珍しいことじゃない。

殺せんせーを殺してから一年、私の復讐に決着が付いてから一年。祥子はずっと私の隣で私を守り続けた。

地球を救った報酬も約束通り支払われた。三百億円という莫大なお金。まさか本当に支払われるなんて思ってもいなかった。

予め約束した通り私が二百億、祥子が百億貰うことになった。私は何度も山分けでいいと言ったけど祥子は契約は絶対だと言って頑なに譲らない。でも、実際は殆ど共有財産と化しているので別にそこまで不満はない。

「また、新しい傷できてる……」

寝巻の襟から覗く新しい切り傷に私は息を呑んだ。多分昨日路地ではぐれた時に作った傷なんだろう。

「怪我したら報告するって言ったじゃない……」

E組には戻らなかった。いや、戻れなかったって言ったほうがいいかもしれない。私達は渚達の視線を無視し報酬を受け取ると、そのまま逃げるように海外に飛んだ。

なんせお金だけは文字通り使いきれないほどある。何処にでもいけたし、なんだってできた。けれど、代償として悪意を持った人間に狙われるようになってしまった。

世界中の口座に分散して賞金を隠したお陰で滅多に襲われることはなくなったけど、それでも人の口に戸は立てられない。祥子はその度に戦い、そして傷つく。

「あの約束まだ守ってるのかな……」

祥子は殺せんせーと人を殺さないと約束したと言っていた。現にあれから私の前で人を殺したことは一度もない。襲ってくる相手には相変わらず容赦ないけど、それでも命だけは絶対に取らない。

「祥子は優しすぎるよ……」
寝息を立てる頭を撫でる。二年間一緒に過ごしてきたけれど、この子の本質は何も変わらなかった。
祥子は自分に優しくできない。人のことは全部捨ててまで助けようとするのに、自分にだけは絶対に優しくしない。
何度注意してもこの子は苦笑いするだけで改めようとしない。E組にいた時は少しづつ変わっていたけれど、肝心の切っ掛けになった人物はもうこの世にいない。
「私の人生滅茶苦茶にしたんだから、責任取ってよね」
死ぬつもりであそこに潜り込んだのに、祥子のせいで計画が滅茶苦茶になってしまった。唯一の生きがいだった復讐も決着が着き、何をすればいいのかわからないのにお金と時間だけが腐るほど手に入った。
だから、残りの時間はこの子のために使おうと思う。祥子が自分に優しくできないのなら、その分私が優しくする。自分を愛せないのなら、私が愛する。
「よいしょっと……」
寝ている祥子が起きないように、そっと隣のベッドの枕をひっくり返し黒光りする掌サイズの鉄の塊を手に取った
「祥子、怒るかな？」
名前はグロック２７、前にそれとなく護身用のピストルなら何がいいかと祥子に聞いた時に勧められた銃。弾も祥子の使っているピストルと同じ・４０ｓ＆ａｍｐ；ｗ弾のジャケテッドホローポイントだ。
何度も何度も隠れて練習し身体の一部になるまで使い込んだ。分解も整備もお手の物。ピストルだけじゃない、ライフルもショットガンもマシンガンだって使える。
的だって沢山撃った。人だけはまだ撃ったことはないけれど、その時が来たら私は躊躇なく撃つ。
「……祥子」
銃を握ったままベッドに戻り祥子を抱き締める。もうこの子に銃

なんて握らせない。祥子が私を守ってくれたように、私も祥子を守る。
「そうと決めたら、一直線なんだから……」
額にキスをする。少しだけ汗の味がした。

「クレープってクリームが入ってなくても美味しいんだな……」
「うん、私もびっくり」
石畳みの街、オープンカフェで栗の味のするクレープを頬張り私達は同時にへにゃりと破顔させた。日本とは違った乾いた空気までもがこの優しい味の隠し味になっている気がする。
「次はどこいこっか？昨日食べたプリンもう一回食べに行きたいなぁ」
「まだ食べるのか？」
「だってイタリアだよ！食べなきゃ絶対損だって！」
ごたごたが片付きようやく行けたイタリア旅行。提案したのは私だというのに、どうみても私以上に張り切っている。
子役は好きでやっていたと言っていたが、それでも本来家族に甘えるべき時期を仕事に費やしてきたはずだ。気のすむまで子供の時期を取り戻してほしいと思うのは傲慢なのだろうか。
「あ、でもアイスも食べたいんだよね。どこがいいかなー」
『でしたら、ここから歩いて15分程の距離におすすめのお店がありますよ！』
テーブルの上に置いた携帯電話の画面が急に明るくなり、その中に見知った顔が現れた。私達は顔を乗り出し画面を見つめる。
「律、ナチュラルに会話に混ざってくるのはびっくりするから止めてくれ」
『酷いです祥子さん、私だってお喋りに混ぜてくれたっていいじゃないですかぁ』
律がわざとらしく目元を拭いながら俯く。ご丁寧に雨の背景までつけてだ。バッテリー無駄に消耗するから止めてほしい。

「律、嘘泣き禁止」
『てへ、ばれちゃいましたか』
一年前もあざとかったが、心なしかあれからもっとあざとくなった気がする。あれから何度か携帯電話だって乗り換えているのに、どうやってか知らないがいつも気が付くとモバイル律がインストールされている。
そうして行く先々で私達のナビをしたり今のようにナチュラルに会話に混ざったりしてくるのだ。友達を話をするのは楽しいからいいけれどもう少しやり方を考えてほしい。
「でもどうしたの律急に現れて。最近はあまり会ってなかったでしょ？」
『お友達に会いに行くのがそんなにおかしなことでしょうか？』
「勿論そんなことないけど……」
あかりの言う通りだ。あんなことをやってしまったとは言え、私達は律のことを友達だと思っている。
「というか、まだ私達のこと友達って思ってくれているんだな」
『当たり前じゃないですか！怒りますよ祥子さん！』
デジタルな友達のアナログな怒りに思わず目を伏せる。あれだけのことをやったというのに、律はまだ私達のことを友達だと思ってくれているようだ。
『あかりさん、祥子さん、もうあれから一年と１００日が経過しました……お二人ともそろそろ日本に帰りませんか？』
「それは……」
今度はあかりが黙り込んだ。自分のやったことを思い出しているのだろう。理由も告げずに皆の前から去り、そして何も言わずに逃げるように国を出て行った。
『私も渚さん達も気にしてません。それどころか早く帰ってきてとの伝言まで預かりました』
「だけど……」
『それともお二人はこのまま最終学歴が中学生になってもよろしいのでしょうか！』

私達の時が止まった。考えないようにしていたことをはっきりと、それも大声で指摘され二人して俯く。
「べ、別にお金ならいっぱいあるし……」
「あ、あぁ……人生十回くらい遊んで暮らしてもまだ余るくらいだし……」
『いけませんよ！境遇にあぐらをかいていては！』
律のもっともすぎる正論に何も言い返せず二人して黙りこくる。というか言い返そうにも正論すぎて言い返せない。
『お二人の現在までの支出と行動パターンから推測して１５年以内に破産する可能性がなんと２０％もあるんです！私、祥子さんとあかりさんがメキシコの貧困地区でゴミを漁りながら野良犬に怯える姿なんて見たくありません！』
なんで、イタリアに来てまで説教されなくてはならないんだろうか……しかも妙に例えが生々しくてその光景が簡単に想像できてしまう。
『ですが、お二人は私が説得しても動かないと判断しましたので……』
嫌な予感がする。予感というか既に背後に人の気配が近づいてくるのを感じる。あかりも既に察知したようで、顔を青くしている。
『助っ人を呼んじゃいました！』
「へぇー、平日からカフェでクレープなんて、随分と良いご身分じゃない。ねぇ、お二人さん」
非常に流暢な、それでいて聞き覚えのある日本語。しかもこの声質は相当に怒っていると見た。意を決してゆっくりと振り返る。
「ハーイ、久しびりね」
「び、ビッチ先生……」
な、何故ここに。いや、律がいるんだから私達の位置情報などお見通しか。会いたくなかった人にいきなり会ってしまい、どうしていいのかわからなくなる。
「な、なんでここに？」
「わざわざ防衛省の仕事の合間に暇作って探しに来てやったのよ！感謝なさい！」

殺し屋はもう辞めたのか、よかった。じゃない、探しに来たってことはもしかして……
「二人とも、いい加減拗ねてないでとっとと日本に帰るわよ」
やっぱりだった。しかも頭をがっちり押さえつけて逃げられないようにする始末。というか力込めすぎて頭が痛い。
「び、ビッチ先生あ、頭つぶ――」
「あぁん？誰がビッチですって？私は既婚者よ！」
「なんでもないです……ビ、イリーナ先生」
あかりもチンピラみたいなビッチ……イリーナ先生の気迫に何も言えずうな垂れる。というか結婚したんだ。相手は言わずもがなだろう。
「でも意外だわ。私はてっきりあかりが豊胸手術して胸がボールみたいになってると思ってたんだけど。その様子だとあれから何も成長してないようね」
「……」
あかりが凄い顔になってるからそれを言うのは止めてあげたほうが……しかもよく見るとナイフとフォークを握る手が猛烈な勢いで震えている。これ刺したりしないよな。
「ま、当然よねぇ。あんたみたいなパッド入れても隙間から抜け落ちるようなお子様体型のガキが手術したってバランス崩れるだけだもの」
「……祥子、いつもの」
ビッチ先生のいらない挑発によって怒髪天を衝かれたあかりがぼそりと呟いた。
私はその言葉に服の中に仕込んでいたスモークグレネードのピンを抜き、石畳みの上に転がした。レバーが外れ程なくして私達の周りが煙に覆われる。
「ゲホッ、なによこれ！」
「行くよ！祥子」
「待て、お金……ＯＫ！」
ビッチ先生が咽ている間に立ち上がり手を繋いで走り出す。勿論

テーブルの上に迷惑料も兼ねてかなり多めの代金を置いていくのも忘れない。多分、こんなのだから律に破産するって言われるんだろうな。
「ちょ！待ちなさい！このガキ共!!」
「べーっだ！」
いつにも増して子供っぽい仕草であかりがビッチ先生を挑発する。先生も私達を追いかけようとするが、ヒールを履いているせいで一歩目からずっこけた。
「祥子、予定変更。次の国行くよ！」
「ああ、そうだな」
手をつなぎ走りながら次の目的地を考える。どうせならこのまましばらくヨーロッパを観光しよう。
「フランス行ってそれからスペインにしよ！祥子フランス語もスペイン語も話せるでしょ」
「あぁ、それがいい」
正直なところあかりがいるのならどこだっていいのだが、それを言うのは無粋というものである。
私達は走り続ける。過去は変えられない。殺した人は帰ってこない。だから何があっても走り続けるしかないのだ。だけど、こんな人生も意外と悪くない。
「あはは！行くぞあかり！」
「ちょ、祥子速すぎ！」
私は今幸せだ。

放課後　チョコの時間

「バレンタインデー、ねぇ」
　何気なく呟いた一言に隣にいたあかりの肩がびくりと震え、こたつの上の緑茶が揺れた。銃を手放し私の今までの過去を清算し、殺せんせーがあかりに追い出されてからしばらくたったが、私の頭の中はバレンタインデーと言う言葉で一杯だった。
「はぁ、ほんとどうやって渡そう……」
「なぁあかり」
「うん、どうしたの？」
　私を見ているが、どこか遠い目をしている。顔も心なしか赤い。きっと例の女顔の殺し屋を想っているのだろうが私には関係のないことだ。それよりも今は大事なことがある。
「バレンタインデーって、なんだ」
「祥子知らないの？」
　頷く。バレンタインの日。名称からしてアルファベット圏の文化だろうと思われる。しかも十中八九キリスト教絡みだろう。一応アフリカもキリスト教圏だが、内戦真っただ中の国でそんなイベントあるわけもない。中東は言わずもがなだ。
「単語自体は一年の三学期に聞いたような覚えがある。しかしどういうイベントなのか全くわからない。店先やテレビでやたらチョコレートの宣伝をしているがそれと関係あるのか？」
　ずっと不思議に思っていたのだ。別にカカオ豆の旬の時期というわけでもない。バレンタインという名称もただのファミリーネームだ。少し前までは正月一色だったのに、本当に日本は色々と忙しい国だ。
「祥子は知らなくてもしょうがないか。えっとねバレンタインデーっていうのは――」
　それからあかりはバレンタインデーについて大雑把にではあるが説明をしてくれた。その内容は概ね私の予想通りであった。
「なるほど、好意を持つ男性にチョコレートを贈る風習か。よく意味

が分からないな。何故チョコレートなんだ？」
「そういえば……なんでだろ？」
「私に聞かないでくれ……まあつまり、あかりは渚にチョコレートを贈りたいってことなんだな」
「……はい」
　いつもの元気は何処へやら、顔を赤くし力なく返事をするあかり。いつもは尻に敷かれている私だが、渚のことにだけ関しては私のほうに主導権がある。少しだけ気分がいいのは秘密だ。
「渚は本当にいい奴だからなあ。君が好きになるのもわかるよ」
「も、もう！　私のことはいいでしょ！　それよりも祥子はチョコあげたい男子いないの？」
「私？　私か……」
　すくなくともこの国では２月１４日にチョコレートを男子に渡すということは渡す相手を異性として意識しているという認識になるらしい。恋愛以前に人としてようやくスタートしたばかりの私とって、恋愛なんてものは彼岸の彼方の存在だ。
「そろそろ気になる男子とかいてもおかしくないと思うんだけなー」
　ニコニコと、いやニヤニヤと私に詰め寄る。どっかの下世話な教師の性格がうつってないか？
「ああ、そう言えば一学期に凛香達とこんなやりとりしたっけな」
　あの時は大まじめに人に好かれる資格などないと言って盛大に呆れられた。今思えばおかしなことを言ったものである。それにしても気になる異性か……
「そもそも恋愛感情すらよくわからない。人を好きになるのと異性として好きになるのとは何が違うんだ」
「え？　それはその人とずっと一緒にいたいとか、抱きしめてほしいとか？」
「抱きしめてほしいかは別として、私は渚ともカルマともずっと一緒にいたいぞ」
「うーん、多分違うと思う」
　どうやら違うらしい。あかりくらい露骨なら恋愛感情を抱いてい

ることはわかるのだが、肝心の恋愛感情がどういうものなのかはまだわからない。
「別に好きな相手じゃなくても感謝している人とか、お世話になった人にもあげていいんだよ。というか海外だとそっちがメインじゃなかったっけ」
「それならわかりやすい。恋愛は私にはまだ早すぎるよ」
　人ではなく異性として好きになるなんて、どういう意味なのかまるで理解できない。流石にＬｏｖｅとＬｉｋｅの違いくらいは私にもわかる。けれど、それを男性に当てはめろと言われてもなあ。
「そもそも私が色恋なんて似合わないだろ」
　平気で泥塗れになり虫や蛇も真顔で食べられる私が異性に夢中になって顔を赤くする様なんて想像がつかない。というか違和感しかない。
「別にそんなことないと思うけどなー。祥子だって女の子なんだし恋してもおかしくないって」
「そうかー？」
「だって殺せんせーも恋するんだよ？」
「……凄い説得力だ」
　それを言われると言い返せない。しかしいくら頭を捻ってもピンと来るような相手は思い浮かばないので、私にはまだまだ先の話なのだろう。
「まあ、そう言うイベントならチョコでも買って皆に配るとするかな」
「あ、そうだ！　まだ時間あるしこれから一緒にチョコレート作ろ！　いくよ、祥子！」
「あ、おい！　手を引っ張るな！」
　いつも通りの行動力。そうと決まれば一直線とはよく言ったものだ。まあいい、まだ恋とか愛とかそういうのはわからないが、今はあかりと一緒にバレンタインデーとやらを楽しむとしよう。
「やはりというか、なんというか様子が変だな……」

あれから少し経った2月14日、遂に迎えたバレンタインデー。学校に登校した私を迎えたのは妙にそわそわした男子達であった。外面はいつもと変わりがないのだが、あきらかいつもと様子が違う。
「そうですか？　いつも通りな気がしますけど」
誰に話したわけでもないのに、前に座っていた愛美が当たり前のように私の呟きをキャッチした。いつもなら千葉やカルマが混ざってくる頃だろうが、今日はまだ来ていない。
「いや、愛美は聞こえないかもしれないが呼吸音がいつもより乱れている。明らかに動揺している証拠だ。特に岡島なんかは凄いぞ」
「た、確かに……」
岡島に限って言えばそわそわというよりも挙動不審といったほうがいい。あれは私でなくても誰だっておかしいとわかるだろう。しかし期待している彼には悪いが岡島にチョコレートをあげたいと思う女子がE組にいるかは怪しいものだ。
「そう言えば愛美は誰かにチョコレートあげるのか？」
「はい、カルマ君に頼まれて私もチョコレート作りました。凄い上手にシアン化できたんですよ！」
「まあ、その……楽しそうで何よりだ」
何故こうも目をキラキラさせているのだろうか。シアンって思い切り毒殺する気満々じゃないか。というかカルマはいったい何を考えているんだ。
「ああ、そうだ」
鞄にしまっていたチョコレートの小袋を取り出し差し出す。あかりはバレンタインは友達やお世話になった人にも渡していいと言っていた。ならば友人である愛美にも贈ったとしてもなんらおかしな話ではないはずだ。
「色々ありがとう。これからもよろしくな愛美」
「わぁ、ありがとうございます！　祥子さん」
目を輝かせ大事そうにチョコレートを見つめていた。喜んでもらえたようで何よりだ。こういうのを友チョコとか言うのだろうか。本来の趣旨からは外れている気がするが、愛美が嬉しそうならなんで

もいいか。
「おーい、凛香」
　同じように愛美の前に座っていた凛香にもチョコレートの包みを手渡す。私から貰うなんて思っていなかったのか、珍しく目を見開いて驚いていた。
「チョコレート？　私に？」
「ああ、君にも散々世話になったからさ。ありがとう、これからもよろしく」
「うん、私もよろしく」
　生まれて初めてのイベントだが、調子が出てきた。ようはいつも通りに好意を示せばいいだけのようだ。私はこの後も陽菜乃や桃花、今まで世話になった人間全てにチョコレートを渡し続けた。例によって本来の趣旨からはそれているようだが、知ったことか。思いが伝わればそれでいいのだ。

「臼井さんまた明日ー、チョコありがとね」
「ああ、また明日」
　オレンジ色に山道に続く階段に腰かけ、去って行く不破達に手を振る。ふと横に置いた鞄を見た。
「あと一つか……」
　中には一つだけチョコレートの包みがあった。最後の一つだ。さてどうしようか。親しい人にはほぼ全員渡した。寺坂に渡したら酷く驚かれたのを思い出すと今でも少し腹が立つが、その後は普通に受け取ってくれたのでよしとしよう。
「あと渡していないのはカルマくらいだ」
　チョコレートの包みを手に取って眺める。なんだかんだ言って彼には本当に世話になったと思う。直接助けられたわけではないが、彼の言葉はいつも私を動かす切っ掛けになった。
「ま、今頃中村と一緒にあかりをおちょくっているんだろうけど」
　帰り際、初めての夫婦喧嘩と称して渚との口論の動画を見せつけか

らかっていたのは記憶に新しい。まあ、ああ見えて面倒見の良い二人のことだからサポートしてくれるだろう。むしろあかりのほうが折れてしまわないか心配だ。
「今日は絶対からかってくると思ったんだけどな……」
一人呟く。あいつがこんなイベントを前にして私をからかわないわけがない。そう思っていたのだが、予想に反してカルマは至極いつも通りだった。別にからかってほしいと思っているわけではないが、身構えていただけあって拍子抜けしてしまったのは否めない。
「そう言えば、私あいつのことあんまり知らないんだな」
友人だとは思っているが、いつもあかりや渚と一緒で彼個人と話すというのはあまりない。親がインドかぶれということと甘い物が好きということくらいしかプライベートに関することは知らないのだ。
「向こうは私のことどう思ってるんだろ」
私は友人だと思っているが、もし向こうがただのクラスメイトとしか思っていなかったらと想像すると、理由はわからないが凄く嫌だった。流石にそこまで酷い認識はされていないだろうが、良くてからいかいがいのある友人といった認識だろうな。
「コート、暖かったな……」
羽織ったコートの襟を両手で引き寄せる。あの冬の夜、私の肩に掛けられたコートの暖かさを思い出した。地雷で吹き飛ばされボロボロだった私、シャツはとうの昔に襤褸切れで、痛くて寒くて……そしてなによりも寂しかった。
「酷いこと言っちゃった」
あの時は意地を張っていたせいで酷い対応をしてしまったが、本音を言えば泣きそうになるほど嬉しかった。もし彼が引き止めてくれなかったら、私はきっと誰にも助けを求められず、家に帰り独りぼっちで泣きながら傷の手当てをしていただろう。孤独で惨めだった昔のように。
「こんなチョコ一つじゃ足りないよ……」
感謝の気持ちも、謝罪の気持ちも、こんなビニールに包まれたチョコレートの包み程度では到底足りない。私が今ここにいるのは本当

に色々な人のお陰だ。まったくここには恩人が多すぎる。
「そう言えば岡島はチョコレート貰えたのだろうか」
皆が帰っていくなか、彼は相変わらず挙動不審のままだった。あの様子ではきっと誰にも貰っていないのだろう。今朝見た時は随分と浮ついていたので相当に期待していたに違いない。彼に関しては日ごろの行いのせいもあるだろうが、少しだけ可哀想だ。
「待ってろよ!! 終わらん!! このままでは終わらんぞぉ!!」
「ん?」
振り返る。噂をすればなんとやら、玄関から凄まじい顔の岡島が出てきた。どう言えばいいのだろうが、筆舌に尽くしがたい表情をしている。本当に誰にも貰えなかったらしい。おかしいな、陽菜乃達はクラスの全員に配っていたはずなのだが……
「おい臼井! 俺宛てのチョコ隠した奴知らねえか!?」
「……いや」
「そ、そんなはずがねえ! 絶対あるはずなんだ!! 畜生、俺はこんな結果認めねえぞ!!」
文字通り血の涙を流して山の中に入っていこうとする。流石にちょっと可哀想になってきたなあ。陽菜乃たちも悪気があったわけではないだろうが、多分素で忘れてしまったのだろう。仕方ないな。
「おい岡島!」
「なんだ臼井! 俺は今忙し――」
最後のチョコレートを彼に放り投げる。放物線を描いて飛んでいった包みはすんなりと彼の手の中に収まった。
「う、臼井……こ、これって……」
「自分で食べようと思ったものだが、君にやるよ」
嘘だ。本当はカルマにあげる予定のものだったが、それを彼に面と向かって言うのは恥ずかしい。当たり障りのない理由でごまかしておく。何故恥ずかしいと思ったのかはよくわからない。
「……」
こうして遂にチョコレートを貰った岡島なのだが、何故だかさっきから人形のように動かなかった。と、思ったら今度は振動しだした。

こいつ大丈夫か？
「……あ」
「あ？」
「あ゛り゛か゛と゛よ゛ぉぉぉ!!!」
それは狂喜だった。鼻水と涙でぐちゃぐちゃになった顔でこちらに抱き着きそうな勢いで詰め寄って来る。流石にそれは嫌なので立ち上がり回避。
「臼井、お前ほんといい奴だなぁ!! ずっとスカート短いわりに大股で歩いててパンツ見えそうって思っててごめんよぉぉ!!」
「あ、うん」
こいつずっとそんなこと考えてたのか……。いや、まあ岡島に限って言えば平常運転だから驚きはしないが。早くもチョコレートをあげたことを後悔してきた。そんな彼はチョコを貰ったことが余程嬉しいのか天に掲げて飛んだり跳ねたりして非常に鬱陶しい。
「じゃあな臼井！ いやっほぉおおう!!」
そして私に礼を言うとそのまま奇声を上げながら走っていった。なんというか、ちょっとしか話していないのにどっと疲れた気がする。喜んでもらえたのは嬉しいが明日から彼の近くを歩く時は足元に注意しておこう。
「はぁ……やってしまった」
あまりにも不憫だったとはいえ本来カルマに渡す予定だったチョコレートを渡してしまった。皆に渡して彼にだけ渡さないというのは私の信条に反する。家に材料の余りがあるはずなので明日改めて渡そうか。
「あれ、さっちゃんさん、何してんの？」
「ほんとだ、どうしたの祥子？」
振り向く。玄関から出た渚が私を不思議そうに見ていた。そしてその隣には頬を赤く染めて恥ずかしそうで嬉しそうなあかり。しかも何故か腕を組んでいる。いや、組んでいるというよりはあかりが渚の腕を一方的に握っていると表現したほうがいい。
「ちょっと野暮用でな。まあもう終わったんだが」

終わったというか、終わらせざるを得ないといったほうが正しい。このままここにいても仕方がないので私も帰るとしよう。
「ていうかあかりは何故渚の腕を掴んでいるんだ？」
その言葉にはっとしたように自分の手を見て飛びのくあかり。どうやら無意識だったらしい。雰囲気を見る限りどうやらチョコレートはちゃんと渡せたのだろう。
「えっ!? ご、ごめん渚！」
「あ、うん。でも別に嫌じゃないよ」
「そ、そうなんだ……」
これから一緒に二人で帰るといったところだろう。ここでついていったら二人に悪いな。あかりもチラチラと私に目配せしてきている。ここはあかりを立てておこう。
「あ、よかったらさっちゃんさんも一緒に――」
「いや、殺せんせーに進路で聞きたいこと思い出したからしばらく残るよ。悪いが二人で帰ってくれ」
「うん？ そうなんだ、じゃあしょうがないね。殺せんせーならまだ校庭のほうの木の上にいると思うよ」
というか渚はよくこの状況で私を誘おうと思えるな。他人の感情には敏感な割には自分に向けられる感情には鈍感らしい。これはあかりも苦労するだろうな。
「二人とも、また明日」
「また明日。じゃあ帰ろっか茅野、じゃなかったあかり」
「うん、いこっか渚。またね祥子……あとありがと」
手を振りながら二人を見送る。いつもと大して距離感は変わらないというのに、何故だか今朝よりもずっと距離が縮まった気がする。
「あれ？ 今渚あかりって呼んでいたような……」
まあいいか。あかりの名前を呼んでいたのは私だけだったので、彼女の本当の名前を呼んでくれる人が増えるのはいいことだ。二人の仲が順調に進んでいるようで安心する。ずっと自分を殺し続けていたのだ。あかりにはもっと自由に生きてほしい。
「さて、私も帰るかな」

「あれ、臼井さんじゃん」
　またか。私はやれやれと思いながら後ろを振り返った。案の定チョコレートを渡そうと思っていたカルマがいつものように煮オレジュース飲みながら私を見ていた。中村は一緒ではないのだろうか。
「一人で何してんの？」
「いや、ちょっとな。それよりも渚とあかりはどうだったんだ？」
　君を待っていたというわけにもいかない。そんなことを言ってしまえばこいつがどんな顔をするか簡単に想像がつく。
「名前呼びまでは行ったんだけどねえ。肝心の茅野ちゃんが途中でヘタレちゃってさ。せっかくくっつけて弄り倒そうと思ったのに」
　相変わらず魂胆が厭らしい。善意も含まれているのだろうが、こいつの場合は七割以上が悪意でも驚かない。まあ流石にそんなことはないだろうけれど。
「まあ、あかりは渚に関しては私以上にポンコツになるからな」
「それ自分で言う？　まあ渚も満更じゃなさそうだし、あの調子なら来年くらいには付き合ってんじゃない？」
「私もそうなることを祈ってるよ」
　不意に先ほど岡島に渡してしまったチョコレートを思い出す。このまま帰ろうと思っていたのに悩みの張本人が現れてしまい少々混乱している。
「そう言えば中村はどうしたんだ？」
「中村は殺せんせーと進路の話したいらしくて残るみたいだよ」
　つまり彼は今一人。そう思うと何故だか妙に緊張してしまう。これはどうするべきなのだろうか。このまま彼が帰るのを見送るか、それとも……
「ん？　どうしたの臼井さん」
　この時の私は緊張によるものかチョコレートのことばかり考えて視野が狭くなっていたのか、少々頭が混乱していた。だからだろうか口が非常に軽くなっていた。
　つまり何が言いたいのかと言うと。
「じゃ、じゃあよかったらこれから一緒に付き合ってくれないか？」

こんならしくないことを言ってしまうのも何もおかしくはなかったということである。

周囲から漂うコーヒーと甘い匂い。視界の端では店員が忙しなく接客を行っている。現状から気を紛らわすために店員のテーブルを片づける動きに意識を集中させる。なるほど、効率的な動き方だな。
「おーい、どこ見てんの臼井さん」
「へ？」
急に視界の前で手を振られ我に返る。現実に戻り前を見ればテーブルの向かいにカルマが座って私を不思議そうに見ていた。
「い、いやなんでもない」
「ふーん、ていうか臼井さんがこんなとこに誘ってくるなんて超意外なんだけど」
「私も驚いている」
私達は現在何故か駅前の喫茶店で一緒に注文を待っていた。何故かというか私が誘ったからなのだが、本当に私は何故あの時あんなことを言ってしまったのだろうか。
「何それ、変なの」
「あ、あれだ。君にも色々世話になっているからな！　そのお礼といったところだ」
「お礼なら普通にチョコレートでも渡せばいいじゃん」
「しょーがないだろ！　岡島に渡してしまったんだよ!!」
周囲の客が私の声に反応して一斉に振り向く。やってしまった。顔が熱くなりテーブルに突っ伏す。早く注文したチョコレートケーキこないかあ……。というかカルマ笑うな。
「岡島にってことは、もしかして俺にもチョコ作ってくれてたの？」
「ああ……けれどタイミングが掴めなくてさ。言っておくがそう言う意味じゃないからな」
「へぇー、そうなんだ……」
テーブルに突っ伏したまま彼とやり取りする。やっぱり慣れない

ことはするものじゃない。以前にも磯貝と似たような状況で話したことがあるが、あの時とは過程が違い過ぎる。
しかも、よくよく考えてみれば私がこうして男子と二人きりでどこかに行くのなんて初めてだ。女子ならあかりや陽菜乃と何度もこうして店に寄ったことがあるが男子、しかもよりにもよってカルマとなんて想定外にもほどがある。
「ていうかなんで俺に渡してくれなかったの？」
「いや、岡島があまりにも不憫でな」
「あはは、臼井さんらしいや」
カルマは何が面白いのか軽く笑った。なんだ私らしいって、彼の中での私に対しての認識が気になるところだが、それを聞くのは怖いので止めておく。
「そういや何気に臼井さんと二人きりって初めてじゃね。いつも渚とか茅野ちゃんが一緒だよね」
「確かに、君と話すようになったのは渚経由だからな」
「渚って意外とコミュ力高いからねえ」
渚というか皆はよく当時の私に話しかけようと思ったものだ。明らかに目つきが堅気じゃなくて素性を一切語らない怪しい奴なんか普通信用しないと思うのだがな。まあだからこそ今の私がいるのだから感謝しかないが。
「あ、注文きたよ」
と、そんな昔のことに思いを馳せていると注文した二人分のコーヒーとチョコレートケーキがやってきた。前にあかりと行った時は美味しかったのでこのケーキもきっと美味しいだろう。
「うん、早速食べるとしよう」
しかしまずはコーヒーからだ。カップを傾け濃褐色の液体を啜る。冷え切った身体に温かいコーヒーが染みる。
「美味しい……」
苦みと酸味のバランスが素晴らしい。理事長と出会った喫茶店のほうが美味いが、ここも悪くはない。
「臼井さんコーヒーブラックで飲むんだ」

「飲み物に関してはあまり甘いのは好きじゃないんだ。そういう君は随分と砂糖とミルクを入れるんだな」
「まあね、俺甘いの好きだし」
　砂糖壺とミルクピッチャーから結構な量を入れてスプーンでかき混ぜている。伊達に毎日のように甘ったるそうな煮オレジュースを飲んでいるわけではないらしい。
「私も酒に関しては甘いのが好きなんだがな……あ、すまない、今のは忘れてくれ」
　もう飲んではいないが、友人の前で飲酒の話をするのはあまり褒められたものではない。そんなことを考えながらケーキを頬張る。ラム酒を使っているのだろう。皮肉なものだがとても上品で美味しい。
「へぇ……臼井さんやっぱ酒飲むんだ」
　どうしてか普段よりも一段と声が低い。怖いとは思わないが困惑する。
「言っておくが昔の話だからな。ん、やっぱ？」
「結構飲んでたんでしょ？　一学期のころたまに酒臭かったし」
「え、気付いてたの？」
　肯定するように頷く。意外すぎる事実、まさかあかりだけではなくカルマにまで感づかれていたなんて……匂いには気を付けていたはずなんだがな。自分で気が付かなかっただけで臭っていたのだろうか。
「そりゃ毎日隣にいたんから気が付くに決まってるじゃん」
「普通気が付かないだろ。けどそうだったのか……ああ、少し前までは浴びるように飲んでたよ。そうでもしないと心が壊れそうだったんだ」
　改めて思い返してみることでわかる当時の異常な生活。いつ身体を壊してもおかしくなかった。私の日常は薄氷の上で成り立っていたと言っても過言ではない。
「まあ、あかりに見つかってこっ酷く怒られて止めたよ」
「それがいいよ。臼井さんに酒なんか似合わないし」
「自分で言うのも何だが結構様になっていたと思うんだがな」

その言葉に彼はどこか優し気な笑みで首を振って否定した。知り合って一年になるが、今まで見たこともない優し気な顔だった。
「……臼井さんは今みたいにケーキ食べて笑ってるほうが全然似合ってるよ」
「そ、そうだな」
12月の一件の時、煙草を握り潰されたことを思い出す。ああいう感情的な行動を取るほどには心配されていたらしい。悪いことをしてしまったな。
「ああ、そうだ。君にはあまり関係ないが少し前に銃を捨てたよ。綺麗さっぱりね」
「ほんと？　よかったじゃん」
口調こそぶっきらぼうだったが、純粋に喜んでくれているのが表情からわかった。彼にも心配ばかりかけていたからようやく安心させられたと思うと喜びが込み上げてくる。
「君のお陰でもあるんだぞ」
「俺？」
「君があの夜コートを貸して引き止めてくれたから、暗殺サバイバルゲームで凛香に指示を出して私を殺してくれたから、私は八年の過去に踏ん切りがついたんだ」
多分決定的だったのは凛香との対決だ。あの件で私の中にいた兵士は完全に殺されてしまった。つまり間接的ではあるが、私を殺してくれたのはカルマのようなものだ。もしあれがなかったら、私はきっと今も過去に縋っていただろう。
「あの夜は酷いことを言ってごめん。本当はコートを肩に掛けてくれて凄い嬉しかったんだ。君はいつものように優しくしただけなんだろうけど、それでも私は泣きたくなるくらい嬉しかったんだよ」
だから本当にありがとう。そう言って頭を下げる。私の思いがけない姿に面食らったのか、目を見開いてこちらを凝視していた。
「まあ今更言われても困るよね……」
「……別に、ちゃんと言えたんだからそれでいいじゃない？　少なくとも俺には伝わったよ」

「そう言ってくれると嬉しいよ」
自然と笑顔になる。言いたいことは全て伝えた。バレンタインデーなんて意味がわからなかったけれど、私は切っ掛けになったこの日に感謝したい。
「私ばかり話してすまなかったな。せっかく君が付き合ってくれているのに」
「君……」
「どうした？」
私の何かが癪に障ったのか、彼は頬づえをついて私を見つめていた。口元はいつも通り笑顔だが目が笑っていない。
「俺は臼井さんのことちゃんと臼井さんって呼んでるのに、臼井さんは俺のこと名前で呼んでくれないよね。いつも君とかそんなのばっかり」
言われてみれば渚やあかりに比べれば名前で呼ぶ回数はずっと少ない。学園際の時も桃花に言われたが全部君ですませるのは私の悪い癖だな。
「ごめん、気を付けるよカルマ」
「別に怒ってるわけじゃないからあんまり気にしないでいいよ。さっきからずっと君ってしか呼ばないから気になっただけで」
まあずっと君君言われたら気にもなるか。三人以上なら呼び分けなければならないので名前呼びも多くなるが、二人きりだとその必要もない。殺せんせーに国語の勉強が必要だと言われたのはこういうのもあるのだろう。
「面目ない。まだまだ昔の話し方が抜けなくてな。もう少し女らしい話し方ができればいいんだが……」
「ま、俺は臼井さんの話し方結構好きだけどね。他にそんな面白い話し方する女子見たことないし」
「面白い話し方って……カルマは本当にぶれないな」
「臼井さんはブレブレだけどね」
「あはは、それは確かに否定できない」
二人きりだとどうなるかと思ったが、案外話が弾む。お互いに性格

を把握しているというのもあるが、それ以上に彼が私に合わせてくれているのだろう。カルマとは住む世界が真逆と言ってもいい愛美が懐くのも頷ける。いつもはふざけきっているが、彼の本質はとても優しいのだ。
「それにしても臼井さんって意外と勇気あるよねえ。バレンタインデーに二人っきりでお茶に誘うなんて」
「ん？　大切な友人に礼をしたいと思うのはそんなにおかしなことなのだろうか」
「あー、うん……やっぱ臼井さんは臼井さんか」
　私の言葉に一瞬呆気に取られると納得したように溜息をついた。前にも似たような反応をされた経験がある。確かに何も知らない人間が見れば私達はそういう関係に見えないこともないのかもしれないが、実際は違うのだからどうでもいいことだ。
「そう言えば臼井さんは茅野ちゃんと同じ高校行くんでしょ？」
「ああ、君は椚ヶ丘に入りなおすんだったか」
「うん、だって俺と張り合える奴なんて椚ヶ丘にしかいないし」
　多分浅野のことだろう。彼くらいしか思いつかない。こういうのを見るたびに彼が男だということを再認識する。私とはやはり違う生き物だ。
「でも、臼井さんもいたらもっと面白かったんだろうなー。臼井さんの成績なら俺らと同じクラスになっただろうし」
「君と浅野か……確かに悪くはないだろうが、酷く疲れそうだ」
　どうせ浅野は速攻で高校を支配下に治めるだろうから、私とカルマは孤立とまではいかないがそれなりに肩身の狭い思いをするだろう。まあ賞金を懸けられた時に比べればどうということはないか。
「それ本人の前で言っちゃう？」
「言うよ。どうせ椚ヶ丘に残ったところでカルマはことあるごとにちょっかいを掛けるんだろ？　もうわかっているんだ」
「まあね、臼井さん弄ると面白いし」
「はいはい、どうせ私は君の玩具ですよ」
　不貞腐れてケーキを食べ進める。まあ、実を言うとこうして彼と

じゃれあうのは楽しかったりするのだが、それをこいつに言うと増長するに決まっているので絶対に言わない。
「でも、それももうすぐ終わりだな……」
「え、何？　もしかして寂しいとか思ってくれてるの？」
　何気なく呟いた一言に目ざとく反応しニヤニヤとこちらを覗き込む。本当にこいつはムカつくくらいぶれないな。でも、この期に及んで意地を張るのも意味はないか……
「……そうだよ寂しいよ！　ほんとはもっと一緒にいたいよ悪いか！」
「あはは、やっぱそうなんだ」
　案の定こいつは言質を取ったと思っているのか、微笑ましいものを見るように笑うだけだった。自然と頬に熱が籠っていく。畜生、だから言いたくなかったんだ。
「いつも思うけど臼井さんって俺らのことほんと好きだよね」
「だってしょうがないじゃん。生まれて初めてなんだよ。友達ができたのなんて。たった一年だったけど、本当に楽しかったんだよ……」
　コーヒーを一口飲み窓から街を眺める。そろそろケーキも食べ終わるころだ。この楽しい時間も終わらせなければならない。
「……俺も臼井さん、達のこと好きだよ。二年まではみんな俺にビビッて近寄ってこなかったし」
「それは自業自得じゃないか？」
　詳しくは知らないが、喧嘩っ早いのは見ていればすぐにでもわかる。理由はなんであれ暴力を振るう人間が疎まれるのは必然だ。
「別に誰彼構わず喧嘩吹っ掛けてたわけじゃないんだけどねー」
「関係ないさ、どんな理由があったとしても暴力を肯定していい理由にはならない」
「臼井さんって、そういうところだけは凄い大人だよね」
「大人になるしかなかったんだよ。あと最後の言葉は余計だ」
「１４歳」
「……」
　そこでそれを引き合いに出すのは卑怯だろ。畜生、自分の本当の年

齢が恨めしい。というかこいつだって先々月15歳になったばかりだろうが。
「まあまあそんな怒らないでよ。俺のケーキ一口あげるからさ」
「……仕方ないな、それで手打ちにしてあげようじゃないか」
いつの間にか半分ほどになっていたカルマのケーキをフォークできり分け口に運ぶ。ささやかな仕返しに気持ち多めに持っていく。
「あれ、それ一応俺の食べかけなんだけど……反応薄くね？」
「そうだな、それがどうかしたのか？」
「別に、なんでもない……」
呆気に取られるカルマに少しだけいい気分になる。意味が分からないが、どうせからかおうとしたのだろう、ざまあみろだ。それにしてもこのケーキ美味しいな。こっちも頼むべきだったか。
「というかさっきから私ばかり話してるじゃないか。不公平だぞ、カルマも自分のこと話せ」
「え？　じゃあこの前寺坂に――」
こうして、楽しい時間は過ぎていった。話は弾み自分でも驚くほど有意義な時間を過ごせたと思う。カルマがどう思っていたかはわからないが、きっと向こうも楽しいと思ってくれたと思う。

「あ、もうこんな時間じゃん」
空の色がオレンジからダークブルーに変わる頃。カルマが携帯電話を見て呟いた。私もつられて腕時計を見る。あれからかなり時間が経っていた。楽しいと時間が経つのが早いというが、本当にその通りだ。
「お開きだな。代金は私が支払っておくよ。一応バレンタインだからな」
「そうやって無駄遣いしてたらまた茅野ちゃんに叱られるんじゃない？」
「今回は無駄遣いじゃないからいいのだ。もしまた奢ってほしかったら来年も私に恩を売っておくことだな！　はっはっは」

笑ってごまかす。本当はこんなものでは恩など返せはしない。けれど、これ以上のものを差し出そうとしてもカルマはきっと受け取ってはくれないだろう。
「そっか、じゃあまた貸し作っとかないけないじゃん。俺臼井さんと話するの好きだし」
「はっはっは……え？」
今何か凄いこと言われたような。また貸しを作っておく、それって来年もこんなことをするつもりなのだろうか……
「じゃあねえ、臼井さん。また明日」
「あ……うん」
そうこうしているうちにカルマは手を振って去って行った。来た時よりも静かになった店内。一人残された私は彼のいなくなった座席を眺めて溜息を吐いた。また明日になったら会えるというのに、何故だか帰ってしまったことが酷く寂しい。
「なんだこれは……」
随分と長く話していたはずなのに、もっと話がしたかった。そんな不思議な感情に見舞われる。あかりや陽菜乃と別れる時に似ているが何か微妙に違う気がする。
「ま、いっか。私も帰ろう……あれ？」
立ち上がりコートを羽織って伝票を回収しようとしたのだが、伝票差しに入っているはずの伝票がなかった。今の今まで視界の端にあったはずなのだが……
いや、一人だけ心当たりがある。
「カルマの奴、奢りだって言ったじゃないか……」
これじゃあお礼にならないだろうに。いつもからかってくる癖にこんな時だけ気を使うなよ。本当に調子のいい男だ。
「ふふっ、また明日か」
毎日交わしている言葉のはずなのに、何故だかいつもと違って聞こえる。面白いわけでも楽しいわけでもないのに、自然と笑みが零れる。初めて経験する感情だが、これは中々どうして悪くない。
「すいません、注文お願いします」

コーヒーでも頼もう。口の中が甘ったるい、きっとさっきのケーキが残っているからだ。

放課後　カルマの時間（1）

初めはただのクラスメイトだった。延々と続く戦場の光景に一瞬だけ紛れ込んだ赤色。赤なんて好きじゃない。目立つし、何より血を思い出す。

でも、あいつの赤い髪は嫌いになれなかった。

それはあの騒々しい教室を卒業してから少し経ってからのこと。殺せんせー絡みの騒動に一段落がつき、ようやく落ち着いて高校生活を楽しみ始めた五月のことであった。

カルマから一通のメッセージが届いた。ホワイトデーのお返しがしたいから付き合ってくれ、文面にはそう記されていた。ホワイトデー、日本ではバレンタインデーのお返しにそういう風習があるらしい。

だがホワイトデーの3月14日はとっくの昔にすぎてるしそもそも奢ったのは彼じゃないか。そう思ったが、反論して彼の好意に水を差したくなかったので私は二つ返事で了承した。

多分、それがきっかけだったのだろう。今ではそう思う。

「流石にまだ来ないよね」

私は腕時計を眺めて一人ごちた。駅から流れ出る人混みの喧騒に私の呟きが吸い込まれていく。今日は休日、カルマと予め決めていた待ち合わせ場所で私は彼がやってくるのを待っていた。

「はぁ、この格好派手すぎるぞ」

自身の服装を一瞥して羞恥心の混じった深い溜息を吐く。紺のクロスニットのオフショルダーに白のフレアスカート、足元はヒールサンダルで固めている。これだけでも十分派手なのに、薄く化粧まで施され爪にはマニキュアとかいう塗料まで塗っている始末だ。

「気合入れ過ぎだって、お姉ちゃん……」

勿論自分の意思ではない。私はあの最近黒髪になった姉を思い出して顔をしかめた。先日、件の話をあかりに話したところ何故かテンションが振り切れたあかりにあれやこれやとやられたせいだ。
「デートじゃないって言ったんだけどなあ……」
何度もデートじゃないと言ったのに知ったことかと言わんばかりに慣れた手つきでメイクを施しいつかの罰ゲームのように女の子らしくすることを強要された。お洒落をするのは嫌いじゃないが、これは流石に恥ずかしい。
「引いたりしないといいんだけど……」
携帯電話で顔を映しながら髪を弄る。いつも通りなのはポニーテールとネックレスだけだ。こんな格好で来られて彼が困ったりしないか不安だ。
「あと十五分か、やっぱり早く――」
「……もしかして、臼井さん？」
聞き慣れた声がして慌てて携帯電話から目を離す。そこには珍しく目を丸くしたカルマが私を見つめていた。
「一年も一緒だったクラスメイトを忘れるなんて、随分と酷いんじゃないか？」
「なんだ、やっぱり臼井さんか。久しぶり」
相変わらず失礼な物言いに思わず半目で睨みつける。カルマは思うところがあったのか頬を少し赤くさせてバツが悪そうに頭を掻いた。
「なんだとはなんだ」
「……ごめん、臼井さんがあんまりにも可愛い恰好してるからさ」
「ん？　可愛い……あっ」
彼の言葉で私はようやく自分が今どんな格好をしているかを思い出した。ベルトリンクを撃ち切った機関銃のバレルのように顔に熱が籠る。傍から見れば私の顔はきっとリンゴのように真っ赤になっていることだろう。
畜生、恥ずかしくて仕方がない……
「こ、これはだな！　あかりが無理やり着せたのであって私が選んだ

んじゃないからな！　私だってわかってるんだ！　こんな格好似合わないっ――」
「臼井さん」
「な、なんだ？」
　名前を呼ばれしっちゃかめっちゃかになっていた感情が落ち着きを取り戻す。改めてカルマの顔を見つめればいつもよりも少しだけ優し気な笑みを浮かべた彼が私を見ていた。
「服すげー似合ってる。可愛いと思う」
「……あ、ありがとう」
　こうはっきりと言われてしまえば最早何も言えはしない。蒸気が抜けるように顔に籠っていた熱が霧散していく。消えていく羞恥心の代わりに込み上げてくるのは喜びの感情。
「そうか……可愛い、か」
　俯き自分の抱いた感情に戸惑う。あかりや陽菜乃に褒められた時とは全く違う。彼の可愛いという言葉がいつまでも脳内でリフレインする。こんな感情は生まれて初めてだ。なんだこれは……
「臼井さーん？」
「……ひゃ!?」
　私の視界にカルマの顔のドアップが映りこんだ。思考の海に潜っていた私は思わず変な声を上げて飛び跳ねる。駄目だ。彼に会ってから調子がおかしい。カルマはそんな私のリアクションが面白かったのか、からからと笑った。
「大丈夫？　俯いてたけど」
「いや、少しぼうっとしていただけだ。そ、それよりもだな」
　褒められっぱなしは性に合わない。改めてカルマの服装を観察する。シンプルな紺のジャケットに白のデニムが映え……あれ？
「な、なあカルマ、一つ言いたいことがあるんだが」
「……奇遇だね、俺も言いたいことあるんだけど」
　眉がひくつく。彼の瞼も同じようにひくついていた。言いたいことはもうわかっている。二人で同時に溜息をつく。そして同じように眉を顰め、同じように頭を抱え、同じように口を開いた。

「「被った……」」
服の種類こそ違うが色合いが全く一緒だった。予想外にもほどがある。まさかここまで完璧に被るなんて……
「ペアルックとか痛いカップルじゃないんだからさあ」
そこまで知識があるわけではないが、男女で同じ服を着て街を練り歩くのは恥ずかしい行為ということくらいは知っている。でも言葉にしなくていいだろうが、せっかく考えないようにしてたのに……
「想像させないでくれ……あとこういうのはシミラールックって言うんだぞ。雑誌で読んだ」
「知らないし、どうでもいいし」
うん、確かにどうでもいいことだな。私達の会話はそこで途切れた。喧騒の中で二人で見つめ合う。そうすると今までのやり取りが急に馬鹿らしくなって、私達は同時に噴き出した。
「「あはははは!!」」
別に面白いわけでもないけれど、何故かわからないが笑いが止まらない。行きかう人々が奇異の視線も無視して二人で笑い続ける。なんか、こういうの楽しいな。
「あーあ、面白かった。なんか久しぶりに本気で笑ったわ」
「私もここまで笑ったのは久しぶりだよ。ペアルックって！」
笑い過ぎたせいで滲んできた涙を拭い余韻を楽しむ。やっぱり彼と話すのは楽しい。久しぶりの友人との再会ということもあったのだろう。私は今こうしているのがとても楽しかった。
「でも、俺は別にいいけどね」
「ん？　何か言ったか？」
「聞き間違いじゃない？　それよりも時間勿体ないしもう行こうよ」
「それもそうだな」
何かごまかされた気がしなくもないが、どうせ大したことではないのだろう。カルマはごく自然な動作で私の手を繋ぐと歩き出した。いや、まてよ。あんまりにもスムーズに繋いできたせいで流してしまったが私は今彼と手を繋いでいるのか……
「か、カルマ、その……」

「何？　臼井さん」
「て、手が……」
「手を繋いでるのがどうかしたの？」
　あれ、そういう反応なのか。私が知らないだけで仲がよかったら男女でも手を繋いだりするのだろうか。まあ別に不快でもないし、彼と手を繋ぐのは吝かではないが、初めて見るカルマの一面に戸惑いを隠せない。
「なーんてね、仕返し成功」
　困惑する私を余所に彼は悪戯が成功した子供のように笑いながらそう言った。その顔は年相応の幼さがあり、私は少しだけ可愛いと思ってしまったのであった。というか仕返しってなんだ？
「わかばパークで臼井さん俺に身体押し付けてたじゃん。だからその時の仕返し」
「そういえばそんなこともあったような……」
　あれは楽しかったな。また暇がある時にカルマでも誘って遊びに行こう。ノリが良くて案外面倒見がいいし子供受けしそうだ。
「もう雪村ちゃんから言われてるだろうけど、そういうの気軽にしないほうがいいよ。勘違いする奴もいるだろうし」
　勘違い、度々言われる言葉だ。ビッチ先生からも似たような言葉を貰った記憶がある。彼女達曰く私は色々と無防備だそうだ。私以上に警戒心の塊の人間なんてそうはいないと思うのだが、どうにもそう見えるらしい。
　私はそこまで考えて、ふと変な疑問が頭を過った。
「カルマも、勘違いするのか？」
　思わず口にしてしまった言葉にカルマが黙り込む。いや、私は何を言っているんだ。勘違いするわけないだろう。そう思って茶化そうとしたその時だった。
「……秘密。なんかムカつくから教えない」
「いや秘密ってなんだ。気になるだろ！　教えてくれたっていいじゃないか」
「やだ絶対教えない」

腕を掴んで揺らしても暗殺で鍛えられた体幹のお陰でびくともしない。本気で揺らせば話は別だろうが本気で聞きたいわけでもない。いわばじゃれているようなものだ。
「というか今日は一応バレンタインデーのお返しってことなんだよな」
「まあ、一応ね」
「おかしくないか？　そもそもあれは君が勝手に会計を済ましてしまったから私は何も贈れてないんだけど」
　お礼を言うことはできたので目的は達成できたと言ってもいいくらいだが、カルマが変に気を回したせいで肝心の贈り物はできなかった。
「ん？　なんのこと？」
「また惚けて……」
　貸し借りはきちんとしておきたい私にとって彼の態度は度が過ぎる。抗議の意思を込めて睨みつけると流石に気付いたのかうなじを掻きながら口を開いた。
「ごめんごめん、ホワイトデー云々っていうはただの口実」
「口実？」
「そ、ほんとは俺が臼井さんと遊びたかっただけ」
　目を見る。綺麗な琥珀色の瞳だ。嘘を言っている目ではない。多分本当に私と遊びたかったのだろう。何故私なんかと遊びたいと思ったのかはわからないが、とにかくそういうことらしい。
「そういうのじゃ駄目？」
「まあ、そういうことなら……」
　でもお礼でも、ましてやデートでもない。そう思うと少しだけ、本当に少しだけ嫌だった。
「……なんだこれは」
「ん？　どうしたの？」
「いや、なんでもない」
　首を振って今抱いた謎の感情を打ち消す。今日の私は何かがおかしい。きっと慣れないことをしているから戸惑っているだけだ。そ

うに決まっている。
「確か映画館だったよな、早く行こう！」
「ちょ、臼井さん！」
手を繋ぎ走り出す。走っていればこの初めての感情もどこかに行ってしまうだろう。流れていく景色と右手に感じる彼の掌。大きくて温かくて、どうしようもなく男の手だった。
もっと繋いでいたい。そう思ったのは多分気のせいだ。

「ここが本当の映画館か……」
溢れ出る好奇心を隠そうともせず周囲を見続ける。壁に張られたいくつものポスター、設置されたテレビから流れる映画の予告。ポップコーンやジュースの甘い匂い。行きかう大量の人々。
「日曜だからやっぱ人多いね」
カルマがぼやくが、私は初めての映画館に夢中になってしまい話など聞いてなかった。テンションが振り切れた私を見て、周囲の人が怪しげに私を見るがそんなことお構いなしにくるくる回りながら初めての映画館を目に焼き付ける。
冷房が効いている。ちょっと寒いな……
「もしかして臼井さん映画館初めて？」
「ああ、映画館の廃墟で戦ったことはあるけど、そうじゃない映画館に来るのは生まれて初めてなんだ！　ほんとに凄いな、人がいっぱいだ！　全員映画見に来たのかな？」
「そっか、初めてなんだ。じゃあ思い切り楽しまないと」
「うん！」
そうと決まれば話は早い。あれよあれよという間にチケットやポップコーンが用意され後は上映時間を待つだけとなった。戦場暮らしでこういうことに不慣れな私には彼の手慣れた感じがとても頼もしかった。
「はいチケット、ポップコーンは一緒でいいよね」
荷物起きのテーブルに買った物を置いて一段落つく。大した大き

さもないテーブルにお互いに肘をついているせいで顔が凄く近い。
「勿論いいぞ。そうだ。お金払わないと」
「気にしないでいいから、これくらい俺が出すって」
二人分のチケットとお菓子やジュース。私にとっては端金もいいところだが、学生の彼にカルマにとっては決して安い額ではないはずだ。気を使っているのだろうか、だとしたらそれは無用な気遣いだと言わざるを得ない。
「むむ、無駄遣いは良くないぞ」
「お礼だから無駄遣いじゃないのだってね」
「……どっかで聞いたことあるぞ、その台詞」
「さぁねー」
「あ、思い出した。それ私が前に言った台詞じゃないか！」
私が抗議しても彼は楽しそうに笑うだけでまるで手ごたえがない。暖簾に腕押しとかいうのだろうか。腕時計を見る。上映にはまだ少し時間があるな。
「こんな女の子らしい恰好しててもやっぱ臼井さんは臼井さんか」
「どうしたいきなり」
「腕時計が凄いごついってこと」
そう言われてみれば……自分の腕時計を見る。オメガのシーマスター６００、間違ってもこんな格好で着けていく腕時計ではない。
「やはり変か？」
「別に、俺は臼井さんらしくて好きだよ。むしろギャップがあっていいんじゃない？」
「そ、そうか……そう言われたのは初めてだ」
特別愛着があったわけではないけれど、こうやって自分で選んだものを褒められると嬉しく思う。もし今度カルマと遊びに行くことがあったら、その時は服も自分で選んでいこう。
「そういや、高校どうなの？」
「うん、すっごい楽しい。あかりと一緒のクラスにはなれなかったけど友達もできたし毎日が楽しいよ」
私のずっと求めていた生活だ。楽しくない訳がない。でもカルマ

とも一緒だったらもっと楽しかったのだろう、と思うのは我がままがすぎるだろうか。
「そっか、よかったじゃん」
「そういうカルマは？　浅野にちょっかい掛けてないよな」
「あいつがどうやって飲み物噴くか知ってる？」
「……浅野に同情するよ」
　おおかた何か仕込んだのだろう。色々成長したはずなのにこいつのこういうところだけは何も変わらないな。まあ気を許せる相手がいるようで何よりだ。
「あ、そうだ聞いてくれよ。私最近告白というものを体験したんだ」
「……は？」
　私が最近一押し近のニュースを話した途端、今の今まで楽しげだったカルマの表情が一気に曇った。琥珀色の瞳が私を見つめる。その目には隠しようもない嫌悪の色が浮いていた。
「ど、どうしたんだ。目が怖いぞ」
「いいから続けてよ。それでどうしたの？」
「断ったに決まっているだろう。入学してまだ一月ちょっとしか経ってないんだぞ」
　あの時は酷く驚いたのと同時に凄まじい嫌悪感が湧き起ったものだ。私は相手を知らないし、向こうだって私のことなど碌に知らないだろう。それが凄く嫌だった。
「理由を聞いたら可愛いからって言われて、思わずそれだけと言ってしまった。ちょっと悪いことをしたと思う」
「別にいいでしょ。そいつ臼井さんの見た目しか見てないの丸わかりじゃん。振って正解だよ」
「でもなあ、もう少し言い方を気を付けるべきだった」
「いつも思うけど臼井さん気使い過ぎ。寺坂くらい適当でいいと思うよ」
「それはちょっと……」
　流石に彼には悪いがあの適当さは見習いたくはない。でも彼のアドバイスはよく伝わった。少し気にし過ぎだったようだ。まだまだ

見習うべきところは多い。改めてそう思う。
「……それで、そいつどうだったの？」
「どうって？」
「一応臼井さんも女子なんだし、かっこいいとかそういうのあるでしょ」
何故そんなことを聞くのだろうか。ルックスを気にするような性格でもないだろうに。でもそうだな。私は記憶にある彼の顔と今目の前にいるカルマの顔を見比べた。
「君のほうがずっとかっこいいよ」
「え……」
突然のパンチに彼の目が見開く。どうやら驚いているようだ。いつもからかわれてばかりだからな。少しくらい仕返しといこう。
「髪も目も口も鼻も輪郭もスタイルもカルマのほうがずっとずっとかっこいい……って、どうした？」
べた褒め作戦を実行すると、何故か彼がテーブルに顔を突っ伏していた。滅多に見ない彼の姿に驚かせるつもりが逆に驚いてしまった。
「いや、予想以上にドストレートで来たから……」
「友達の容姿を褒めるのが、そんなにおかしなことか？」
「……まー、うん。わかってたけどさ」
何がまあなのかわからないがとにかく仕返しは出来たようだ。テーブルの下で小さくガッツポーズをする。昔みたいにやられっぱなしの私ではないのだ。
と、そこで館内のスピーカーから目当ての映画の上映が始まるとのアナウンスが流れた。どうやらおしゃべりもここまでのようだ。生まれて初めての映画館での映画。とても楽しみだ。
「じゃあいこっか。ポップコーンとジュースは私が持つよ」
「あ、待って臼井さん」
歩き出した私の肩にふいに温かいものがかけられた。この感触は覚えている。忘れもしない12月のあの時と同じ温かさだった。
「その恰好じゃ寒いでしょ。俺のジャケット貸すよ」
先ほどの動揺した様はどこへやら。優し気な笑みで私を見るカル

マ。確かに少しだけ寒いとは思っていたが……
「あ、うん……」
今さっきまで彼が着ていたジャケットはまだ温かさを残している。露出した肩に彼の体温が直に伝わる。人によっては気持ち悪いと感じるのかもしれないが私はこの温かさがとても心地よかった。
「君は寒くないのか？」
「俺は大丈夫。体温は結構高いほうだし」
「そっか……ありがと」
これは一本取られたな。赤くなる頬を見せたくなくて先に歩き出す。やっぱり今日の私はなんだかおかしい。初めての映画館だと言うのに、頭の中にあるのは彼の姿や言葉ばかり。
いったいどうしてしまったというんだ。まあいい、映画でも見ればこの動揺も治まるだろう。きっとそうだ。

「すごかったな、映画！　どかーんってなってびしいってきて!!」
「臼井さん、楽しかったのはわかるけど語彙が幼稚園児レベルになってるからね」
テーブルの向かい側に座ったカルマが少し呆れながら指摘してくる。確かに恥ずかしい言動だというのはわかる。だが理性を上回る興奮が今私を包んでいるのだ。彼には悪いがこの興奮はしばらく治まりそうにない。
「ああもう！　こんなに楽しいならもっと早く行けばよかった！」
「俺も初めて映画館行った時そんな感じだったよ。楽しいよね映画館って」
「うん！　ありがとうカルマ！」
あかりに良い土産話ができた。こんな楽しい時間を提供してくれた彼には感謝しかない。彼と友達になれて私は本当に幸せだ。
「今度面白そうな映画あったらまた誘うよ」
「そうだな。あかりや渚と一緒に行ったらきっと楽しいだろうな！」
「……俺は騒がしいの好きじゃないし二人で行きたいかな」

「そっか、じゃあ二人で行こう！」
　そんな感じで私達が映画の内容についてあれこれ語り合っていると、不意に美味しそうなスパイスの香りが鼻をくすぐる。顔を向ければ店員が料理を持ってきているのが見えた。
　深皿に盛られたカレーと私の顔よりも大きいナンにヨーグルトドリンクを添えた本格的なインド料理。どれも初めてだがとても美味しいそうだ。
「こういうカレーは初めてだな」
「ここ俺の家族の行きつけ。冷めないうちに早く食べようよ」
「そうだな、じゃあ食べるとしよう」
　ナンを適当な大きさにちぎってカレーにつけて口に運ぶ。バターと鶏肉。そして複雑なスパイスの旨味が口いっぱいに広がる。
「カルマ！　これ美味しい！」
「でしょ？」
　そう言ってカルマもクレープのようなものをちぎって緑色のカレーにつけて食べ始める。匂いからしてほうれん草とチーズを使っているのだろう。あっちも美味しそうだ。
「もしかして、これ気になるの？」
「ああ、そういうのは生まれて初めて見る。それもカレーなんだろう？」
「じゃあ一口食べてみる？」
　ニヤリと笑いながらスプーンルーを掬って私の顔に持ってくる。ちょっと下品だが少しくらいなら大丈夫だろう。私は少しだけ身体を起こし差し出されたスプーンを咥えてカレーを食べた。
「想像とはちょっと違ったけどこれも美味しいな！　ん、どうしたんだ」
「いや、別に……」
　何がやっぱなのか知らないがまあいいか。ああ、そうだ。私は自分のカレーをスプーンで掬いカルマがやったように差し出した。自分だけ食べるのも悪いしな。
「はい、どうぞ」

「俺も食べろ的なやつ？　味知ってるからいいよ」
「それは駄目だ。貰いっぱなしは性に合わない」
　貸し借りだけが人間関係ではないとあの教室で学んだが、それでも私の根幹にあるのはギブアンドテイクだ。一方的に与えるだけの関係など健全とは言えない。無償の愛がこの世にないのと同じだ。
「臼井さんはどっちかって言うとあげっぱなしでしょ」
「ん？　なんのことだ」
「……まあいいや、スプーン借りるね」
　差し出したスプーンを掴み取ると彼はすぐに口の中に入れた。同じように食べてくれなくて少しだけ残念だったのはどうでもいいことである。
「ん、やっぱ美味しい」
「よかった。ところで話は変わるがさっきから君が食べてるクレープみたいなものはなんだ？　私の食べているのとは違うみたいだが」
「チャパティのこと？　確かにナンと違って全粒粉だし発酵もさせてないから味も食感も全然違うよ。俺はこっちのほうが好きかな」
　感心する私を余所にカルマは解説を続ける。その顔はどことなく楽しそうだ。彼の楽しそうな顔を見ると私も不思議と楽しい気持ちになって来る。
「日本だとインド人は皆ナン食べてるって思われてるけど、実はナンって高級品なんだよね。どっちかっていうとチャパティのほうがメジャーなんだよ」
　意外な事実だ。てっきり米に相当する食べ物だと思っていたのだが、流石親がインド好きなだけはあって詳しいな。
「なるほど、日本人が毎日寿司を食べていると思われているようなものか」
「そうそう、流石に今時そんなステレオタイプな日本人像抱いてる人なんていないだろうけど」
「……そ、そうだよな」
　言えない、日本に来る前はそう思っていたなんて。だって仕方ないじゃないか、あの時は外国みたいな認識だったのだから。とはいえ自

分がこれから住む国の常識くらい調べておけとあの時の私に言いたい。
「どうしたの臼井さん」
「い、いや、なんでもない」
「ふーん、そうだ。今度うちに来なよ。インド料理作ってあげるから」
「作れるのか！」
「うん、道具もスパイスも一通り揃えてるし、結構自信あるよ」
E組で調理実習をやった時も明らかに手慣れていたし料理は得意なのだろう。両親があまり家に帰ってこないと言っていたのでそのせいもあるのかもしれない。
「是非行かせてくれ。カルマの家か……楽しみだなあ！」
「俺んち変なものばっかりだから多分面白いんじゃない？　ま、それは置いておいて今は食べよっか。冷めたら勿体ないし」
「同感だ。こんな美味しいものを冷めさせてしまったら店の人に失礼だ」
そう言って私達は再び昼食を食べ始めたのであった。その際、店の人にカップルと勘違いされてデザートをサービスされて困惑したのはどうでもいいことである。カルマも否定してくれよ……

「臼井さんってさ、色々凄いよね」
日もすっかり暮れてオレンジ色の西日が椚ヶ丘の街を照らす中、カルマが唐突にそう言った。
「いきなりなんの話だ？」
公園のベンチに腰掛け鯛焼の最後の一かけらを飲みこみ聞き返す。脇には本やぬいぐるみの詰まった紙袋。全て思い出の詰まった大切な物だ。
あれから私たちは時間の許す限り遊び続けた。慣れない高校生活でフラストレーションも溜まっていたのだろう、久しぶりの友人との交流に私は我を忘れてはしゃいだ。
本当に楽しい時間だった。こんな一日を演出してくれたカルマに

は感謝の念を禁じ得ない。またいつか遊びに行きたいものだ。
「殺せんせー助けるために三千万使ったり、雪村ちゃんとの約束守るために地雷原の中突っ込んだり、普通はそこまでできないでしょ」
「そうか？　助けたい人がいて、助けられる手段が手元にあるなら誰だって同じことをするはずだ」
　私にはその選択肢が皆よりも多くあった。ただそれだけのことなのである。もし普通に育っていたら殺せんせーを助けることもあかりを守ることもできなかっただろう。本当に、人生何が役に立つかわからないものだ。
「そう言えるのは臼井さんだからだよ。口ではいくらでも言えるけど、本当にあそこまでやらかした人は俺臼井さんくらいしか知らない」
「やらかしたって……」
　まあ、言い得て妙かもしれない。殺せんせーを助けるためとはいえ完全に犯罪に手を染めてしまったからな。と言っても私の手はとっくの昔に真っ黒ではあるのだが。
「臼井さんは俺がなんでE組に来たか知ってる？」
「確か、暴力事件を起こしたんだっけ」
　詮索していい内容ではないし大して興味もなかったからスルーしていたが、改めて話題に出ると気になる。きっと彼の存在がそれだけ私の中で大きくなっている証拠なのだろう。
「そ、でもなんでそうなったのか知らないでしょ？」
「……教えてくれるのか？」
　カルマはゆっくりと頷いて静かに語り出した。その内容は中々に悲惨なものだった。暴力沙汰を起こしていた彼にも非はあったとはいえ、いつでも味方とまで豪語した教師は都合が悪くなるとあっさりと裏切った。
　初めの頃あれだけ荒れていたのはそういうことが原因だったのだろう。信頼していたはずの教師に裏切られる。いったいどれだけショックだったのだろうか。私には想像ができない。
「それは、酷いな……」

「今思い返せば俺もガキみたいなことしてたって自覚はあるんだけどさ、あの時のこと思い出すと今でも殺したくなるくらいムカつく」
口では物騒なことを言っていてもその瞳はどこか寂しそうだった。いくら普段から飄々とした性格のカルマとは言え、彼だって一人の人間だ。悲しければ泣くし楽しければ笑う。そんなどこにでもいる子供なのだ。
「臼井さんはさ、最後まで雪村ちゃんの味方だったよね。俺らに白い目で睨まれても、殺せんせーのこと裏切っても、地雷で吹き飛ばされて血塗れになっても、最後の最後まで約束を守り続けた」
「そんな大層なことじゃないさ。私はあかりを独りにしたくなかっただけだ」
私の魂を救ってくれた大事な家族が苦しんでいた。例えそれがどれだけ間違っていたとしても、あそこで見捨てる選択肢など私にはありはしなかった。もしもう一度過去に戻ったとしても私は同じように味方になるだろう。
「少なくとも俺には大層なことだったよ。あんなボロボロになってもああ言える臼井さんが凄いかっこよかったし、凄い眩しかった」
初めて聞く彼の本心に私は驚きを隠せなかった。普段私をからかってばかりの彼が、私のことをこんな風に思っていたなんて誰が予想できるだろうか。
「だからこそ意地張ってるのがムカついたんだけどさ」
「……本当に悪かった」
あの時のカルマの言葉にどれだけの意味が込められていたのかを知り、私は過去の自分の行動を恥じた。本当にいくら謝っても謝り足りない。でも謝ったところで彼は喜ばないだろう。だから行動で示すしかないのだ。
「もうしない？」
「うん……」
「そっか……じゃあいいや」
とても優しい「そっか」だった。あかりとは違う、だけど同じかそれ以上の感情が込められた言葉に私の心が満たされていく。とっく

の昔に満たされていると思っていたのだが、いつのまにか私の心の器は大きくなっていたようだ。
もっと優しくしてほしい。不意にそんなことを思った。
「そう言えば、右目大丈夫？」
心配そうに私の目を見つめる。あの時の事を思い出しているのかもしれない。あのカルマがこれだけの顔をするということは、きっと物凄い酷いことになっていたのだろう。
「大丈夫だよ。あの後病院に行ったけど視覚と色覚に異常は一つもなかった。精々医者に視力が良いから大事にしろって言われた程度だ」
測定器の一番小さい記号まで完璧に当てた時は驚かれたものだ。私としてはあれでも余裕だったので本当はもっと小さなものが欲しかったが、流石にそれは無理な相談だろうな。
「本当に大丈夫だよね？　実は見えないとかやめてよ」
言葉の端々から私を気遣う優しさが手に取るようにわかる。いつものふざけた態度が嘘のような真面目さだ。多分こっちが素なのだろう。
「信用ないなあ。でも心配くれてありがとう。君はやはり優しいな」
「あ、今頃気が付いた？」
彼は冗談めかして言うが、彼は本当に優しい人間だ。殺せんせーを殺したいと言ったのだって、それは皆の今までの努力を無意味にしたくなかったからだと思う。
それだけじゃない、ぶっきらぼうに見えて誰よりも誰よりも優しい。それが赤羽カルマという人間だ。
「臼井さん……右目、触ってもいい？」
唐突にカルマが私にそう言った。とても真剣な目だった。
「別に構わないが、何故だ？」
「ちゃんと無事だって確かめたくて。臼井さんそういう嘘だけは得意だし」
つくづく信用がないな。まあ仕方ないと言えば仕方ないか。まあ、触らせるくらいどうということはないし、大人しく彼の望みを叶えることにしよう。

「潰すなよ？」
「いくらなんでもそれは酷くない？」
「ふふ、冗談だよ」
　軽く笑ったあと、腰を回し彼と向き合う。そして彼の瞳を見つめてから私はゆっくりと両目の瞼を瞑った。
「……いいよ」
「じゃあ、触るね」
　彼の指先が頬に触れるのがわかった。温かい手の感覚が頬を伝いこめかみ、そして瞼へと移っていく。
「よかった……ちゃんとある……」
「ああ、先生に感謝しないとな」
　あかりとは違う温かさがとても心地よくて、とても嬉しかった。私の無事を喜んでいくれるのが嬉しくて心と身体が温かくなっていく。
　もっと、この温かさに浸りたい。目を閉じたままの彼の手を掴み、そのまま頬に持っていく。
「ちょ、臼井さん？」
　彼の困惑する声を余所に私は掌の温かさを堪能した。暗く閉じた視界にカルマの手の温かさだけが静かに伝わる。
「温かいなあ……カルマの手は」
　銃や死体の凍てついた感触とは違う。血の通った温かい人の手。大好きな友達の手に触れている。それだけで私の心は多幸感に包まれる。一人じゃないと教えてくれる。
「もう少しだけ、このままでいさせてくれないかな？」
「……俺の手でよかったら好きなだけ」
「そっか、ありがと」
　沈黙、お互いに何も言わず頬に伝わる温かさを噛みしめる。あかりに撫でられるのとは違う、でもそれと同じくらいの幸せをだ。この手がカルマのものだと思うと、何故だか殺せんせーや烏間先生に撫でられた時は段違いの喜びを感じる。
「えへへ……温かいなあ……」
　単純に愛情に飢えているだけなのかもしれない。だけど、私は今こ

の瞬間がいつまでも続けばいいと思ってしまった。でも、流石に迷惑だろう。あと少ししたら手を離そう。
「すまない、もういい……え？」
目を開く。視界に映ったのは透き通った琥珀色の何か。それが彼の瞳だと気が付くのにはさほど時間は掛からなかった。物凄い近くにカルマの顔がある。今わかるのはそれだけだった。
「か、カルマ!?」
慌てて顔を離す。流石にこんな至近距離で見つめられるのは恥ずかしい。顔に熱が籠るのがわかる。なんなんだいきなり……
「……ごめん、顔にゴミがついてたからとろうとしたんだけど、俺の気のせいだったみたい」
「そ、そっか！　ありがとう！」
自分でもわけがわからないくらい恥ずかしくて、言葉につっかえながらなんとか礼を言う。心なしか彼の顔も赤くなっているような気がしたが、それはきっと夕陽が見せる錯覚だ。
「……話変わるけどさ、臼井さんって彼氏作ったりしないの？」
「いきなりなんの話だ。唐突にもほどがあるぞ」
「まあまあ、そんなこと言わないで聞かせてよ。臼井さんの恋バナなんて絶対面白いだろうし」
先ほどのおかしな雰囲気はどこへやらいつものおちゃらけた彼が戻ってきた。期待するカルマには悪いが、面白い話はできそうもない。
「私は誰ともそういう関係になる気はないよ」
「……どうして？　臼井さん黙ってれば可愛いじゃん」
「喋ったら可愛くないのか……まあいい、そういうのではなくてな」
どう言えばいいのだろうか。本当のことを言ったら怒られそうな気がするが、ここは素直に今考えていることを言ったほうがいいだろう。
「……興味がないと言ったら嘘になる。でも、恋愛感情なんてわからないよ」
あかりの渚のことを話す楽しそうな顔を間近で見ていると、どんな

ものなのか気になってしまった。しかしだ。
「それになにより、私とそういう関係になるということは、いつかは私の過去を話さなければならない日がくるということだろう？」
血と硝煙に塗れた私の半生。交際する以上隠し事はなるべくしたくない。でもそれが何よりもの問題なのだ。
「私のことを好きになってくれた相手に重い物を背負わせたくない。背負えるとも思わないしな。だから今のところ誰かとそういう関係になるつもりはないよ」
カルマは私のことをじっと見つめて話を聞き続けた。その目にはなんの感情も見えない。期待外れだとがっかりしているのだろうか。
「面白味のない回答で悪かったな」
「別にそんなことないけど……へぇ、そうなんだ」
恐ろしく感情のない瞳。私は少しだけ怖くなった。何を考えているのかまったくわからない。沈黙が続く。やがてカルマが口を開いた。
「ねえ、臼井さん……」
それから先に言われた言葉を私はきっと一生忘れないだろう。

「ただいま……」
家のドアを開けてふらふらと玄関に入る。居間のクッションに座ってテレビを見ていたあかりがこちらに気が付き物凄い勢いで私に近づいてきた。肩に掛けられたジャケットを脇に抱え靴を脱ぐ。
「おかえり祥子！　ねえねえ、どうだったの？　カルマ君との初デート！」
私のことなどお構いなしにニヤニヤとした顔で覗き込みながら捲し立てる。デートじゃないって何度も言ったんだがな……
「それ、なんだがな……」
「うんうん！」
あのことをあかりに言ったらいったいどんな顔をするのだろうか。私だって未だに信じられないのだから。でも、黙っているわけにもい

かないし……仕方ない、腹を括ろう。
「その……私達試しに付き合うことになった、らしい」
「そうなんだ……へ？」
あかりの目が点になる。まあ、びっくりするに決まっているよな。私はこれから起きると思われる出来事を予想し耳を塞いだ。
あかりの叫び声が部屋にこだますのは、それからしばらくしてからのことであった。肩にはカルマに借りたジャケットの温かさがまだ残っていた。

放課後　カルマの時間（2）

気味の悪い奴。第一印象はそんなんだった。

噛みあわない会話、穴だらけの常識、手慣れた銃捌き、全てが異常で、全てが場違い。そしてなにより不気味だったのは暗く淀んだ黒い瞳。暗い目をした奴は腐るほど見てきたけど、あそこまで暗い目を見たのは生まれて初めてだった。

明らかに堅気じゃない。そんな奴が隣に座るんだから冗談じゃなかった。しかもたまに酒の匂いを漂わせて学校にやってくる始末。あんたまだ中学生だろ。

探りを入れるために手合わせした時のことは今でも忘れられない。視界から消えたと思ったら次の瞬間には喉にナイフを突きつけられていた。

格が違うとかそういうレベルじゃない。文字通り住む世界が違う。自分の今までやってきた喧嘩は所詮ガキのおままごとだと思い知らされた。

死ぬほど恥ずかしかったし、死ぬほど悔しかった。それを認めたくなくてからかってみたら思いの外良いリアクションをしてポンコツなのが明らかになる頃には心の中に燻っていた警戒心はどこかに消えていった。

思えば、あの時から意識してたのかもしれない。

臼井さんは見ていて飽きない。やることなすこと斜め上でぶっ飛んでるし、からかうと面白いくらいに反応してくれる。たまに予想できない方法でやり返してくるけど、それもまた楽しい。

今までいろんな奴を見てきたけれど、彼女ほどぶっ飛んだ人間は見たことがない。臼井さんに常識なんてない。自分がやるべきだと思ったら例えそれがどんなことでも真顔で実行する。

マフィアが待ち構えるホテルに単身突撃し、最強の殺し屋相手にたった一人で立ち向かい、友達と交わした約束を守るためだけに恩師もクラスメイトも裏切って戦い、最後には全世界に喧嘩を売ってあまつさえ勝ってしまった。

普通担任助けるためだけにスカイダイビングなんてしないし、三千万円なんて使わない。捕まるリスクだってあったはずなのに、そんなこと知ったことかと言わんばかりに諦めを含んだ覚悟を決めていた俺達の目の前で最高の結果を掴み取ってみせた。

あんな面白い女他にいない。初めは気味の悪い奴としか思っていなかったのに気が付いたら驚くほど彼女に夢中になっている自分がいた。

俺は臼井さんが好きだ。吸い込まれそうな黒い瞳、艶やかな長い髪、白い肌、引き締まった肢体、そして腕や脚に走った戦いの傷跡……

大切なものを守る時の強靭な意思の強さ、大人っぽい姿とは真逆の子供のような無邪気な笑顔、そして時折見せる触れば折れてしまいそうな儚さ……

誰かにやるつもりなんてない。あんな面白い奴を臼井さんのことなんて1ミリも理解できないような男に取られるなんて冗談じゃない。

幸い関係は作ることができた。後はゆっくりとあの元戦争馬鹿の認識を改めさせよう。臼井さんの無知を利用した卑怯なやり方だったけど、そんなものは後で埋め合わせすればいい。

まあ、正直なところどうだっていいんだけどね。逃がすつもりなんて端からないんだし。

「なあカルマ」

「何、臼井さん」

ソファに隣同士腰かけテレビをぼんやりと眺めながら口を開く。視界の先に広がる大きな液晶画面には爆発と閃光が絶え間なく映し出されていた。

「私達の関係ってなんだ？」

「え、彼氏と彼女でしょ」

即答。こうもあっさりと言われるとそんなものだと納得しそうになるが、当然ながらそんなもので流していい言葉ではない。

「だって臼井さんあの時うんって言ってくれたじゃん」
「いや、それはまあそうなんだけど……」
彼の言葉に例のホワイトデーのお返しのことを思い出した。帰り際、夕陽に染まった公園でカルマは私にこう言った。試しに付き合ってみる、と。結局どうなったかは今こうしてカルマの家で映画を見ているのが何よりもの答えだ。
「想像してたのと違うというか……」
あれから一月が経過したが私達の関係はよくわからないままだった。付き合ってることになっているらしいが、未だにキスもハグもしていない。今までやったことと言えば遊び、勉強、食事、そして映画鑑賞。
つまり陽菜乃や桃花とやっていることと大して変わらない。違うのは相手が男なのと二人きりということくらいだ。決してカップルらしいことをしたいわけではないが、こうも何もないと気になるのが人間という生き物だ。
「付き合うって言ったってそんな難しいことじゃないよ。前も言ったけど俺で男遊びを体験するくらいの気持ちでいいって。俺なら臼井さんの事情知ってるしある程度融通きくでしょ？」
「確かにその通りだが……」
「それとも……」
カルマが膝の上に置いていた私の手を握り自分の腿の上に置く。本当にさりげなくやられたせいで抵抗する間もなくズボン越しに彼の体温が伝わってくる。そして私を見つめるカルマ。私のほうが背が低いせいで自然と上目遣いになってしまう。
「俺とじゃ嫌？」
「嫌……ではない」
そんな奇妙な関係ではあるが、決しては不快ではないのもまた事実だった。想像とは違ったけれど、いつの間にか彼とこうして過ごすのが自分でも驚くほど楽しみになっていたのだ。
「そっか、よかった」
そう言ってカルマは笑った。いつもの仮面のような笑みじゃない

本当の笑み。私はこの笑みを見るのが好きだ。そしてこの笑顔を見ているのは私だけ。そう思うと自分でも驚くほど嬉しかった。
「はぁ……」
熱の籠った溜息を吐く。心拍数が上がり血の巡りが速くなるのがわかる。理由はわからないが最近の私はずっとこんな感じだ。
こうなるのは決まってカルマのことを考えている時。本当になんなんだ。私はいったいどうしてしまったのだというのか。
でも……
「映画、微妙だな」
「だよね、失敗だったかも」
単調な展開に思わず二人で不満を零す。
この関係は彼の善意によるもの。戦争のことしか知らなかった私を不憫に思ってこうしてくれているのだろう。決して私を好きだからとか、そういう気持ちによるものではないはずだ。
そう考えると、何故だかわからないけれど凄く嫌だった。凄く、凄く嫌だった。隣にいるのに寂しくてしかたがない。名前の付けられない感情が心を蝕む。
「カルマ」
「ん、何？」
「腕借りるぞ」
だからこの気持ちは彼に埋めてもらおう。腕を抱き寄せ身体を密着させ肩に頭を乗せる。シャツ越しに伝わる彼の体温と微かに聞こえる血流の音が私のささくれ立っていた心を癒していく。
「思ってたよりもがっちりしてるな」
「臼井さんは思ってたよりも柔らかいね」
「トレーニングばかりするなとあかりに窘められてな、最近は減らしているんだ」
「ふーん」
途切れる会話。静まり返った居間に映画の単調な爆発音ばかりがこだます。話すのも楽しいけれど、こうして何もしないのもまた心地よい。願わくばずっとこうしていたいものだ。でも、それはきっと叶

わないだろうな。
　それにしても……
「本当につまらないな」
「見るのやめる？」
　映画を借りるなら事前に評判を調べておこう。そう誓った私達なのであった。

「祥子、カルマ君とは最近どうなの？」
　騒音が治まる。雑誌を読みながらドライヤーで髪を乾かし終えたあかりが私にそう訊ねてきた。こうして居間であかりが髪を乾かすのは今ではすっかり日常のワンシーンだ。
「そうだなあ……」
　初めの頃こそ驚いていたあかりだったが、最近になって落ち着きを取り戻し私と彼の関係を受け入れるようになった。代わりにニヤニヤして近況を聞いてくるようになったがな。
「もうキスとかしちゃったのかな？　きゃー！」
　案の定一人で盛り上がっているあかりに呆れる。まったく、自分に彼氏ができたからって……。私はあの短くなった青髪の友人を思い浮かべた。
「何も変わってないよ。一緒に遊んで、勉強して、たまに家に行ったりするくらいだ」
「そうなんだー……え、家!?」
　クッションの上に腰かけて髪を弄っていたあかりが跳びあがる。どうしてそこまで驚く必要があるのだろうか。
「あれ？　言ってなかったっけ」
「初耳だよ！　そ、それで何したの？」
　何故だか知らないが飛びかかりそうな勢いで私に詰め寄ってくる。私は何か変なことでも言ってしまったのだろうか。
「何って、普通に勉強したり映画見たり……あとたまにインド料理作ってくれる。それがまた凄く美味しんだ」

手慣れた動きでチャパティをひっくり返す様に見惚れたものだ。味も店で食べたものに勝るとも劣らないし本当に凄いと思う。
「……そ、それだけ？　ほ、他には？」
「逆に聞くが他に何があるんだ」
「え!?　そ、それは、えーっと……ごめん無理」
顔を赤らめへなへなとクッションに座り込む。今の発言のどこに動揺する要素があったのだろうか。おかしなあかりだな。
「でも意外だなあ、カルマ君かー。確かにちょっと怪しいなーって思ってたけど」
「怪しい？」
「カルマ君ってE組にいた時しょっちゅう祥子のことからかってたじゃん？　傍からみるとまんま小学生の男子が好きな女子にちょっかいかけるみたいでさ。でもそっかー」
「すまない、例えがわからない。でも、多分あかりが思っているようなものじゃないよ」
カルマにかぎって私を女として好きになることなどないだろう。見た目だけなら私を異性として見てくれる人間もいなくはないが、私の本性を知っててなお私を好きになる男などいるわけがない。
「あいつはなんだかんだ言って優しいからな。戦場暮らしで同年代の男子に慣れてない私に男遊びを教えてくれているのだろう」
実際私の知らないことを色々教えてくれる彼には助かっている。あの関係がいつか終わるものだとしても、最後の瞬間まで楽しんでいたい。私は心に走る鈍痛を無視してそう思った。
「それ、本気で言ってる？」
あかりが何故か呆れたような目で私を睨みつけた。本気も何もそれ以外ないと思うんだがな。
「ああ、本人もそう言ってたしな」
「そう来たか……うわー、カルマ君やり方やらしいなあ」
「やらしい？」
「ううん、なんでもない。こっちの話……でもまあ、カルマ君なら大丈夫か」

何が大丈夫なのだろうか。別に邪なことをされるわけでもないだろうに。というか私の場合、邪なことをしようとする輩のほうを心配するべきだろう。骨の一本や二本は確実に逝くだろうしな。
「というか祥子、カルマ君のことあいつって呼ぶんだね」
「ああ、確かに言われてみれば」
私が男子のことを呼ぶときは基本的に名前か彼だ。気が立っている時はお前呼びになったりもするが、どちらかと言うと丁寧なほうだと思う。意識してなかったが言われてみれば心の中でもいつもあいつと呼んでいたな。
「カルマは、あいつはなんというか近いんだ。別に他の男子に距離を置いていたわけではないんだがな」
言うなればあかりに対する渚といったところか。気を使う必要がないということをお互いに理解しているのだ。
「楽しそうだね、祥子」
「そうかな？」
「そうだよ。だって凄いニコニコしてるもん」
あかりが手鏡を私の顔の前に持っていく。そこにはこれ以上ないってくらい笑っている私が映し出されていた。私はこの顔を知っている。何故ならあかりが渚のことを話す時の顔とそっくりだったからだ。
つまり私は……
「はは、まさかな」
心に過った考えを一蹴する。ありえるわけないだろうに……
私がカルマに恋してるなど。

「やはり、オフロードバイクはどれも代わり映えしないなあ」
広げた雑誌を閉じてラックに戻す。雑誌が悪かったのかもしれない、今度は隣の雑誌を読んでみよう。新しい雑誌を手に取りイヤホンから流れるシャンソンに耳を傾けながら斜め読みする。
「今日は妙に蒸し暑いな……」

いよいよ本格的に梅雨に入った6月の下旬。私は駅前の書店で暑さと湿気と戦いながら雑誌の立ち読みに興じていた。いつもなら隣にいるはずのあかりは今日はいない。久しぶりの一人の時間だ。
「……ッ！」
五時方向距離2メートル、マガジンラックを一つ挟んだ先から視線を感じる。ラックのガラスの反射で後方を確認。案の定男が私を見ていた。雑誌を読んでいるふりをしているが明らかに私を監視している。
「暇人だなあ……」
私は誰に言うわけでもなく一人ごちた。こういうのは今に始まったことではない。原因は3月の卒業式前日の出来事だろう。殺せんせーを助けるためとはいえ、やったことはテロと何も変わらない。監視の一つや二つついて当然だ。
「……はぁ」
溜息をつく。監視されることなんて慣れっこだが、慣れているからと言って何も感じないわけではない。覚悟の上での行動だったがそれでも嫌なものは嫌だった。
証拠が見つかったら、もし捕まったら、そんな最悪の仮定ばかりが脳内で浮かんでは消えていく。
「こんな時にカルマがいたらなあ……」
「呼んだ？　臼井さん」
懐かしい声、イヤホンを外し振り向く。視界の先にはいつものように笑みを浮かべた赤髪の男が私を見ていた。
「ど、どうしてここに？」
「学校の帰り。電車乗ろうとしたらたまたま臼井さんの横顔が見えたから来ちゃった。何読んでんの？」
私の耳元に顔を近づけ雑誌を覗きこんでくる。煮オレジュースでも飲んでいたのだろう、微かに甘い匂いがする。
「バイク？」
「うん、そろそろ誕生日だろ？　だから免許を取ろうと思ってな」
会いたかった男に出会えたことで微かに感じていた恐怖が安心感

に変わっていくのを感じ、硬直していた表情筋が緩んでいく。
「新車はだいたい四十から五十万。遅くても来年の春には買えるだろうな」
「もしかしてバイトするの？　臼井さん金持ちなんだから働かなくても余裕で買えるでしょ」
「それなんだがな、あの金は生活費と学費、あとはどうしても必要な時以外は使わないことにしたんだ。流石に教習所の費用くらいには使うけど、バイクは自分で買いたい」
　あかりにも言われたし、殺せんせーのアドバイスブックにも何十ページにも及んで資産運用の指南が書かれていた。あの通りに使えばあと２０年は働かずに生きていけるだろう。ちょっと細かすぎて引いたけど。
「あれは私の流してきた血そのものだ。もう昔みたいに気安く使ったりはできないよ」
「いいんじゃない？　俺もそれで良いと思う」
「問題はどこでアルバイトするかだな。君との時間がなくなるのも嫌だし、短期で一気に稼げるものがいいかもしれない」
　後ろの男に気付かないふりをしながら懸命にいつもの自分を装う。自分のやったことは自分で責任を取る。今回のことに関しては完全に私に落ち度がある。彼を巻き込むわけにはいかない。
「え、バイト先なんて決まってるでしょ。ほら」
　カルマがニヤリと笑い携帯電話の画面を突きつける。そこにはいつぞやのメイド姿でウェイトレスをする私の姿……
「あ、あの時の！　い、いつ撮ったんだー！」
「いや、目の前で撮ってたじゃん。覚えてないの？」
「け、消せ！」
「え、やだよ。可愛いのに」
　こんな時だけ昔のカルマに戻るな。恥ずかしい歴史を掘り起こされ写真に写っていた私以上に顔を赤くして彼を睨みつける。
「俺臼井さんのメイド姿もう一回見たいんだけどなー」
「そんなの頼んでくれたらいつだって――」

しまった。慌てて口を塞ぐがもう遅い。恐る恐るカルマを見れば優越感を剥き出しにした顔でニヤニヤと私を見ていた。恥ずかしすぎる……

「いつだって、何？」

「そ、それは……う、うぅ、ああもう!!」

溢れ出る羞恥心に身を任せてパンチを繰り出すが、ふらふらのパンチはいとも簡単に避けられ宙を切る。

「あっははは！　臼井さんマジ良いリアクションするよねえ。ほんと可愛い」

角と尻尾を生やしてケラケラと笑う、赤い悪魔がそこにはいた。やっぱりこいつなんて大嫌いだ。一瞬でもこいつのこと好きなんじゃないかと思った自分が恥ずかしい。

「……で」

でも、そんなおちゃらけた彼の空気は一瞬で切り替わった。カルマが私から目を離し目を細める。殺気すら籠った琥珀色の視線の先には先ほどから私を監視していた男が映っていた。

「――ッ！」

男がぎょっとしたように目を見開く。カルマの奴、気が付いていたのか……

「誰こいつ。知り合い？」

「いや……」

「ふーん、ねえおじさん。さっきから俺の彼女のことずっと見てたみたいだけど……気のせいじゃないよね」

不意に身体が引き寄せられる。突然のことにぼんやりとしていた私はあっという間に彼の腕の中に収まってしまった。背中から感じる彼の鼓動。カルマに抱きしめられている。その事実が冷たくなっていた私の心を温めていく。

「何、もしかしてストーカー？　警察呼ぶよ」

カルマにしては珍しい落ち着いた対応。でも落ち着いているのは言葉だけだ。でもあの教室で一年共に過ごしてきた私にはわかる。今彼はとても怒っている。

「……」
　男は分が悪いと察したのだろう。額に冷汗を浮かべていそいそと立ち去った。男の姿が視界から完全に消えるのと同時に私はほっと息を吐いた。
「臼井さん……説明してくれるよね？」
　トーンが低い。１２月に私に怒った時とまったく同じ声だった。つまり、今彼はとても怒っている。
「……はい」
　物理的にも精神的にも捕まっている私に拒否権などなかった。力なく頷く。外では雨が降り出しそうだった
　さて、どう説明したものか……

「ふーん、監視ね……」
　路地裏。ビルの壁に背を付けたカルマはそう言ってファストフード店の安っぽいストロベリーシェイクを飲みほした。そして怒りとも心配ともとれる視線で私を睨みつける。
「いつからなの？」
「気付いたのは最近だ……多分いつまでたっても証拠がでないことに痺れを切らしたのだろうな」
「証拠って、あの時の？」
「ああ」
　頷く。本当なら知られたくなかったがああして現場を見られてしまった以上、今更言い訳などできはしない。
「雪村ちゃんは知ってるの？」
「いつかは言うつもりだったんだが……」
「いや、いつかじゃ駄目でしょ」
「そうだな……わかった。帰ったらすぐ伝える」
　そこまで言い切ったところで二人して黙り込む。私達の間に気まずい沈黙が流れる。カルマは私から目を逸らしてどこか遠くを見ている。沈黙は嫌いじゃないけれど、今この瞬間の沈黙は凄く嫌だっ

た。
「怒ってる、よね……」
「すっげームカついてる。でも別に臼井さんに怒ってるわけじゃないからそこだけは安心していいよ」
「……は？」
よくわからないけれど、私に対して怒りを抱いているわけではないらしい。よかった。嫌われているわけではないのか。
「……なんで隠してたの？」
「今回ばかりは原因は私にあるから……」
自らの行動は自らで責任を取る。私はあれが正しいと信じて行動した。故にその結果がどうなろうと、それは私自身の責任だ。
「言っておくが、私は自分の行動が間違っていたなんて微塵も思っていないからな」
「じゃあ捕まってもいいって思ってるわけ？」
「それは……」
もし捕まれば十年は確実に出られないだろう。下手したら一生出られないことも十分に考えられる。烏間先生が色々フォローしてくれたようだが、それでも万が一ということはあるのだ。
そんなもの……
「嫌に、決まっているだろ……」
俯き制服のスカートの裾を握りしめる。ありえるかもしれない最悪の未来を想像し、目の前が急に真っ暗になったかのような錯覚に陥る。震えが止まらない。怖くてしかたがない。
「お別れなんて嫌だよ……君と離れたくなんてないよ……やっと普通の生き方ができるようになったのに、こんなので終わりなんて……」
想像力の怪物が首をもたげ心の中で暴れまわる。藍井祥子と言う名の少女のちっぽけな心を喰い尽くさんと牙を向く。
その時だった。
「……臼井さん」
名前を呼ばれるのと同時に身体が何かに包まれるのがわかった。突然の出来事にあたりを見回す。横目に見えるのは真っ赤な髪。私

はここにきてようやく自分が抱きしめられていることを理解した。
「か、カルマ!?」
突然の行動に離れようともがくが、見た目からは想像できない凄まじい力で抑え込まれ身動きが取れない。冷たくなった私の心に問答無用でカルマの温かさが伝わっていく。
「は、離してくれ」
「嫌だ」
即答。取りつく島もないとはこのことだ。耳元で彼の吐息がダイレクトに伝わる。それだけで私の頭にどんどん熱が籠っていく。
でも、それだけではなかったのだ。
「……臼井さん、好きだよ」
……え？
今、なんて言った？　聞き間違いでなければ、今確かに彼は好きと……いや、そんな馬鹿な、何かの間違いに決まっている。だって、おかしいじゃないか。
「先に言っておくけど友達とかじゃないからね。俺、男として臼井さんのことそういう目で見てるから」
僅かな期待はカルマの言葉によって粉々に打ち砕かれた。そういう目、つまりは私のことを女として見ているということ……
突然の言葉に頭が真っ白になる。今の今まで感じていた恐怖も動揺も全てが彼岸の彼方へ飛んでいく。カルマの言葉に上書きされていく。
「き、君は優しいからてっきり善意で付き合ってくれてるのかと……」
目の前の事実を認めたくなくて、パニックになった頭で必死に言葉を紡ぐ。無駄だとわかっていても今の私にはこうすることしかできなかった。
「……あのさぁ、そんなの口実に決まってんじゃん」
深い、それは深い溜息を吐きながらカルマが呆れた口調でそう言った。口実、つまり嘘。彼は善意でやっていたわけではないのか。
「え、それって……」
「いくら友達でも好きでもない女子のために殆ど毎週デートしたり家

に入れたりすると思う？　鈍いにも限度あるでしょ」
「に、鈍い……」
　呆れたような口調でカルマが吐き捨てる。今まで散々鈍い鈍い言われてきたが、まさかカルマにまで言われる日が来るとは。顔が見えないからわからないけれど、この声は嘘を言っている声ではない。
「逆に聞くけど、俺が興味もない女子にスキンシップ許すようなお人好しに見える？」
「……いや、見えない」
　一年間一緒に過ごしてきた私ならわかる。彼はとても警戒心の強い人間だ。そんな彼がいくら友達とはいえそう簡単に気を許したりするわけがない。その事実にもっと早く気が付くべきだった。
「確かにちゃんと言わなかった俺も悪いと思うよ。でも臼井さんも臼井さんだよね。知らない間にめっちゃ可愛くなってるわ、平気で間接キスしてくるわ、何の躊躇もなく家に上がって来るわ、挙句の果てにはいきなり抱き着いてくるわ……いい加減こっちの身にもなってくんないかなあ」
「……よくわからないけどごめん」
　顔を少し赤くして私に対する不平不満のような言葉を捲し立てる。彼の言葉から察するに私は色々と問題があるようだ。陽菜乃かあかりに今一度恋愛に関する常識を教えてもらったほうがいいもしれない。
「今更謝ったって遅いよ。俺のこと本気にさせた責任取ってもらうから」
　抱きしめていた身体を離したと思ったら、今度は肩を掴んで私の目を見つめてくる。彼の顔は今まで見たことないほどに熱を帯びていた。
「祥子……」
　そして徐々に近づいてくるカルマの顔。いくら鈍い私でもわかる。この流れはどう見ても……いや待て！
「え、ちょ、か、カルマ!?　ま、待ってくれ！」
「やだ」

じりじりとまるでじらすかのようにゆっくりと唇が近づいてくる。本当にここまま行くと私はカルマとキスしてしまう。
その事実を認識するだけで私の脈拍は急上昇し顔に熱が籠っていく。頭が真っ白になる。これから起きること以外の現象を考えることができない。
初めてのキスがこんな路地裏なんて……でもカルマとなら……
意を決し目を瞑る。口から漏れ出た吐息が彼の唇にあたり跳ね返ってくる。多分あと1センチもないだろう。
はち切れそうになる心臓、そして……

「なーんてね」
「……へ？」
目を開ける。先ほどまでの熱を帯びた表情はどこへやら、いつも通りの顔のカルマがニヤニヤとこちらを眺めていた。この顔は知っている。あの教室で散々見てきた顔だ。もしかして、私はからかわれたのだろうか。
「あはは、その顔最高」
「え、え？　き、キスは？」
「それはまたいつか。だってまだ返事、聞いてないでしょ」
「あ……」
そうだった。付き合うことそのものは了承したが、私はまだ彼のことを好きだとは一言も言っていない。そもそも好きかどうかも定かではない。全身に籠っていた熱が凄まじい勢いで抜けていく。
「そういえば、そうだったな……」
危なかった。あのまま行けばきっと私は好きかどうかもわからない相手とキスしてしまっていただろう。そういう知識には疎いとはいえ、ファーストキスは本当に好きだと確信した相手にしか捧げたくない。
残念に思うのはきっと気の迷いか何かだ。
「このまま押し切ればきっとＯＫしてくれるんだろうけど、それじゃ

駄目なんだよね」
「どういう、ことだ？」
「そのまんまの意味だよ」
よくわからないけれど私を気遣ってくれていることは伝わってくる。相手の気持ちを無視して関係を迫ったりしたら殺せんせーに怒られてしまう。
「返事はまた今度聞かせてくれればいいからさ。今日は帰ろうよ。雨降ってきたし」
頬に水滴が落ちてきた。空を見上げる。灰色の水気をたっぷりと含んだ雲が椚ヶ丘の空を覆い尽くしていた。これはあと一分もしないうちに降ってくるだろう。折りたたみ傘を出そう。そう思って鞄を広げた次の瞬間だった。
「いやいや、何自分の傘出そうとしてんの」
「だって雨降って――」
言い切る前に頭上が八角形の陰に覆われる。上を見ればいつの間にかカルマが私に傘を差し出していた。
「もう少し近づいてくんないと肩濡れるけどいいの？」
さも当然のように傘に入ってくることを促してくるが、よく考えればおかしなことだらけだ。彼の家は隣駅にある。そして私の家はここから少し歩いたところにある。つまり正反対なのだ。
「帰るのではなかったのか？」
「はぁ、この状況で彼女に一人で帰らせるとかどんな鬼だよ……」
頭を押え溜息を吐く。つまりは送ってくれるということらしい。これもカルマの言う私と一緒にいるための口実なのだろうか。でもわざわざ拒否する理由もない。ここは素直に善意に甘えておこう。
「わかった。なら行こうか」
いつものように腕を組もうとするが、先ほどカルマに言われた言葉がリフレインし思いとどまる。私のこういう行動が勘違いさせると、彼やあかりは言いたかったのだろう。
「さっきは庇ってくれてありがとう……」
「どういたしまして」

心の中で何かが急速に動き出すのがわかる。押さえつけていた名前の付けられない感情が急激に膨張していく。これから私はどうなってしまうのだろうか。
そんな6月の出来事だった。

「ねぇ、お姉ちゃん」
ダイニングテーブルで携帯電話を弄るあかりにふらふらと近づき、頭の上に顎を乗せる。お姉ちゃんは背が低いから座るとちょうどいい高さになるのだ。
「どうしたの？　あと重いから頭の上に顎乗せるの止めて」
「はーい」
拒否されたので身体を離し向かい側の椅子に座る。あかりは携帯電話を弄るのをやめて私に顔を向けた。そうしてくれたほうがいい。今からする相談は私にとっては大事なことだからだ。
「相談っていうか、聞きたいことがあってさ」
「もしかして、カルマ君のこと？」
「え、なんでわかったの？　まだ何も言ってないのに」
まさかの的中。今日は彼のことなんて一言も話してなかったのにどうしてわかったのだろうか。
「だって祥子最近カルマ君の話しかしてないじゃん」
「そうだったっけ？」
あかりが頷く。いや、まさかそんな……あかりに指摘され記憶を辿ってみる。確かに、ここ最近私が話すことと言ったらカルマのことばかりだった気がする。まあいい、それは大して重要なことじゃない。私が訊きたいことはもっと他にある。
「それで、カルマ君のことがどうしたの？」
「あいつのことを考えると、おかしくなるんだ……」
私は胸を抑えながら溜まりに溜まっていた心情を吐露した。今こうして彼のことを話題に出すだけで私の肥大化した謎の感情が暴れ出す。私は本当にどうなってしまったのだろうか。

「おかしくなるって、どんな風に？」
「具体的には脈拍が増幅して身体が熱くなる。鏡で見たら瞳孔も開いてた。いつでも会えるのに物足りなくて、欲望が際限なく沸き起こってくる……」
　こんな感情は今まで経験したことがない。怒りでもなければ悲しみでもない。喜びや焦りに似てなくもないが微妙に違う。どの感情にも一致せず私の頭は混乱するばかり。
「感情が制御できないんだ。あいつの手前ではなんとか抑え込んでるけど、気を抜いたら抱き着いてしまいそうになる。もっと優しくしてほしい、もっと可愛いって言ってほしい……もっと話したい、もっと一緒にいたい……そんなことばかり考えてしまう」
　あの雨の日からまた一月が経った。返事を返すまでてっきり会うのを控えるのかと思ったが、私のことなどお構いなしにカルマは遊びやデートに誘ってくる。そしてその度に私の謎の感情は肥大化していくのだ。
　そしてもうすぐ夏休み。お互いにテストは本気でやりたいから彼にはしばらく会っていない。でもたったそれだけで私の感情は馬鹿みたいに暴れ狂っていた。悲しくもないのに胸が締め付けられる。嬉しいのか、苦しいのか、それすら今の私にはわからない。
「お姉ちゃん、私はいったいどうしてしまったのだろうか……」
「うん、どう考えても恋だよね」
「……え？」
　目を見開いてあかりを見る。呆れたような、それでいてどこか嬉しそうな顔で私を見つめていた。聞き間違いでなければ今あかりは恋と言った。恋、つまり私がカルマに恋をしている。そう言いたいのだろうか。
「本当は自分で気付いてほしかったんだけど、このままだとまた拗らせそうだしょうがないか……」
「こ、拗らせ？」
　この顔は私がよくないことをしてしまった時に窘める時の表情だ。多分というか、あかりから見れば今の私はきっと良い状態とは言えな

いのだろう。
「祥子、想像してみて。カルマ君が知らない女の子と凄く楽しそうに話してたらどう思う？」
「別に女子の友達くらいいても不思議ではないと思うんだが」
「じゃあ、その子と話してるカルマ君が祥子と話してる時よりもずっと楽しそうだったら？」
「え、そ、それは……」
　想像してみる。彼が楽しそうなのは良いことだけど、その対象が私じゃないと考えると、何故だかわからないけど凄く嫌だった。初めての感情に戸惑う私を余所にあかりは更に言葉を続ける。
「もしその子が祥子の目の前でカルマ君と手を繋いでたりキスとかしてたら、どう思う？」
「……嫌だ。そんなの絶対嫌だ」
　仮定の話なのに、想像するだけで涙が出そうになる。この感情は明らかに嫉妬だ。仮に渚があかりと楽しそうにしてたところで嬉しいとしか思わない。実際にそういう場面は何度も見たけど別に嫉妬心など一度も抱いたことはない。
　ここまで理論立てて考えれば私にだってわかる。つまり私は……
「あいつが、好きなのか……」
　その言葉を発した瞬間、まるで欠けていたパズルのピースが揃ったかのような一体感を感じた。今まで感じていた謎の感情の全てに説明がつく。そんな感覚に陥る。
　いい加減認めてしまおう。私は、臼井祥子という人間は、赤羽カルマのことが好きなのだ。
「そっか……好きだったのか」
　肥大化した謎の感情が一気に温かいものに変わっていく。溢れ出たそれは喜びに変わり笑顔となってあふれ出す。顔の筋肉が緩み表情をコントロールすることができない。多分今の私は凄くだらしない顔をしていると思う。
「やっと気づいた？」
「……うん、ありがとう。お姉ちゃん」

あかりにはいつもいつも気付かされてばかりだ。私はこの人の家族になれて本当に幸せだったと思う。
「どういたしまして。でも、私にできるのはこれだけ。あとは自分で考えるんだよ？　じゃあお休み祥子」
「うん、お休み」
あかりは立ち上がって私の頭を一撫ですると自分の部屋に戻っていった。静まり返った部屋に壁掛け時計の機械音だけがこだます。
「はぁ……」
一人溜息を零す。荒れ狂っていた感情は落ち着きを取り戻し、次に自分が何をするべきかを考えるようになった。
私は確かにカルマのことが好きだ。大好きと言っても言葉が足りないくらいには好きだ。いい加減、決断する時が来たのだろう。
「どうやって、告白しよう……」
変わらないものは何もない。次の段階に移る時がやってきたのだ。

「ここに座るのなんか懐かしいなあ」
「確かに懐かしいな」
ライトすらいらない月明かりの下。私達は屋根の上に座って夜空を眺めていた。昼間の締め付けるような暑さも夜になってしまえば随分と穏やかになる。薄手のワンピースでは少し寒いくらいだ。
「でもカルマは椚ヶ丘なんだしいつでもいけるだろ」
「何回かちょろっと来たことはあるけど、こうしてがっつり腰を据えるのは久しぶりなんだよね」
今私達がいるのは懐かしき旧校舎の屋根の上。もう当たり前になったデートの帰り、最後に寄ったのがここだった。ちなみに誘ったのは私からだったりする。まあそれはどうでもいいことだ。
「あれからもう四ヶ月か……」
「うわ、もうそんな経ってるんだ」
あの騒々しい音速教師の名残を楽しみながら二人の時間を楽しむ。でも、そんな時間もセミの鳴き声と横から聞こえるジュースを啜る音

で台無しだ。
「何飲んでるの？」
「バナナ煮オレ、飲んでみる？」
　手渡されたそれを無言で受け取りストローに口を付ける。温くなった甘ったるいバナナと牛乳の風味が口の中に広がりあまり美味しいとは言えなかった。
「逆に喉乾くだろこれ……」
「そう？」
　表情を歪めながら紙パックを戻す。当たり前のように行われる間接キス。間接キスという概念があるのを知ってからもうそれなりに経つが、未だに何が恥ずかしい行為なのか理解できない。これはきっと感じ方の違いなのだろうな。
「臼井さんテストどうだった？」
「学年十位、ちょっと油断してたみたい。そっちは？」
「二点差で浅野に負けた。俺も油断してたみたい。今でもあいつの顔思い出すとすっげー腹立つわ」
　恐らく凄まじいドヤ顔だったのだろう。簡単に想像がつく。まあなんにせよ、順調にお互いを高め合っているようで何よりだ。
「もうすぐ夏休みだけど臼井さん予定決めた？」
「アルバイトを少しだけ。それ以外は何も」
　それからはカルマは私から細かい予定を聞き出すと、少し考えるような素振りをしてから口を開いた。
「じゃあさ、海行かない？」
「ん？　海ならE組のみんなと行く予定じゃないか」
　久しぶりに全員で集まれる機会だ。思う存分遊んで旧交を温めようと思う。でも、そんな私の言葉にカルマは首を振って否定した。どうやら違うらしい。
「あいつらと行くのは別。俺が言ってるのは二人きりで行かないかってこと。あ、そうだ。せっかくだから泊りがけでどっか遠くに行こうよ」
　熱海とかいいよねと温泉あるし。と、勝手に盛り上がるカルマ。こ

いつはいつもそうだ。私の事情なんて知ったことかと言わんばかりに好き勝手に引っ張りまわす。しかも本当に嫌な時はやってこないのだから質が悪い。
「というかもう水着買ったんでしょ？　雪村ちゃんから聞いたよ」
「お姉ちゃん!!」
　家でニヤニヤしながら渚とメッセージのやり取りをしているだろうあかりに最大限の呪詛を籠めて叫ぶ。あと押ししてるつもりなのかもしれないけれど、余計なお世話としか言いようがない。
「白のビキニって臼井さんにしては意外と派手なチョイスだよねえ」
「うぅ、やめてくれぇ……」
　顔が熱くなり手で覆い隠す。そんな私の精一杯の防御もカルマにとっては燃料を注ぐ行為にしかならない。嗜虐心の混じった楽しそうな彼の笑い声が横から聞こえてくる。たまに可愛いとか聞こえてくるのはきっと幻聴だ。
「……私の水着なんて見ていて楽しいものじゃないだろうに」
「好きな子の水着見たいって男としちゃ普通の感想だと思うんだけど」
「だって傷だらけだし……」
　私は自分の傷を卑下したことなど一度もない。だが、他人から見て私の傷跡がどう見えるかくらいは知っている。だから本当はワンピース型にしようと思ったのに、一緒にいた陽菜乃に駄目出しされてあんなトチ狂ったものを買う羽目になってしまったのだ。
「俺は別に嫌いじゃないんだけどなあ、臼井さんの傷跡」
「え、変態？」
「うん、真顔でそう言われると地味に傷つくからやめてくんない？」
「あ、ごめん」
　思わず謝ってしまい私達の間に妙な沈黙が訪れる。お互いに黙りこくり空を見上げる。月明かり以外光源のない裏山ではそれはそれは綺麗な星空が見える。乾燥した中東の鮮明な星空に比べれば見劣るが、私はこのぼんやりとした星空も嫌いじゃない。
　私はこうして黙って同じ時間を過ごすのが凄く好きだ。会話なん

て必要ない。こうしているだけで胸が満たされていく。
「……そろそろ返事、聞かせてほしいんだけど」
でも、そんな時間はカルマの一言で終わりを告げた。あの衝撃の告白からもう一カ月が経ったが、未だに返事は返していない。不誠実なことくらい私もわかっているが、勇気が出せないでいたのだ。
「そうだな……私も腹を括ろう」
大きく深呼吸する。心臓が大きく脈打ち緊張で逃げ出したくなるが、それでも傭兵時代に培った鋼の理性で抑え込む。
「……私は君のことが好きだ」
「俺君って名前じゃないんだけど」
大事な話をしようとしたのに、いきなり話の腰を折られ思わず睨みつける。でも、それ以上に真剣な目で見つめられ何も言うことができない。
名前で呼べ、そういうことなのだろう。
「……私は、カルマのことが好きだ。もう言い訳なんてしない。私は君が大好きだ」
今までの全ての感情が私が彼に好意を抱いていることを証明している。人間としてではなく、仲間としてでもなく、友達としてでもなく、男としてカルマのことが好きになっていた。
「こんな私でよかったら、貴方の女にしてください……」
言ってしまった。自分が何を言ったのかを理解するのと同時に身体が猛烈な勢いで火照っていく。羞恥心、喜び、色々な感情がごちゃ混ぜになり自分でも何を考えているのかわからなくなる。
「……」
カルマは私の告白を聞いても何も言わなかった。どこか遠くを見てただ黙っているだけ。もしかして、私の一言が気に障ったのだろうか。
「カルマ、どうしたんだ？」
「臼井さん、ごめん」
視界が回る。僅かな痛みと共に屋根のひんやりとした感触を背中越しに感じる。そして視界に映るのは星空ではなくカルマの熱を帯

びた琥珀色の瞳。
「祥子……」
熱さすら感じる声色で下の名前を呼ばれる。私は今カルマに押し倒されているのか……
「か、カル――」
咄嗟に名前を呼ぼうとした口は彼の口によって塞がれた。何をされたのかを理解する前にカルマの唇が私の唇を貪る。
「……んっ」
優しくも荒々しいキス。息ができない。頭が真っ白になる。初めて頬に触れてもらった時とは比べ物にならない多幸感が全身を包む。頭が回らない、何も考えることができない。
「んんっ……」
身体中から力が抜け落ちされるがままになる。時間の感覚なども壊れてしまった。一秒が一分にも、十分にも、永遠にも感じた。私の戦闘能力があればいくらでも抵抗できるのに、不思議と抵抗する気が起きない。
「……ごめん、臼井さん」
それからしばらくしてからカルマはやっと私を解放した。酸欠になりかけた肺が酸素を求め胸が大きく上下する。そして彼を睨みつけると申し訳なさと、喜びの混じった瞳で私に謝ってきた。
夏の生温かい風が火照った顔を冷やす。その瞬間、吹き飛んでいた私の理性が羞恥心となって戻ってきた。
「い、いきなり舌入れる奴がいるかぁ！　ちょっとくらい心の準備させてよ！　は、初めてだったんだぞぉ！」
冷静になって自分がされたことを理解し、顔を真っ赤にしてしどろもどろになりながらも抗議する。だってそうじゃないか、初めてなら普通もっと優しくするものだろうが。
「散々焦らしまくったんだからこれくらい良いでしょ？　ていうかキスならビッチ先生にやられたんじゃないの？」
「あの人は、色々気遣ってくれて私にはキスしなかったんだよ……って、なんで嬉しそうな顔してるんだよぉ！」

「いや、だってそんなのめっちゃ嬉しいに決まってるじゃん」
ニヤニヤしやがってこの野郎。でも、文句を言おうと思ってもキスされたことを喜んでしまう自分を自覚してしまい、何も言い返せなくなる。口ではなんとでも言えるが、本当のところ凄く嬉しかったのだ。
「これで、臼井さんは本当の意味で俺の女になったってことでいいんだよね？」
「……うん、君の物になっちゃったな」
顔を赤らめてそう言うと、私を見つめていたカルマが突然口元を抑えて私から目を逸らした。
「どうしたんだ？」
「今俺凄い顔になってるから見ないでくれると嬉しいんだけど」
「そう言われると逆に見たくなるんだが……えい」
手を伸ばして頬を掴み顔をこちらに向けさせる。そこには、頬を赤く染め今まで見たことないくらいに口元がだらしなくにやけたカルマがいた。
「ふふ、可愛いな」
私がそういうとカルマは更に頬を赤らめた。あのいつも不敵な笑みを浮かべたカルマがこんな顔をしていると考えると愛らしくて仕方がなかった。
「……男に可愛いとかいうの止めてくんない？」
「やだ、可愛いものは可愛いのだ」
こんな顔を見れるのは私だけ、その事実がまた嬉しい。それだけ私に夢中になってくれていることに他ならないからだ。知らない男に告白されたときは嫌悪感しか抱かなかったのに、彼に好かれていると思うと喜びで胸がはち切れそうになる。
「でもカルマ、一つだけ約束してくれ」
「何？」
「もし、私の立場が危うくなったら容赦なく縁を切るんだぞ」
「……なんでそんなこと言うわけ？」
声のトーンが一気に低くなる。少し怖いが、でも絶対に言わなけれ

ばならないことだ。
「命を狙われるかもしれない、もしかしたら捕まるかもしれない。それに君は官僚になりたいんだろう？　私みたいなヤクザな女と付き合ってるのが知れて夢が叶わなくなってもいいのか？」
今更人殺しだの監視されてるだので悩んだりはしない。カルマはそれも含めて私を好きになってくれている。なら私はそれに応えるだけだ。でも私のせいで彼が不幸になるのは許容できない。
そう思って忠告したのだが……
「え、もしかしてもうそこまで想像してくれてるの？　めっちゃうれしいんだけど」
しまった。完璧に墓穴を掘った。忠告するつもりだったのに、このままでは単に喜ばせるだけに終わってしまう。
「違う、そうじゃなくてだな！」
「いや、違わないでしょ。ていうか、そんなこと言われて俺が諦められると思う？　臼井さんは都合が悪くなったら即裏切る薄情な奴を好きになるような安い女なの？」
「……思わないし、好きにならない」
「でしょ？　じゃあこの話はこれで終わりだよ」
仮に彼がそういう人間だったのなら私は友人とすら思わなかっただろう。つまり何を言っても無駄。カルマはそう言いたいのだ。
「後悔しても知らないんだからな」
「後悔なんてしないよ」
圧し掛かるように抱き締められ頭を撫でられる。全身に彼の温かさが伝わり荒ぶっていた心を落ち着かせていく。お姉ちゃんの温かさとは違う。大きくて、力強くて、どうしようもなく男の身体だった。
「臼井さんはあの一年俺らのことずっと守ったんだからさ、今度は俺に臼井さんのこと守らせてよ」
「ふふ、私より弱いくせにどうやって守るっていうんだ？」
搦め手なしではカルマは私に手も足も出ない。気持ちは嬉しいが私は守られるよりも守るほうが性に合う。
「この状況でカルマを攻撃できる手段がいくつもあると言ったらどう

する？」
「抵抗もしないで腕の中に収まってる人が何言ってんだか」
耳元で致命的な事実を囁かれる。いくら強い自分を演じたとしても、こうして彼の腕に抱かれていることは変わらない。それに守ると言われて嬉しかったのは否定しようのない事実だった。
もう強がらなくてもいいのではないだろうか。不意にそう思った。
「……変なこと言ってごめん」
「次言ったら本気で怒るから」
胸の中で小さく頷く。いくら言い繕っても目の前にぶら下がっている魅力には抗えない。あの時と同じだ。知ってしまえば戻れない。この喜びを知ってしまった以上、二度と前の無知な子供には戻れないだろう。
もしかしたら私は途轍もない間違いを犯しているのかもしれない。でも、こいつが相手ならそれもいいか……
「なあ、もう一度キスしてくれないか」
胸の中に収まっていた顔を出してカルマの目を見つめる。私が自分からこんなこと言う日が来るなんてな。銃を撃ってれば満足だったのに、今では次から次へと欲望が沸き起こってくる。
「え、いいの？」
「うん、さっきは頭が真っ白で何もわからなくてさ」
嘘だ。本当は唇の感触から舌の入れ方まで完璧に憶えている。でも、それを言うのは恥ずかしい。私はいつからこんな打算的な人間になってしまったのだろうか。どれもこれもカルマのせいに決まっている。
「わかった……って言いたいところだけどやめとくよ」
「どうして？」
「これ以上は本当に歯止め効かなくなるだろうから。臼井さんこと大事にしたいからがっつきたくない」
「よくわからないけれど、我慢するのはよくないぞ」
「……それわざと言ってる？　いや、どうせ臼井さんのことだから素で言ってるのわかってるけどさあ」

首を傾げる。また何か不味いことでも言ってしまったのだろうか。だが顔を見る限り嫌がっているわけでもないし、むしろ喜んでるような様子すら見受けられる。どういうことなのだろうか。
「とにかく、そういうのはまた今度にしようよ」
「わかった。楽しみに待っているよ」
「……まあ、そんなに時間かからないかもしれないけどね」
でも、カルマが私を大切に思ってのことならば私はそれを受け入れるだけだ。世の中はギブアンドテイクだ。それは恋愛においてもきっと同じに違いない。
彼には何もかも差し出してもいいとすら思ってるけれど、カルマは絶対に受け取りはしないだろう。逆もまた然りだ。
「もう遅いし今日は帰ろうか。雪村ちゃんも心配してるだろうし」
「そうだな。帰るか」
同時に起き上がり空を見上げる。胸の中で今まで感じていた切なさや焦りが全て喜びに変わりまるで火災に見舞われた弾薬庫のように弾け続ける。こんな素晴らしい感情を私に贈ってくれたカルマには一生感謝し続けるだろう。
もし離れ離れになったとしてもこの想いは変わらないと信じている。もっとも、離すつもりなんて微塵もないのだがな。
「月、綺麗だね。粉々になってるけど」
「そうだな、私もそう思うよ。粉々になってるけど」
沈黙、お互いに見つめ合う。私たちが噴き出したのはそれからしばらくしてからのことだった。

「ど、どうかな?」
照りつける太陽と砂浜、そして潮風と波の音をバックに、腰の後ろで手を組んでカルマを見つめる。顔が凄く暑いが、それは猛暑とは全く関係ないだろう。
「うん、凄い可愛いと思う」
「えへへ、ありがと!」

ニコリと笑うとカルマも同じように笑った。鍛えすぎた身体も、身体中にある傷跡も、彼は全て好きと言ってくれる。ならば他人にどう思われたって関係ない。
「でも、やっぱり恥ずかしいな……」
昔は下着を見られても何も思わなかったのに不思議なものだ。自分で言うのもあれだが変わりすぎだ。まあどれもこれもカルマのせいなんだがな。
「え、今更水着如きで恥ずかしがっちゃうの？　もっと凄いの見られてるくせに」
「なっ!?　こ、こんなところで何を言っているんだカルマ!!」
ええい、口笛を吹いてごまかすな。しかも無駄に上手いな。変なことを言われたせいで恥ずかしくて仕方がない。そうだ泳ごう。せっかく海が目の前にあるのだ。こういう時は泳いで忘れるにかぎる。
「ああもう！　時間勿体ないから遊ぶぞ！　とりあえず軽く向こうの防波堤まで泳いで競争だ！」
「え、軽くって……どうみても一キロくらいあるんだけど」
「どうせ君なら楽勝だろ。さあ行くぞ！」
手を握り海原に向かって走り出す。いつも振り回されてばかりだからな、たまには振り回すのも悪くない。
「負けたら罰ゲームだからな！」
「へぇ……じゃあ絶対勝たないと」
今日は八月。私はこれ以上ないというほどに幸せだった。願わくばこれからもこの幸せがずっと続きますように。私は天国のパパとママにそう願った。

ちなみに勝負が私の完敗で終わったのは凄くどうでもいいことである。あんなに速いなんて聞いてないよ……

放課後　親子の時間

「寒っ」
　冬の寒空の下、スカートの中に吹き込んだ冷気に思わず身震いする。視界一杯に広がる石造りの墓と灰色の空によって作られた冷気は容赦なく私の身体を冷やしていく。こんなことならお姉ちゃんの言った通りタイツ穿いていけばよかった。
「あぁ、帰ったらさっさとお風呂に入ってとっととこたつに飛び込もう」
　ぼやきながら無機質な石の森を歩き続ける。本当ならポケットに手を突っ込みたい気分だが、生憎と両手は花束と鞄で塞がれている。昔ならなんともなかったのに、今ではすっかり寒さに弱くなってしまった。
「よし、到着っと」
　しばらく歩き続け私はようやく目当ての場所までたどり着いた。墓標の側に花束を置き石に刻まれた両親の名前をなぞる。
「久しぶりパパ、ママ」
　もうすぐ春が訪れる。あの騒々しい教室を卒業してから一年、そして私が初めて人を殺してから今日でちょうど十年。久しぶりの家族との再会だった。

「ほんと、お姉ちゃんは相変わらず口うるさいよ。ナイフで料理してただけじゃん」
　墓石に背を向け腰を下ろし、水筒のカップに注がれた湯気の立つ紅茶を啜りながら一年経っても相変わらず世話焼きな姉に対する愚痴をこぼす。
「だいたいコンバットナイフも包丁も同じ刃物だろうに。むしろ包丁のほうがバランス悪くて使いにくいくらいだ」
　初めて墓参りした時のせいもあるのだろう。二人の墓の前で近況を話すのは、私にとっていつもの行為になっていた。答えが返ってく

ることはないけども、幼いころの記憶を忘れてしまった私にとって、思い出を語るのはとても大事な行為なのだ。
「勉強、家事、遊び、友達付き合い、アルバイト……毎日が忙しくて寂しがる暇すらない。こんな暮らしができるなんて夢にも思ってなかったよ」
紅茶を一口。このお茶だって私が淹れたものではない。今まで飲んできたどんな高い酒よりも、この安っぽい紅茶のほうが何千倍も美味しい。こういう生活はもうとっくの昔に当たり前のものになっているけれど、改めて自分の幸せを噛みしめる。
家族がいて、友達がいて、愛する人がいて、これ以上ないくらいに私は満たされている。でも、強いて望むのなら……
「二人にみんなを紹介したかったな」
両手で数え切れないほどの友達ができたと言ったらどんな顔で喜んでくれたのだろうか。家族が出来たと言ったら何を思ったのだろうか、好きな人が出来たと言ったらどんな風に応援してくれたのだろうか。
鞄から財布を取り出し中に仕舞っていた写真を見る。写真には一組の男女と5歳くらいの子供が写っていた。三人ともとても笑顔で、とても幸せそうだった。
「こんな写真撮った記憶なんてないんだがな……」
私が唯一持っている思い出の残り香。この写真を見ると、思い出せもしないのに胸を掻きむしりたい衝動に駆られる。心の片隅にいる幼い私が寂しさに打ち震える。
「一応血のつながった家族はいるにはいるけどさ」
最近出会った二人の人物のことを思い出す。私がここでこうしているは心の整理を付けるためであった。
「おじいちゃんとおばあちゃん、ね」
つい先日、私は遂にかねてから存命を知っていた母方の祖父母との再会を果たした。まあ実際は再会などと呼べるような温かいものではなかったのだがな。
それも当然だ。十年も死んだことになっていた愛娘の孫が実は生

きていたと言われて素直に喜べるのはフィクションの中の人物だけだ。
「人生上手くいくことばかりじゃないってことか」
いくら真実を証明する証拠を揃えたところで、頭では理解できたとしても心から納得などできるわけがない。表面上では私を孫だと認めてはくれたが、二人の目はどうみても孫娘を見る目ではなかった。
父方の祖父母は既に亡くなっている。つまりあの二人が私にとって唯一の血のつながった家族なのだ。この一年で家族の温かさを知った私には、彼等を家族だとはどうしても思えなかった。
「まあ、こんな悩みを抱けること自体、幸せに生きている証拠なんだろうけどね」
悩むこと自体は辛いけど、昔のように答えの先に悲観と絶望しかないような悩みではない。それに悩めるということはそれだけ現状に不満があるからに他ならない。かつての私なら悩むことすらできなかっただろう。
「答えがあるわけでもないし、ゆっくり考えていくしかないんだろうな」
私の人生はまだ始まったばかり。幸い時間はいくらでもある。思い切り悩んで、相談し、そして克服していく。それこそが生きるということ。あの人とあの教室で約束したことだ。
「よし、少し走るか」
冷めかけた紅茶を飲み干す。するべきことは終わった。立ち上がりスカートをの埃を掃う。そういえばあかりにヨーグルトを買ってきてくれと頼まれていたな。確か今夜はカレーを作ると言っていたからそれの隠し味かもしれない。
「さて、行く――」
人の気配。思わず身体が強張る。気配の元に首を向ければ人が一人こちらに歩いているのが見て取れた。
「……なんだ」
身体の力を抜く。ここは墓地だ。墓参りに来る人がいたって何も不思議ではない。必要もないのに無駄に警戒してしまうのは戦場の

感覚が完全に抜けきっていない証拠なのだろう。
「綺麗な人だなあ……」
近づいてくる人を一瞥し思わずつぶやく。歳は２０から３０、長い綺麗な髪を後ろで一本に縛ったとても綺麗な女性だ。花束を携えているということは私と同じで墓参りにでも来たのだろう。
「私もああいう大人になりたいも……」
いつもの独り言。それは立ち止まった女性と目が合ったことで中断された。ここには私達しかいない。目が合ったところで何も不自然ではない。でも、私には目の前にいる女性の目が何か不思議なものを見るような目に見えてならなかった。
軽く会釈。すると目の前の女性は不思議そうな表情をより強めて再び歩き出し、そして……
「……え？」
パパとママの墓の前で立ち止まった。張りつめた空気中、まるで時間が止まったように私達は一歩も動かず己の瞳にお互いを映し合っていた。
「あ、あの！」
先に口を開いたのは私だった。震える喉を律し必死に言葉を紡ぐ。正確なことはわからないけれど、この人は多分私のパパとママを知っている。
「もしかして……パパとママの知り合いですか？」
「……嘘」
女性が目を見開く。瞳は動揺によって小刻みに揺れ動き、半開きになった口に手を当て信じられないと言いたげにこちらを見る。間違いない、この人は私の親のことを知っている。
しかしだ。
「……祥子（しょうこ）ちゃん、なの？」
現実は常に想像を上回るのだ。
「さあ、入って」

「お、お邪魔します」
椚ヶ丘、飲み屋が連なるの街の一角。そこにひっそりとたたずむ小さな居酒屋の敷居を跨ぐ。壁に貼り付けられた品書き、使い込まれた椅子とカウンター、そして微かに漂う懐かしいアルコールの香り。
「酒臭いところでごめんなさい」
懐かしい匂いに目を見開いているのを不快に思っていると思われたのだろう。女性改め、梓さんが少しだけ申し訳なさそうな顔で謝ってきた。
「あ、いえ、ちょっと懐かしいなあって思って」
酒場なら私も何度も利用していた。後ろめたいことをしている連中は大抵酒好きと相場が決まっている。情報を集めるにしろ単に酒を飲みに行くにせよ何かと重宝していた。
あんな汚い場所と比べるのはこの店に対して失礼だが、それでも同じ酒を扱う店。懐かしいと思うのも無理はなかった。
「……もしかして本当に」
「梓さん？」
「ご、ごめんなさい、なんでもないわ。今着替えてくるから座って待っててくれないかしら？」
私が頷くと彼女は店の奥に消えていった。確かにあの余所行きの服装のままでは大事な話をするには些か窮屈だろう。本当なら今すぐにでも話を聞きたいところだが、焦ったところで結果は同じ。今は素直に待つべきだ。
「さて、と」
カウンターの一席に腰かけ一息つく。誰もいない店内は静まり返っていて、外から聞こえる車の音が余計に静けさを印象付けた。こうして一人で静かに過ごすのは随分と久しぶりな気がする。私はすっかり賑やかになった自分の家を思い出してそう思った。
「あの人、パパとママとどんな関係なんだろう……」
あの出会いの後、私は梓さんの提案によりとりあえず彼女の経営するこの居酒屋に行くことになった。お互いに頭の整理がつかなかったのだろう。道中では精々自己紹介くらいしかできなかった。故に

私はまだあの人のことを何も知らないのだ。
「祥子(しょうこ)ちゃんって、どうみても私の名前だよな」
初めて出会った私の知らない私を知っている人間。その衝撃は筆舌に尽くしがたい。私が今平静を保っているのは偏に帰りを待っている人がいるからである。もし昔のように一人だったら今頃パニックを起こしていただろう。
「……誰か来るな」
引き戸の向こうから足音と気配。多分子供か女性だろう。もしかしてあの若さで娘でもいるのだろうか。そうこうしているうちに引き戸のすりガラスの向こうに小さな人影が見えた。
「あれ、鍵開いてる……今日は用事あるから遅くなるって言ってたのに」
訝しむ声と共に扉が開かれ気配の主が入ってきた。女の子だ。歳は小学五から六、さくらと大して変わらない。恐らく学校帰りだろう。
「え、お姉さん誰?」
腰かけていた私を発見するなり訝し気な視線を私に飛ばしてくる。当たり前だ。外に張り出されていた営業時間にはまだ早い。思い切りプライベートな時間にお邪魔してしまったわけだからな。
でも、そんな気まずさなどどうでもよくなることが目の前にあった。女の子の顔を見る。可愛らしい顔だ。そう、まるで……
「なぎ、さ?」
思わず親友の名前を口に出す。私がそう思うのも無理はなかった彼女の顔はあまりにも在りし日の渚に似ていたのだ。
「なぎさ? 私、蛍だよ。それよりもお姉さん誰? ママの知り合い?」
そんな私の驚きなど彼女は知る由もない。首を傾げ改めて自分の家に現れた正体不明の女への追求を始めた。そうだ、いい加減挨拶くらいしないと相手に失礼だ。
「いや、すまない。私は臼井祥子という。成渓高校に通う高校生だ。梓さんに少し聞きたいことがあってお邪魔させてもらっているんだ」

立ち上がって自己紹介をする。礼をすると彼女も丁寧にぺこりと頭を下げてきた。そして顔をあげるとその目にあった警戒心は少しだけ薄れていた。
「ごめんなさい、泥棒さんかと思っちゃった」
「気にしないでくれ。君の反応は至極真っ当だ」
いくら平和な国とは言え犯罪はそれなりに起こる。怪しんで当然だ。むしろ、もっと警戒したほうがいいくらいだと私は思う。
「梓さんは着替えてくると言って店の奥にいったよ」
「教えてくれてありがとう。ママただいまー！」
「おかえりなさい蛍！　そこにいる祥子ちゃんにお茶淹れてくれないかしら？」
「はーい！」

梓さんの頼みを聞いた瞬間、蛍と言う名の子は慣れた動きでカウンターの向こうに入ると茶の準備を始めた。どこにでもあるなんの変哲もない親子のやり取り。でも私とっては生まれて初めて見る生の親子のやりとりだった。
「すまない、いきなり押しかけたのにお茶まで淹れてくれて」
ガスコンロの噴射音を聞きながら再び腰を下ろす。静かだった店内に人の活気が宿る。一人でいるのも好きだけど、やはりこうして誰かといるほうが落ち着くな。
「気にしないでいいよ。いつもやってることだから」
「そうか、ありがとう」
私がそう言うと蛍はにこりと笑顔で笑った。ほんとうによく出来た子だ。たったこれだけのやり取りしかしていないのに、私は既に彼女のことを気に入っていた。
「そういえばさっきお姉さん私のこと違う名前で呼んでたよね。確かなぎ……」
「渚、だ」
改めて彼女の顔を見る。やはり見れば見る程そっくりだ。よく見れば別人だとわかるが、髪型や雰囲気がどうもあの時の彼を連想させ

る。この世には自分とそっくりな人間が三人いるという与太話を聞いたことがあるが、あながち間違いではないのかもしれない。
「私の中学時代のクラスメイトが君にそっくりでね。思わず声に出してしまったんだ」
「……もしかして、お姉さんもタコさんの生徒だったの？」
タコさん、この言葉を聞いて思い浮かべる人など一人しか知らない。あの騒々しい音速教師、殺せんせーだ。まさか、先生と知り合いなのだろうか。
「もし君が、せこくてエロくて顔がゴムボールみたいな先生のことを言っているのなら、その通りだよ」
私がそう言った瞬間、蛍がカウンターから身を乗り出し私に詰め寄った。彼女の瞳が出来た子供から、好奇心に満ち溢れる年相応の子供の瞳に変わっていく。
「すごい！　私一回でいいからタコさんの生徒に会ってみたかったんだ！」
もう確定でいいだろう。この子は殺せんせーと知り合いだ。でも居酒屋の娘と殺せんせーがどうやって知り合ったのだろうか。まさか、常連客だったなんて言わないよな。
「君は、タコ……いや殺せんせーとどんな関係なんだ？」
「へぇ、殺せんせーって言うんだ。ふふ、変な名前」
あかりが言っていたが殺せん先生だから殺せんせーらしい。改めて考えると変な名前だな。とはいえ今更他の呼び方なんてする気もないけど。
「タコさんはここの常連客だったんだ。もう今はこなくなっちゃったんだけどね」
「じょ、常連？」
蛍が頷く。本当に常連客だったらしい。あの変装する気ゼロの変装で来てたのだろうか。まったく、自分が世界中から追われてる自覚あるのかなあの人。そんなんだからバリアに捉えられたりするんだ。
「お姉さん、タコさんが何処に行ったか知ってる？」
「いや、知らない。君は知ってるだろうけど、あの人やること滅茶苦茶

だからさ。多分今頃どっかの国で甘い物でも食べながら巨乳の美人のことでもおっかけてるんじゃないかな」
「あはは、やっぱタコさん学校でもそんなんだったんだ」
話しぶりから察するにここでも絶好調だったらしい。でもそんな先生のことを話す蛍はとても楽しそうだ。あの人はやはり人を笑顔にする天才だな。本当に今何しているのだろうな。
「はい、お茶どうぞ。ねえ私もっとタコさんのお話聞きたいな」
蛍はお盆に二人分のお茶を持ってくると私の隣に座った。大事な話を聞きに来たのだが、今はそれよりもこの子と話したくて仕方がなかった。私の知らないところであの人はいったいどんな醜態をさらしていたのだろうか。
「どうもありがとう。じゃあ、いただきます」
お茶を一口。口の中に芳ばしい香りが広がる。知らない味だがとても美味しい。冬の風邪で冷えていた身体が温まっていくのを感じた。
「そうだな、どこから話そっか」
「お姉さん凄い楽しそうだね」
「君も知ってるだろ？　なんせあの人は人を笑顔にする天才だからな」
機械だろうが、少年兵だろうが、殺し屋だろうが、問答無用で手入れし笑顔にさせてしまう。誰よりも自分に素直で優しくて、そんな大好きな先生だった。
「じゃあまずは――」
私はゆっくりと語り出した。あの騒がしくも楽しかった担任のことを。

「あはは！　タコさん面白すぎだって！」
あれから一時間程経過した。共通の話題もあってか私達は驚くほど会話が弾んだ。何しろお互いネタは尽きない。それに蛍が驚くほど聞き上手なのも拍車をかけていた。祖父母のことで少し落ち込ん

でいた気持ちはどこかに吹き飛んでしまった。
「こらこら蛍、あんまり笑うと殺せんせーが泣いてしまうぞ」
「ごめんなさーい」
　お互いに反省する気ゼロの茶番染みたやり取り。正直自分でも趣味が悪いと思うが楽しいのだからしかたがない。
「あーあ、私も渚さんにあってみたいなー」
「びっくりすると思うよ。本当に似ているからな」
「でも、男なんでしょ？」
「髪切ってからは少しは男らしくなったんだがな、今でも彼女とデートしてると揃ってナンパされたりするらしい。この前愚痴ってたよ」
　私やあかり、それにカルマが絶賛成長している中、渚の身長は相変わらず小さいままだ。彼はまだ伸びると言っているが正直なところあまり期待できそうもない。母親は別に小柄ではなかったのにな。
「それはちょっと気の毒だね」
「けど、本気になるとびっくりするほどかっこいいんだぞ。渚の彼女……私の姉なんだが、もうベタ惚れでデートから帰ってくるたびに惚気話を聞かされるんだ」
　かくいう私も人のことなど言えないのだが、それはそれこれはこれである。
「なんか大人の世界って感じ」
「ほぉ、蛍もそういうのに興味あるのか？」
　私の言葉に蛍が少し顔を赤くした。わかばパークにいたさくらも恋愛するくらいだし、女子は小学生くらいから恋愛に興味を抱くのが普通なのだろうか。高校生になってようやく恋愛感情を自覚した私とは大違いだ。
「私ももうすぐ六年生だし、そういうのに興味くらい持つよ。好きな子がいるわけじゃないんだけどね」
　いつの間にか暖房が入ったのか店内はすっかり温かくなっている。少し暑いな、シャツとネクタイも緩めよう。
「お姉ちゃん、恋するってどんな気持ちなの？」
「私に聞いてもあまり良い答えは返ってこないぞー、なんせ私だから

な」
腕を組んで自慢気言うと蛍が残念な人を見るような目で私をじっと見つめた。自分でも言ってて悲しくなってきたな。
「それ自慢になってないよ……。でもお姉ちゃん恋人いるんじゃないの？」
「え、なんでわかったんだ？　私まだ何も言ってないのに」
聞き上手だとは思っていたが、この子はエスパー何かなのだろうか。いや、そんなわけないだろう。別の理由があるはずだ。私がそんなことを考えていると、蛍がとんでもない爆弾を投下してきた。
「だってそれキスマークってやつしょ？」
「……え？」
蛍が私の首筋を指さす。嫌な予感がして私は急いで手鏡を取り出し自分の首筋を見回し、そして見つけてしまった。ちょうどシャツの襟で隠れていた部分に赤い楕円形の痣が一つ。このタイプの痣ができる原因は一つしかない。
「あ、あいつ……」
いつの間に、この前のデートの時に付けられたのか？　もしかして気付かないまま学校に行ったり街の中歩いてたのか。
「あ、お姉ちゃん赤くなった」
つけられたこと自体恥ずかしいし、蛍に指摘されてやっと気が付いたことが恥ずかしくて、顔に凄まじい勢いで熱が籠っていく。畜生、今度会ったら絶対仕返ししてやる。私はあの赤髪の甘党に復讐を誓った。
「凄い！　やっぱ高校生ってそんなこともするんだ。ねえねえお姉ちゃん、キスマークってどうやってつけるの？」
「あ、いや、そ、それは！」
どうしよう、これ答えていい質問なのか？　いや、どう考えても不味いよな。というか殺せんせーの話だったのにいつも間にか話題が恋愛シフトチェンジしているぞ。陽菜乃もそうだが女性はやはり恐ろしいな。私も女だけどさ。
「やっぱちゅーしたらつくの――」

「蛍ー」
　まるで助け船を出すかのように梓さんが蛍の名前を呼んだ。思わず振り向けば店の奥からエプロンに着替えた梓さんがニコニコしながら私達を見ていた。正直やっとかと言いたいところだ。もしかしてずっと私達のやり取りを聞いていたのだろうか。
「祥子ちゃん困ってるからそのへんにしてあげなさい」
「はーい、ごめんお姉ちゃん」
「いや、いいんだよ。楽しかったからな」
　最後におかしなことになったが、とても楽しい時間を過ごしたのは事実。まさかこんな日に新しい友達ができるなんて思いもしなかった。
「ごめんなさい蛍、これから祥子ちゃんと大事な話があるから、上に行っててくれないかしら？」
「えぇ、もっと話したいよー」
　最初は大人っぽいと思ったが、やはり根は子供のようだ。まあそれだけ楽しいと思ってくれたのだろう。
「大丈夫だぞ蛍、この話が終わったらまた話しよう。だってもう友達だろ？」
「……うん！」
　目を見て微笑むと蛍は満面の笑みを浮かべて力強く頷いた。私が同い年だった時にはできなかった笑顔だ。しっかりと愛情を注がれているのだろうな。
「またねお姉ちゃん！」
「ああ、またな」
　店の奥に消えていく蛍に手を振る。あんなに懐かれたらまた来るしかないじゃないか。本当に人生どうなるかわからないものだ。
「ごめんなさい祥子ちゃん、娘が変なこと聞いちゃって」
　空いた席に梓さんが腰かける。初めて会った時のどこか張りつめた雰囲気とは打って変わり今ではすっかり柔らかい雰囲気だ。
「いえ、お気になさらず、あのくらいの歳ならそういうのに興味を持ったって不思議じゃありませんから。流石に返答に困りましたけどね」

「ふふ、ごめんなさい。今度言っておくわ」
「さっきは助け舟出してくれてありがとうございました。もしかして、聞いてたんですか？」
シャツを再び首元まで閉じながら私の問うと、梓さんが頷いた。やはり私と蛍のやりとりを聞いていたようだ。あまりにもタイミングが良すぎたからな。
「着替えならもっと前に終わってたのだけど、蛍があんなにも楽しそうに話してたから出るタイミング見失っちゃったわ。ありがとう、蛍と仲良くしてくれて」
「いえ、私も楽しかったのでお互い様ですよ」
言葉の節々に娘を思う気持ちがひしひしと伝わってくる。とてもに大事に思われているのだろう。こんな親がいて蛍は本当に幸せ者だ。
「蛍もすごい楽しそうだったし、よかったらこれからも遊びに来てくれないかしら？」
「是非、殺せんせーの話も聞きたいですしね」
「どうもありがとう。さっきも聞いたけど本当にタコさんの生徒なの？」
「ええ、写真見ますか？」
財布を取り出し集合写真をカウンターの上に置く。雑に入れたせいで少し剥げているけれど、それでもしっかり皆と殺せんせーが写っている。
「確かにあの人だわ、それに祥子ちゃんも」
「蛍さんが常連だったと言ってましたが、本当なんですか？」
「そうよ、うちの常連だったわ」
だった、つまり今はもう来ていないということ。こっそり来ているなんてことも考えたが、本当に椚ヶ丘にはいないらしい。いったいどこに行ってしまったのだろう。
「あの人、あれからどうなったのかしら。テレビではあんな風に言われていたけれど、あの人が悪人だなんて私にはとても信じられないわ」

真実を知っている者からすればあの報道は噴飯ものだった。それが一番都合がいいのは理解できるが思い返すと今でも腹が立つ。まあ、盛大に面子を叩き潰してやったからいいんだがな
「あの人は梓さんの見てきた通りの人ですよ。せこくてエロくてドジで、でも生徒思いの優しい先生だった。決して生徒を人質に取るような悪人なんかじゃない」
「……そうよね、本当に悪人だったらあんな楽しそうに貴方達のこと話すわけないもの」
過去にやってきたことを考えれば悪人と言えなくもないかもしれない。だが、少なくとも今は悪人ではないしこれからも悪人ではないだろう。こんな風に曖昧さを受け入れることができるようになったのも私が人として成長した証拠なのだと思う。
「やっぱり、あの人はもう……」
「いや、普通にピンピンしてると思いますよ」
「え？」
蛍に言った言葉を嘘だと思っていたのだろう。私が生きていると言うと梓さんは目を丸くして驚いた。確かに一般に入って来る情報では殺せんせーが死んだと思うのも無理はない。
「でも政府の発表だと……」
「嘘も方便って言うでしょ？　あれだけ大げさに報じておいて逃げられたなんて言えるわけがありませんからね」
「じゃあ、あの人は……」
「ええ、生きてます。だって約束しましたから」
梓さんは私の言葉を噛みしめるようにしばらく黙り込むと、やがて安心したように微笑んだ。
「そう、本当によかった」
この人と殺せんせーとの間に何があったのかはわからないが、相当思い入れがあったのだろう。本当に嬉しそうな笑顔だった。この人のことについても聞いてみたいところではあるが、今はそれよりも大事なことがある。
「あの、それで……」

「わかってるわ、お父さんとお母さんのことを聞きたいのでしょ？」
今度は私が驚く番だった。だってそうじゃないか。私はまだ自分が藍井祥子だと話していない。話してもそう簡単に信じてくれるとも思っていなかったから説得するつもりだったのに……
「やっぱり、祥子（しょうこ）ちゃんなのね」
「信じて、くれるんですか？」
震えながら紡いだ言葉に梓さんはニコリと頷いた。嘘を言っている目ではない。この人は本当に私のことをパパとママの娘だと信じてくれている。でも、どうして……
「当然じゃない、だって私は貴方が赤ちゃんの頃から知っているのよ」
私はこの人のことなんて知らないはずなのに、今はこの言葉が嬉しくて仕方がなかった。生まれになんて拘ってない。だけど胸に込み上げてくる感情は認められたことを喜ぶ気持ちで満ち溢れていた。
「大きくなったわね、祥子ちゃん」
そう言って梓さんは私は優しく抱きしめた。
視界が滲んでいく。思い出をなくした私にとって、この言葉は正に劇薬に等しかった。覚えていないけれど、多分私はこの人のことを知っているのだろう。そうじゃなかったらこの胸にこみ上げる郷愁に説明がつかない。
「……うん」
静まり返った店内に、一人の子供のすすり泣く声がこだました。

「そんな、ことがあったのね……」
あれからしばらく泣いた後、私は梓さんに今までの全てを語った。自分でも荒唐無稽で到底信じられることではないと思っていたが、それでも彼女は私の話を全て信じてくれたようだった。
「梓さん？」
全てを聞き終えた梓さんは肩を震わせなんとも言えない表情で私を見つめた。何を思っているのだろうか。いや、そんなもの目尻に溜まった涙を見れば聞かなくたってわかる。

「酷すぎる……」
ずっと我慢していたのだろうか。まるで決壊したダムのように目から涙が溢れていた。やはり刺激が強すぎたかもしれない。
「ごめんなさい、泣きたいのは貴方のほうなのに……」
「私のために泣いてくれているんですよね？」
誰かのために流した涙は人を癒す力がある。私はとっくの昔に救われているけれど、そんなこと関係ない。私のために泣いてくれる。それだけで私の心は熱いもので満たされた。
「気に病む必要なんてありません。私はもう救われましたから」
そう言ってカウンターに置いてあったティッシュ箱を差し出す。勿論その程度で彼女の悲しみが消えることはないけれど、今はこんな言葉しか思いつかない。
「そう、貴方もタコさんに手入れされたのね……」
「ええ、ピッカピカにされたせいで下なんて向けなくなりました。だから泣かないでください」
自分にできる精一杯の笑顔で大丈夫だと告げる。その思いが伝わったのだろう。悲嘆に暮れた目に明るさが戻っていくのがわかった。
「……そうね、本人が大丈夫だと言っているのに、悲しんでいても仕方ないか。でも、辛かったら辛いと言っていいのよ」
「はい、そういう時はちゃんと泣きついているんで大丈夫です」
悪夢にうなされた時はあかりに言うようにしている。むしろ向こうから私の部屋に飛び込んでくるくらいなので一人で苦しむ暇なんてない。一緒に暮らすようになってもうすぐ一年が経つが、最早完全に年下扱いだ。
「あの、二人とはどんな関係だったんですか？」
話を戻そう。この人が私の家族の知り合いだというのは最早疑いようのない事実。私が知りたいのはそれがどんな関係だったのかだ。話しぶりから察するにそれなりに深い付き合いだとは思うのだが。
「あの人たちは常連でとても大事な友人だったの。夫が亡くなった時も親身になってくれて今でもとても感謝しているわ」

梓さんは待つように告げると再び店の奥に消えていった。しばらくして戻ってきた彼女の手には一冊のアルバムがあった。
「ほら、これが貴方よ」
アルバムを広げ一枚の写真を指さす。そこにはパパとママと私、そして若いころの（今と殆ど変わらなかった）梓さんが写っていた。写真に写っている私はとても嬉しそうな笑顔をしていた。こんな時もあったのだな……
「千歳さんも貞夫さんも、困っている人がいたら放っておけないような、そんな素敵な人だった……」
千歳と貞夫……私の両親の名前。懐かしむ私を余所に梓さんは次々と写真を見せてくれた。数は多くなかったけれど一枚一枚に思い出が詰まっていて、私は理由もわからないのに嬉しくて仕方がなかった。
「見てこの写真」
「これは……」
梓さんが示す写真を見る。そこには四歳くらいの私と生まれたばかりの赤子が写っていた。この赤子はもしかして……
「蛍がまだ生まれたばかりの時に撮ったものよ。ふふ、祥子ちゃんはこの時から何も変わってないわね」
目の前にいる私と写真の私を見比べて梓さんが微笑んだ。確かに写真に写る私は今と同じような髪型で同じようなリボンをしていた。
「……あれ？」
急に写真がぼやけてきた。前がはっきりと見えなくなっていく。目が熱い。水滴が頬を伝って行く。泣く要素なんてどこにもないはずだろうに。
「おかしいな、寒いからかな？」
「祥子ちゃん……」
楽しかったはずの感情はいつの間にか悲しみに変わっていた。
「こんなに思い出があるのに、私は何一つ思い出せないんです……」
この写真を見ればわかる。私にはもっと沢山の思い出があったはずのなのだ。思い出そうとしても記憶にあるのは土煙と硝煙ばかり。

全て戦場の濁流に押し流され忘れてしまった。それが悲しくて仕方がない。
「梓さん、一つ聞いてもいいですか？」
涙で震える喉を律し言葉を作る。彼女は無言で頷いた。
「パパとママは私を愛していましたか？」
こんなこと聞かなくたってわかる。だけど、私は誰からそう言ってもらいたかった。愛しているはずだ、ではない。愛しているという確証が欲しかったのだ。
「祥子（しょうこ）ちゃんは今、祥子（さちこ）ちゃんって呼ばれているのよね？」
「はい、字も同じです。ほんと凄い偶然ですよね……」
名付けた当初は愛着なんてなかったけど、今は臼井祥子なんて適当な名前にしてよかったと思っている。二人のつながりを感じるからだ。
「貴方の名前の由来って知ってる？」
「幸せになってほしいから、ではないんですか？」
祥。めでたいこと、喜ぶべきことを意味する字だ。私は二人の願い通り幸せに生きている。本当の名前を知ってからずっとそう思って生きてきたのだが、もしかして違うのだろうか。
「それもあるのだけど、本当は違うの。聞いたらきっと笑っちゃうと思うわ」
「どういう、ことなんですか？」
「初めはさちこって名づけるつもりだったんですって」
「……え？」
さちこ、聞き慣れた私の大事な今の名前。さちこという読みは完全に偶然だと思っていたのに……
「千歳さんと、貞夫さん、二人の名前をとってさちこ。でもそれだとあまりにも雑すぎるから読みを変えてしょうこ。笑っちゃうでしょ？」
「う、嘘……」
口に手を当てる。ずっと、自分で考えた名前だと思っていた。幸が薄いから臼井祥子、さちこが古臭い名前だなんて知らずにつけただけの適当な名前。ずっとそう思っていた。

まさか私の名前の由来がこんな適当なものだったなんて思うわけないだろうに……
「二人とも、適当すぎるよぉ……」
治まりかけていた涙が再びあふれ出す。でも胸にあるのは哀しみではなく喜び。いや、どちらかというと楽しいとか面白いとか、そんな感情に近いのかもしれない。
「もっと意味があると思ったのに、雑すぎるからしょうこって！　もうちょっと考えようよぉ！」
大粒の涙をこぼしながらそれでも笑う。藍井祥子と臼井祥子、二つに分かれていた名前が一つになるような気がした。
「さちこって！　おばあちゃんじゃないんだからさぁ」
感情がごちゃ混ぜになり泣いているのか笑っているのか、自分でもよくわからなくなる。以前から少しだけ本当の名前を名乗らないことに少しだけ後ろめたさを感じていた。でも、もうそう思う必要はない。私は祥子と名乗ってもいいのだ。
「あはは、パパとママ適当すぎ……」
笑いが治まる。急に虚しさが胸を満たした。
「適当、すぎるよ……」
静まり返った店内に吸い込まれていく私の呟き。
「パパぁ……ママぁ……」
ただ静かに泣き続ける。そんな私を梓さんは黙って抱きしめてくれた。嗚咽が泣き声に変わるのは、それから間もなくのことであった。

「ありがとうございました」
あれからどれだけ泣いたのだろうか。涙腺の痛むを目を擦りながら梓さんにお礼を言う。いきなり押しかけて、いきなり泣き出して彼女にしてみれば大迷惑だっただろうに。
「いいのよ、当然のことをしただけですもの」
「そう言ってくれると、嬉しいです」

「お姉ちゃん大丈夫？」
梓さんの横で蛍が心配そうに私を見てきた。あんな大声で泣けば上にいる彼女にも聞こえて当然で泣いている最中、大慌てでこちらに飛んできたのだ。
「あ、ああ」
気恥ずかしさをごまかすように頷く。私は今日出会ったばかり（正確には違うが）の二人の前で大泣きするという恥ずかしい姿を見られてしまったわけである。見られるだけならまだいい。恥ずかしいのは二人がかりで慰められたことだ。
「恥ずかしいところを見られてしまったな。これでは年上失格だ」
頭を撫でられたり背中をさすられたり、まるで幼い子供のようにあやされ恥ずかしいったらありはしない。
「いいよ、お酒入って泣きじゃくる人とか見慣れてるし」
そう言って蛍が笑った。流石居酒屋の一人娘。人間の醜態には慣れているらしい。まあ何にせよこんな姿を見られてしまったのだ。この二人にはしばらく頭が上がらないだろうな。
「あの……祥子ちゃん」
私が胸の中で暴れる羞恥心を退治していると、梓さんが意を決したような表情でこちらを見つめきた。とても真剣で優し気な目だった。
「よかったら、うちに住まない？」
「……え？」
突然すぎる提案。私と蛍の口があんぐりと開いた。この人は何を言っているのかわかっているのだろうか。
「貴方は恩人の大事な娘だし、なにより祥子ちゃんには親が必要だと思うの」
「いや、そんな……」
店内を見回す。言い方は悪いが決して裕福な家庭とは言えない。人一人育てるだけでも凄まじい負担だというのに、更に何かと金が掛かる女子高生なんて住まわせるのは常識で考えて無理がある。
「お金のことなら心配しないで、こう見えても経営は上手くいってるのよ。贅沢はさせられないけど貴方が一人で生きていけるようにな

るまで面倒を見るくらいはできるわ」
「で、でも……」
　この眼は本気で言っている目だ。こんなことを言われたのは生まれて初めてだ。梓さんにはなんのメリットもない。いくら友人の娘だからといっても限度がある。
「それとも、私達と暮らすのは嫌かしら？」
「そ、そんなこと！」
　そんなことあるわけがない。本当に短い時間しか話してないけれど、二人といてとても温かい気持ちになったのも、抱きしめて慰めてくれた梓さんに母性を感じたのもどうしようもない事実だった。
「ママ、お姉ちゃんうちで暮らすの？」
「まだ決まってないわよ。でも、そうなったらいいなあって思ってるわ。蛍はどう思う？」
「私も、お姉ちゃんなら別にいいよ」
　二人は示し合わせたかのように温かい瞳で私を見つめた。目尻に再び涙が滲んでいく。この人たちは知り合ってまだ一日も経ってないのに、なんでこんなに優しくしてくれんだ。
　この人たちなら……そう思ったその時だった。
「……携帯？」
　短いバブレーション、これはメールだな。私は二人に一言断ってから携帯電話を取り出した。画面には予想通りメッセージが一通届いていた。送り主は……あかり。
「そうだった……まだ連絡してなかったな」
　メッセージを開く。今何処にいるのか、夕ご飯が出来た事、もし食べてくるのなら一言言ってほしい……内容は酷く簡潔で事務的だが、私は文章を打つあかりの心配そうな表情を幻視した。
「ふふ、そうだったな」
　思わず笑みを零す。心は決まった。私はあかりにメッセージを送り、改めて二人を見た。蛍がどこか期待するような眼差しでこちらを見ている。その目に少しだけ罪悪感を感じた。
「まずはお礼を。面倒を見ると言ってくれてありがとうございます。

本当に、嬉しかった。でもお気持ちだけで十分です」
「そう……理由を聞いても？」
　その問いに私は家で帰りを待っているだろう姉のことを思い浮かべた。戦うことしかできなかった独りぼっちの私を妹のようにかわいがり、愛情を注ぎ、家族としてずっと一緒にいるとまで言ってくれた。そんな大好きな姉のことを。
「帰りを待っている姉がいるので」
「あかりちゃんって、子？」
「はい、血は一滴も繋がってないし、苗字だって違う。出会ってからまだ二年しか経ってない。だけど、私の大好きなお姉ちゃんだ」
　申し出は嬉しいけれど、私には既に家族がいる。独りになんてできるわけがない。ちなみにあと一人家族になる予定の男がいるが、それはまた別の話である。
「だから、大丈夫です」
　ゆっくりと頭を下げる。それに私にはまだ血のつながった家族が二人いる。本当の家族を放り出して義理の家族に逃げるのは違う気がするのだ。
「頭を上げて祥子ちゃん。気持ちは十分わかったわ。突然変なこと言ってごめんなさい」
「いえ、梓さんが本気で私のことを思ってくれたのはわかってます。だからそんなこと言わないでください」
「ふふ、わかったわ」
　見つめ合い、お互いに笑う。言葉はもう必要ないだろう。目を見ればわかることだ。さて、そろそろ帰るとしよう。待っている人がいるからな。腹も減ってきた。早く夕飯を食べたい。
「あっ」
「どうしたの？」
「ヨーグルト、買い忘れた」
　沈黙、二人が噴き出したのはそれからしばらくしてからのことだった。

「またね祥子ちゃん」
「はい、今日は色々ありがとうございました」
軒先でわかれの挨拶を済ませる。本当はもう少し話したいこともあるが、もう営業時間にさしかかっている。二人に迷惑を掛けるわけにはいかない。とっとと帰るとしよう。それに話があったらまたお邪魔すればいいだけだしな。
「何か困ったことがあればなんでも言ってちょうだい。私の知り合いに凄い人達がいて大抵のことなら解決してくれると思うわ。もうすぐ来るんじゃないかしら」
「わかりました。その時は遠慮なく相談しますね。あ、そうだ」
メモを取り出し家の連絡先を書き記し梓さんに手渡す。
「家の番号です。何かあったら連絡してください。こう見えても荒事は得意なので」
「ありがとう。もしお店の手伝いとかが必要になったら連絡させてもらうわね」
あれ、別にそういう意味で言ったわけではないんだが……まあいいか。やるべきことは終わった。いい加減帰るとしよう。
「お姉ちゃん、また来てくれる？」
「ああ、絶対に遊びに行くよ」
少し屈んで蛍の頭を撫でると嬉しそうに目を細めた。本当にいい子だ。絶対に遊びに行かなければな。決してお姉ちゃんと呼ばれるのが嬉しくて行こうと思っているわけではない。
「では私はこれで。失礼します」
一礼して歩き出すと二人は手を振って私を見送ってくれた。本当に温かい家族だった。私もいつか家庭を持ったらあんな温かいものにしたいものだ。
寒い外気に反比例した温かい気持ちを携えて歩き出す。心なしか足取りも軽い。泣いたり笑ったり、本当に忙しい一日だった。悩んだり寂しがる暇なんてない。改めてそう思う。
「我々の新しい仕事も軌道に乗ってきたし、そろそろ梓さんを口説い

てもいいんじゃないか？」
「いや、そういうのはもっと土台を作ってからするべきネ」
反対側から賑やかな話声が近づいてくる。観察してみれば四人の男たちがわいわいと話し込んでいた。中国人に白人が二人、そしてくたびれた中年が一人。もしかして梓さんの店の常連なのだろうか。
「そうだぜ、若い奴等の恋愛じゃないんだ。蛍ちゃんも纏めて面倒見切れるくらい器量よくならなくちゃな」
「そうでしゅ、今日の仕事だって三人ともグダグダだったでしゅ」
「「てめぇは鼻くそほじってただけだろうが!!」」
なんというか楽し気な連中だな。足捌きといい身にまとう雰囲気といい（一名を除いて）明らかに堅気じゃないが、裏の世界に関わる者特有の仄暗さを感じない。多分大丈夫だろうな。
「ん？　なんだい嬢ちゃん」
ちょび髭の白人と目が合う。どうやら見ているのがばれたらしい。凄い察知能力だな。私も元は裏の人間だしどう出てくるか。
「いえ、楽しそうだなって」
男たちが目を細める。私の微かに残る血の匂いをかぎ取ったのかもしれない。ごまかすつもりもない。聞かれたら素直に答えればいいだけだ。
「……そうかい」
が、剣呑な雰囲気はすぐに霧散した。単に気のせいだと思ったのか、それとも詮索するべきではないと悟ったのか、恐らくは後者だろうな。
「もう暗い。気を付けて帰りな」
「ええ、ありがとうございます」
再び歩き出す。あの連中は多分殺せんせーを狙っていた殺し屋か何かだ。きっとどっかのお節介に手入れでもされて足を洗ったのだろう。でなければあんな楽しそうに笑うことなどできない。
「さて、私も帰りますか」
スキップしながら歩きだす。そんな冬の日の出来事。

「ただいま！」
「お帰りー！」
やっぱりこの家が一番だ。

放課後　蛇足の時間

『起立！』

良く言えば木の温もりに囲まれた趣のある教室、悪く言えば埃まみれの古臭い教室の中、日直の号令に従い私と２８人のクラスメイトが一斉に立ち上がる。

『気を付け！』

教室の前方、黒板の前に置かれた教卓に向けて突きつけられる二十九の銃口。ライフル、ピストル、ショットガン、各自が思い思いの武器を手にたった一人のターゲットに向けて銃を構えた。

ハンドガードとグリップを引き寄せストックを肩に押し付ける。頬をチークパッドに押し付けレッドドットの赤い光点をターゲットに合わせセーフティ解除。人差し指をマグウェルに添える。

張りつめる緊張の糸、額から滲んだ冷汗がこめかみ、頬を伝い顎先から垂れ落ちた。銃口の先は1ミリメートルたりともぶれず、ただ冷静にターゲットの心臓を狙い定める。

『礼！』

号令、張りつめた糸がはち切れ明るい殺意が爆発した。耳をつんざく二十九挺の銃声。視界一面に大量のボールベアリング弾が残像を残し飛び交う。

並みの人間なら反応することすら叶わない濃密な弾幕。そんな地獄の中でもターゲットは黄色い残像と共に華麗に避けていく。

『カルマ君』

銃声に混じってターゲットがいつものように生徒の名前を呼ぶ声が聞こえた。そして同じように銃声に混じって隣にいる男の声が耳にこびりつく。

『磯貝君』

銃声に負けない力強い返事。本当いつも元気だな。銃を撃ちながら感心していると、引金にキレを感じなくなる。弾切れだ。すぐさま銃を左にスイングし弾倉を弾き飛ばつつマグポーチから予備弾倉をマグウェルに叩きこみボルトキャッチを押し込む。

『臼井さん』
誰かの苗字を呼ぶ声を無視しひたすら銃を撃ち続ける。ターゲットの動きを予測し、裏をかき、意識の隙間に致命的な一撃を叩きこむために頭をフル回転させる。それが楽しく、楽しくて、ただ楽しい。
『……臼井さん』
返事が返ってこないようだ。もう一度苗字が呼ばれる。臼井とやらは早く返事したほうがいいのではないか。それとも今日は休みか。まあいいか、逸れていた思考を戻し発砲を再開させる。
『……臼井！』
さっきから臼井臼井と呼んでいるが、いったい臼井とは誰だ？　どうしてここまで懐かしい思いに包まれるのだろうか。
というか、私は何故こんなことをしているんだ？　だってこの光景は……
「祥子!!」
「うわっ！」
肩に感じる軽い衝撃と共に意識が覚醒する。反射的に動かしてしまった頭がガラスにぶつかり痛みが走った。
「いたっ!?」
目を白黒させ周囲を見渡す。洒落た調度品、ワックスの掛かった綺麗な木のテーブルとその上に置かれた湯気の立つコーヒー、そして……
「大丈夫？　さっちゃん？」
さっきまで目の前にいた姿よりずっと成長した陽菜乃。その隣には桃花。なら私の隣にいるのは……
「寝てた？　祥子」
横に座った凛香が笑いながら私を見つめる。彼女もあの教室に居た時とは違い随分と女らしくなっていた。今の凛香を見て人形のようだと思う人間など何処にもいないだろう。
「……う、うん？」
意識がまだはっきりとしない。ちょうどコーヒーが目の前にある。カップを手に取り口の中に流し込む。苦みとカフェインによって意

識がはっきりとした。
「よし、大丈夫。ちょっと寝てたみたい」
「ほんとに大丈夫？　疲れてるんじゃない？」
凛香が左手を伸ばし私の額を触る。薬指に嵌められたプラチナリングの冷たい感触が少しだけ心地よかった。
「熱はないっと。何かあったの？」
「ああ、昨日浅野先生にこき使われてさ。復帰したばかりだっていうのに相変わらず容赦ないんだよねあの人」
「そう言えば祥子ちゃん昼間働いてるんだっけ」
桃花の言葉に頷く。私は、最近わりと本気で世界征服できるんじゃないかと思い始めた塾長（魔神）のことを思い浮かべ、苦虫を噛み潰した。
家が近いからすぐに呼び出されるし仕事でも毎回少し無理すれば成し遂げられるギリギリのラインを提示してくるのだ。お陰で常に研鑽を続けなければならないので正直参っている。
まあ、生徒の相手をするのは楽しいしちゃんと給料を貰えるからいいんだけどさ。
「昼間は特にすることもないしな。暇を持て余して太るくらいなら働いた方がいいだろう？」
「太るとか言わないでよ。最近ちょっと気にしてるんだからさ」
凛香がお腹をつまんで嫌そうな顔をした。他の二人も似たような顔だ。仕方ないか、私達もう良い歳だしな。
「だったら鍛えればいい。ちなみに私は今でも腹筋が割れてるぞ！」
「なんでそんなドヤ顔なの……」
「だって家で筋トレしながらテレビ見てると文句言われるんだもん……」
いいじゃん別に、逆立ちで腕立てしながらテレビ見たって……。あいつはなんであんな文句言うんだろう。もしかして自分が出来ないから妬いているのか？　なんだ、可愛いじゃないか。
「あ、そうだ聞いてよー！　私最近3キロも太っちゃったんだよねぇ。ケーキとかあんま食べてないのに」
「確かに、陽菜ちゃん前会った時より顔がちょっと……」

「もう！　桃花ちゃん怖いこと言わないでよー」
　相変わらず仲の良い二人に凛香と二人で笑う。もう随分と長い付き合いになるのに、この二人はいつもこんな調子だな。
「そう言えば凛香、さっき私のこと臼井って呼んでなかったか？」
「そうだったっけ？」
「あまり覚えてないけど、夢から覚める寸前にそんなふうに呼ばれた気がする」
　臼井と呼ばれなくなってから随分と経ったせいで気付くのに時間がかかってしまった。いつもの呼び方だったらすぐに目が覚めたのに。
「夢？　どんな夢見てたの？」
「中学の夢だ。いつもやってただろ？　朝礼の一斉射撃」
「うわ、それ懐かしい！　確か毎朝やってたよね」
　桃花とじゃれあっていた陽菜乃が私の言葉に目ざとく反応し興奮気味にキラキラとした目を差し向けた。
　あの小さくて可愛らしかった陽菜乃が今では二児の母なんだから、世の中不思議なものだと思わざるを得ない。まあそれを言ったらここにいる全員が子持ちなんだがな。
「結局あれ当てられたことあったっけ？」
「律が一発当てただけで、それ以外全部避けられてた気がする」
「掃除が面倒だから途中から止めたよな」
　私の話を皮切りに皆で久々の暗殺トークに興じる。やれあの時どうしただの、面白いことやどうでもいいこと、色あせないあの一年の思い出を語り合う。
「……あれからもうすぐ二十年なんだ」
　凛香がしみじみと呟いた。そう、あの教室を卒業してからもうすぐ二十年になる。これまで語り尽せないほど色々なことがあったけれど、私達は相変わらず友達を続けていた。きっとこのまま死ぬまで友達だろうな。
「思い返してみれば本当にあっという間だったな」
「うん、そうだね」

あの時に比べれば肌のハリは減ったし体力だって明らかに衰えた。まあ私に関しては鍛えているから大して変わらない気がするけど。
今でもフルマラソンくらいなら余裕だしこの前も公園の鉄棒で大車輪してたら近所でしばらく噂になってあいつに笑われた。あの子はキラキラした目で見てくれたのに。
「ふふ、私達ももうすぐおばさんだな」
「戻りたい？」
「まさか」
笑いながら首を振る。あの時は最高に楽しかったけれど、今も存外悪くない。なくしてしまったものは多いけれど、手に入れたものはそれ以上に多い。今更戻ってやり直すなどこちらから願い下げだ。
「そろそろ私は帰るよ」
左腕に巻いた厳ついダイバーウォッチの文字盤を眺め皆にそう言った。これ以上遅くなると留守番させる羽目になってしまうからな。ただいまと言っても返事が返ってこない家になんてするものか。
「もう帰っちゃうの？」
陽菜乃が名残惜しそうな顔をする。かれこれ二時間近く駄弁っているのにまだ話足りないのか……やっぱり何年経っても陽菜乃のこういうところはよくわからないな。
「ああ、あの子も帰って来るころだしな」
「そっか、じゃあしょうがないね」
「そんな寂しそうな顔するな。どうせ日曜の同窓会で会えるだろうに」
「はーい」
まあ気持ちはわかる。皆それぞれの人生がある。もう昔のように気軽に会うことはできない。今日だって半年ぶりの再会。名残惜しいのは私だって同じだ。
「そう言えば来週の同窓会、先生達三人とも来れるって」
「まあ二十周年だしね。来なかったら私達全員怒っちゃうよ」
「やったー！　久しぶりに略奪のチャンスだー」
陽菜乃が冗談とも本気もつかない顔でそう言った。陽菜乃はもう

結婚しているだろうに。よくわからないが、アイドルに対する感情と同じ様なものなのか？
まあ万が一（絶対にありえないけど）烏間先生に手を出そうとしても先生の妻に妨害されるだろうから心配いらないだろうけどさ。
「じゃあ私は行くよ。またねみんな」
「ばいばーい！」
手を振って歩き出す。次に会う時は全員揃ってだな。いつかみたいにバイクで派手にお姉ちゃんを迎えにいくのもいいかもしれない。いや、それは旦那（渚）の役目か。
「さて、と」
早く帰るとしようか。愛しの我が家へ。

「到着っと」
駐車場に停めた愛車の隣にサイドカー（ウラル）を停めエンジンを切る。エンジンから発せられる温かさを感じながらヘルメットとグローブを脱ぐ。太陽に反射して左手の薬指に嵌めた指輪が輝いた。
「もうそろそろかな」
真後ろの戸建てに歩きながら腕時計を見る。大丈夫だ。まだ時間はある。そんなことを考えているうちに見慣れた扉が目の前にやってきた。いつものように鍵を取り出してロックを解除する。
「ただいまー」
扉を開け玄関に入り込む。声を掛けるが人の気配はない。よかったちゃんと間に合ったようだ。飛ばした甲斐があったな。ご近所の目が痛いのが玉に瑕だけど。まあ好きだから仕方がない。
「時間あるし、プリンでも作ろっかな」
台所に向かいながら何をしようか考える。最近ようやくお姉ちゃんよりも上手に作れるようになったんだよな。
いや待て、プリンを作るのもいいがその前に洗濯物取り込まないと。朝から干しっぱなしだ。いい加減乾いているだろう。あと風呂掃除もだ。

「今日はあいつも早く帰って来るし、久しぶりに全員で――」
３４歳になっても相変わらず衰えるどころか鋭さを増す感覚が家に近づいてくる気配を察知する。いつもの気配、聞き慣れた呼吸音、可愛らしい足音……どうやらあの子が帰ってきたようだ。
直ちに踵を返し玄関に向かう。そうこうしている間にも気配はみるみる近づきそして……
「ママ、ただいまー！」
扉が勢いよく開き小さな影が入って来る。開いていた扉が閉じられ逆光で見えなかった顔が視界に映りこむ。影の主の顔を見ると自分の顔が笑顔になるのがわかった。
「おかえりー！」
しゃがみ込み両手を広げ待ち構える。間髪入れずに赤いランドセルを背負った黒髪の小さな頭が飛び込んできた。
「――ッ!?」
子供らしい加減知らずの全力タックルに思わず肺から息が漏れる。やっぱり二年生にしては力持ちだ。いったいどこの誰に似たのだろうな。
「ママ見て見てー！」
「ん、どうしたんだ？」
頭を撫でながらたくさん遊んだせいでボサボサになっていたポニーテールを手櫛で整えているとキラキラとした瞳で私を見てきた。
そして左手に丸めて持っていた画用紙を私の前に広げる。多分絵を見せてくれようとしてくれてるんだろうけど……
「どうしたの？　ママ」
「それ、逆さまだぞ」
「……あっ」
私の指摘に少しだけ恥ずかしそうに頬を染めると、くりくりとした琥珀色の瞳をぱちくりさせ逆さまだった絵を回転させた。何となく昔の私を想い出して笑みが零れる。
「はい！」
「どれどれー」

絵を受け取ってじっくりと眺める。クレヨンで書いたのだろう、赤髪の男と長い黒髪を白いリボンで縛った女、そして黒い髪に琥珀色の目をした女の子が描かれていた。まあ、今更誰かなんて聞くまでもないな。

「学校でパパとママと私かいてきたんだー！　えへへ、にてるでしょ！」

「うん、そうだな……」

絵を握る手が震える。笑顔の両親の間に満面の笑みを浮かべた女の子……絵に描かれた私たちはなんの偶然か、在りし日に私がパパとママと撮った写真と全く同じ構図だった。

「あれ、おかしいな……」

視界に映った絵が滲んでいく。悲しくなんてないのに両目から涙が溢れ出す。

「ママ？」

「ううん、なんでもない。ありがとう、凄い嬉しい」

絵をそっと横に置き我が子を抱き締めた。壊れてしまわないようにそっと優しく、だけど絶対に離してしまわないようにしっかりと抱きしめる。そうしている間にも涙は止まることを知らずに襟を汚していく。

「ママ、どこかいたいの？」

「ううん、大丈夫だよ」

「でも、ママないてる……」

どこか不安そうな声色で私を心配する。確かにこの歳じゃまだそういうのはわからないよな。

「涙ってね、嬉しい時も出るんだよ……」

「うーん、よくわかんないや」

「いつか、真理子（まりこ）もわかる時が来るよ」

この子ならきっとそう遠くないうちに理解することができるだろう。戦うことしかできなかった私でさえ理解できたのだ。心優しいこの子が理解できない道理がない。

「生まれてきてくれて、ありがとう……」

ありったけの感謝を込めて己の魂よりも大切な私達の宝物を抱きしめる。パパとママもきっと今の私と同じような気持ちで私を抱き締めてくれたのだろうな。今ならわかる。
「ママ、くすぐったいよぉ」
「あ、ごめん」
慌てて身体を離す。涙はいつの間にか止まっていた。後であの絵飾っておこう。それと、あのことも言っておかないと。
「真理子、今日パパ早く帰ってこれるって」
私がそう言うと笑顔の花が咲いた。まあ最近会えなくて寂しいって言ってものな。あいつに帰ってきたらもう少し早く帰ってこれないか聞いておこう。まあ、多分大丈夫だろう。
「ほんと！　やったー！」
「そうだ、せっかくだからみんなでレストラン行こうか！」
「いくー！　私ハンバーグ食べたい！」
「そっか、ハンバーグだな」
溢れ出る喜びを抑えきれずにランドセルを放り投げスキップしながら歩き出す。妙に食べ物が好きなのも何処の誰に似たのやら……って、手を洗ってないじゃないか。
「リビング入る前にちゃんと手、洗うんだぞー！」
「はーい！」
今日も我が家に楽し気な声がこだます。そんなどこにでもある家庭の、どこにでもある日常の出来事。
「あ、洗濯物取り込まないと」

おしまい